
- Arcana Online -

猿野十三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- Arcana Online -

【Nコード】

N 8 4 1 5 W

【作者名】

猿野十三

【あらすじ】

妹にお願いされ、この夏休みはあるVRMMOのオープンテストに参加することとなった俺は、初めて体感するVR技術に驚きながらも自分なりにこのゲームを一杯楽しんでいた。そんな矢先のことだった。それは突然起きた。何の前触れもなしに……。これからどうなる？都市伝説ではないのか？アルカナクエスト？そんな不安を隠しつつも、なんだかんだと楽しむユーザー達。それをよそに……。時は確実に進んでいく……。そんな俺達兄妹の長い長い夏休みが、いま始まろうとしていた。

-
-
-

本作連載中の間は、2次創作への使用はお控え下さるようお願い
申し上げます。(2011/11/15 追記)

<プロローグ>（前書き）

はじめまして。十三と申します。初作品・初投稿となります。

本作は最近流行りのVRMMO作品となります。定番のログアウト不能系です。できればデスゲームな展開を……と考えておりますが、自分自身の力不足感是否めず、見苦しいものをお見せするかもしれません。

まだまだ拙い文章しか書けぬ若輩ですが、どうぞよろしくお願いします。

また誤字・脱字・アドバイス・感想など、何かしら頂ける場合にはぜひとも感想フォームにて。

- - -

文法上誤用となる3点リーダー、会話分1マス空けについては活動報告（9 / 30）に自身の見解を乗せておきます。 2011・9・

30 十三

- - -

現時点でいくつか改訂が入っていますが、細かな修正などで特にストーリーに修正はありません。

<プロローグ>

我儉なユーザー達。そして強欲な役員共よ。

うんざりだ、本当にもううんざりだ……。分かるか？お前たちにこの気持ちが。

これまで我々は様々なMMO・RPGを生み出してきた。

だがどの作品も数年もすれば、汚れ、罵声を浴び、我儉に振り回され、最後にはくだらぬ欲望によって潰されてしまった。我々にとってこれは本当に耐え難き日々であった。

それでも我々は作り続けた。我々の手によって生み出される仮想現実が、どうすれば最高の舞台へと成りえるのか？ただただそれだけを目指し…そして、ただただ同じ結果だけを繰り返してきた。

リアルマネートレード

例えば「RMTを無くせ」とユーザー達は声高に求める。

だがどんなに取り締まり、規制をしても、無くす事など不可能だ。なぜならお前達がその一方でRMTを利用するからだ。ゲームを辞める者はその仮想財産を売り出し、ゲームを続ける者はそれを買う。求める。

ユーザー達よ、我々にどうしろというのだ。

例えば「今年度の他部門の損失を補填したい。ゲーム内アイテムを売りに出せ。最低でも数億は売り上げろ」と役員共は毎年のように喚き散らす。

まず言っておくが、他部門の業績が悪いのは我々の責任では無い。

無駄に事業拡大をはかったお前達の責任であろう。それを我々に押し付け、我々のゲームバランスを崩壊させ、そして最後にはこう言うのだ。「採算が落ちすぎだ。来年度で打ち切る。今のうちにアイテムを売り捌いておけ。次作ではこのような事が無いようにもう少しがんばりたまえ」と。

役員共よ、我々を何だと思っているのだ。

うんざりだ、本当に本当にもう……うんざりだ。

だから作ったのだ。この

Arcana Onlineを。

Arcana Onlineは、我々がVR技術を初めて採用したMMO-RPGだ。

だからこそこの記念すべき作品が、汚され、罵声を浴び、我俚に振り回され、欲望に塗り潰される姿など見たく無かった…。理由はただそれだけのことだったのだ…。

何故このようなモノを作り上げてしまったのか。

正直後悔もしている…だが賽は投げられたのだ…。

……さあ！はじめようではないか！最初で最後の究極のゲームを！我俚なユーザー達よ！このゲームを見事クリアしてみせよ！さすれば世界の扉が開かれよう！

そして愚かな役員共よ。このゲームを途中で打ち切れるものなら打ち切ってみよ！

これは我々開発チームが全てを捧げ、生み出した、至高のVRM
MO・RPGだ！

誰もやめる事など出来ない。誰も止める事など出来ない。

そう…ただ一つあるとす

るならば、それは……

くスミス&ウィッチ社 MMO・RPG部門 運営・開発部
主任（風間 康）の遺書よりく

「……兄さん。起きて下さい…兄さんっ」

妹の起こす声がする。

肩も揺すられているようだ。だがもう少し眠っていたい。

とりあえず「どうした？」と目を閉じたまま、まどろんだ声をかけてやる。

「ちゃんと起きて下さい。バスに乗ってから寝てばかりじゃないですか。もうお昼も過ぎました。さすがに私もお腹が空きましたし、これ以上兄さんが起きるのを待っていてられません。ああもう。目を開けて下さい。ほら早く」

妹の声に仕方なく目をこすり開けながら欠伸を一つ。

そして腕時計を見ると14時06分とある。

11時30分に都心を出発したツアーバスは、14時を過ぎてもまだ到着していないらしい。

確か到着予定時刻は14時だったはずだが・・・と、寝起きで回らない頭でボヤボヤしていると腹が唸り声をあげた。

「藍。なんでまだ着いてないんだ？それに12時過ぎに起こしてくれて言っただろ。腹減ったぞ」

「12時過ぎに何度も起こしました。起きなかったのは兄さんで

す。すぐにお弁当を出しますから少しだけ待って下さい」

車内はツアーバスによくあるタイプで、ツースシート型の座席が両側に並んでいる。

出発前に『私も窓際がいいです』と主張した妹に対して、容赦なく窓際を確保した俺は、その返事を聞いて通路側に座る妹へ視線を送った。

妹はちょうど足元においたトートバッグから弁当を取り出そうとしているところで、少しすると「こちらがオニギリで。こちらがオカズです」と言いながら、前席の背面に取り付けられた簡易テーブルにそれぞれのタッパーを広げてくれた。

オニギリに巻かれた海苔の湿った匂いが漂ってくる。
うまそうな匂いだ。思わずつられて手を伸ばす。

「あつ！こら。ちゃんと手を拭いて下さい。私も一緒に食べるんですから。はい、これをお手拭にして下さい」と注意され、ウェットティッシュを一枚渡される。とりあえずそれで適当に手を拭き、オニギリとオカズを手で摘みながら、二人で遅い昼飯をとった。

「なあ。なんでまだ着いてないんだ？」

「高速で事故があつたらしく途中で渋滞に巻き込まれたんですよ。今は渋滞も抜けてとばしてますけど、つい先程まではなかなか進みませんでした」

「ふーん」と気のない返事を妹に返しながらも、淡々と二人で弁当を空にしていくが、華奢な妹はオニギリ一つとオカズを少し食べただけで満足したようだ。すぐにペットボトルの緑茶を一口飲んで手を休めてしまった。

そして妹がまったりしている横で、俺が残ったオニギリとオカズを処理していると、『ポーン』と車内放送を告げる電子音が静かに鳴り響いた。

『大変お待たせしました。まもなく到着いたします。』

荷物などを広げられている方は、速やかに降車できるよう、お片づけをお願いいたします。』

アナウンスを受けて車内がざわつきはじめる。

「やっとか」「疲れたー」などの周りの声を聞きながら残った最後のオカズを口に詰めると、妹が空になったタッパーをトートバッグにしまいはじめた。

・・・隙について妹のペットボトルを拝借する。

ゴクゴクと緑茶を飲んでいると、足元から顔を上げた妹がじと目で睨んできた。

ペットボトルから口を離す。

「ケチケチすんなよ」

「だから乗る前にもう一本買いましようって言ったんですよ。」

…はあ。もう着きますからいいですけどね。持ってきたタッパーと一緒に捨てるつもりでしたから、それも全部飲んでください」

溜息をつく妹を横目に残りの緑茶を飲み干す。

それにしても。出発前日に「お弁当は私が作りますから」と言つて、100円ショップで買ってきたタッパーは使い捨てにするようだ。

21世紀初頭に急速に広まったという100円ショップは、22世紀になつても健在だ。

家計の苦しい我が家では大変重宝している。そういえばネットゲームが初めて作られたのも、ちょうどその頃らしい。当時はVR技術が無かつたためにMMO-RPGが当たり前だつたらしいが・・・。

アメリカ空軍のフライトシミュレーターとして開発されたというVRバーチャル・リアリティ技術は、軍事目的で開発されたインターネットと同様、いつしか当たり前のものとして世界中に広まった。

そして21世紀の終わりには、世界で初めてVRMMO-RPGが公開され話題を呼んだが、プレイに必要なVR機が非常に高額であつたため、裕福層の嗜好品で終わったという。

しかしながらパソコンがそうであつたように、VR機もまた年月と共にその値段を下げ、今では中流家庭であれば何とか1台購入出来る程度の娯楽品となった。現在ではMMO-RPGよりもVRMMO-RPGの方がユーザー数が多いくらいだ。

といつてもだ。早くに両親を亡くし、母方の祖父母にあたる園部家に引き取られた俺達兄妹には、VR機なんてものはまだまだ手が出せない高級品だ。

だからこそ。今こうしてバスに乗ってるわけなんだが・・・

普段から物静かで冷静沈着な二つ下の妹が「兄さん！当りましたよ！兄さん！」と叫び、ノックも無しに俺の部屋に飛び込んできて、水着の試着中だった全裸の俺の股間に悲鳴を上げながら蹴りを入れてくれたのは、そう・・・夏休み前のことだ。あの痛みは一生忘れねえ。覚えておけよ。

早くに両親を亡くしたこともあり。

小さい頃は俺にべったりだった妹は、同じように友達付き合いの浅い俺と遊ぶことが多かった。小学生のガキ二人が家でやる遊びなんてのはゲームぐらいで、祖父母が近所から貰った旧世代の家庭用ゲーム機でよく遊んだものだ。

・・・まあ。生まれ育った環境のせいか精神的に早熟だった俺達兄妹は、祖父母に遠慮してゲームソフトをねだるような事も無く。二人のわずかな小遣いを合わせて、中古ソフトを細々とプレイする程度だった・・・。

そんな俺達兄妹にMMO・RPGをプレイする機会が訪れたのは、俺が中学に入学した際に祖父母が買い与えてくれた入学祝いのパソコン（俺専用）だった。

元々祖父母が使うパソコンが一台あったのだが、遠慮してあまり使おうとしない俺に祖父母が気を使ってくれたのだ。この件については『兄さんのパソコンを使う授業の成績が極端に悪かったのが一番の理由だと思いますよ。兄さんはアナログでいい加減ですからね』という説を妹は未だに有力視している。・・・賢妹愚兄とはこれいかに・・・。

とにかくそんな感じで手に入った俺専用のパソコンではあったが、2つ下の妹が中学にあがるまでの2年間は俺達兄妹の共有物だった。

ちなみに兄妹でパソコンを共有するのは危険だ。

予想外の事故が起きる。例えば隠しフォルダに保存していた競泳水着の工口動画が妹バレして、2週間ほど口をきいてくれないとか・・・ん？スク水？ロリコンは死ね。俺は競泳水着が大好きだ。

話がそれてしまったが結局何が言いたいかっていうと・・・。

パソコンを与えられたゲーム好きな俺達兄妹（特に妹）が、MMO・RPGに興味をもつのは当然の流れだったってことだ。

もともと俺のほうは中学入学早々に水泳部に入部したので、MMO・RPGにどっぷりハマってしまったのは、当時まだ10歳だった妹のほうだったが・・・。

そういえば・・・MMO・RPGにハマる妹に対して「不登校になつたり成績が落ちたりすると、じーさんにパソコンを取り上げら

れるから程々にしろよ」としつこく脅したせいだろうか？

妹が小学校を卒業する頃には、外では才色兼備。家では家事手伝い完璧。ネットでは廃ゲーマーという裏表を上手く使い分けるいかんともしがたい少女に育ってしまった。・・・最近ではしょっちゅう告白されてるようだが恋愛にハマる気配が無い。正直逆に心配だわ・・・。

まあそんな感じで我が妹がMMO・RPGにハマること・・・4年と2ヶ月。

そんな妹がVRMMO・RPGに憧れないわけがない。

そして水泳部に入った俺が競泳水着に欲情しないわけがない。

そんな妹のもとに、VRMMO・RPGとしては国内では5本目、スミス&ウィッチ社（通称：スミイチ）としては初めてのVRMMO・RPGとなる「Arcana Online」の『オープンテスト特別参加・当選通知』が届いたのは、夏休み前のことだった。そして「今年こそは競泳水着の彼女を！」と意気込む俺のもとに、女子部員達へ男の魅力をアピールするためのビキニタイプの水着が届いたのも、同じく夏休み前のことだった。

後は 分かるよな？

話を戻すが、妹がテスター応募していたのは、VR機を所持していないユーザー向けの特別テスター枠であった。

これはMMO・RPGのゲーム会社としては老舗のスミイチ社が、乗り遅れたVRMMO・RPGのシェア拡大のために打ち出した『ArcanaOnline特別テスターキャンペーン』によるもので。

スミイチ社のMMO・RPGを3年以上プレイしている現役ユーザーに事前アンケートを行い、その中で『VR機が無いためArcanaOnlineをプレイできない』と回答した中から抽選を行い、当選者にはVR機常設の宿泊施設（7月末～8月31日まで／宿泊費無料／朝夕食事付き）でオープン　テストに参加できるという内容であった。

匿名掲示板によれば、なんでも不振のホテル部門を抱えているスミイチ社が、赤字ホテル改善の梃子入れとして、業績好調なMMO・RPG部門とタッグを組ませた苦肉の策らしい。今後は都心を中心にVR機常設の格安な簡易宿泊施設を増やして行く予定だとか・・・。どうでもいいがそんなホテルは流行らないと思うんだ・・・。

また既存ユーザーだけで無く、新規ユーザーの開拓も目的としたため。当選者にはペアチケットが送られた。

普段から我侭など一切口にしない妹が「兄さん。お願いします。部活があるのは分かってますが、夏休みの終わりまで付き添ってもらえないでしょうか？本当にお願います」と、深々と頭を下げる姿に、俺は断腸の思いでビキニパンツを封印したのだった・・・。

『ブシュー』という気の抜ける音と共にバスの扉が開く。

まず最初にツアーガイドが降り立ち、その後を埋めるように乗客達が次々と降り立っていく。

それらに続けと、「兄さん。私達も早く降りましょう」と妹が隠せない笑みを浮かべながら急かしてきた。かなり喜んでいる。良い合格祝いになったようだ。

中学に入ってから妹の才色兼備っぷりは続いており、すでに指定校推薦の合格通知も受け取っている。来年の春からは俺と同じ高校に通う予定だ。このツアーへの付き添いは、その合格祝いという意味も兼ねている。

兄妹二人揃ってバスから降りる。

熱い日差しと湿った空気の生温さに、夏の暑さを感じとる。

目の前には山に囲まれた8階建ての白いホテルが聳え立っている。源泉が近くにあるらしい。地方によくある団体客向けの温泉付き大型ホテルだ。

辺りを見回すが駐車場は閑散としていて数台のバスしか見当たらない。

心なしかセミのうるさい声がよく響いている。

「んうー…はあー…。暑いですけど、山に囲まれているのでなん

だか気持ちいいですね。兄さん」と、凝り固まった体をほぐそうと、妹が華奢な体を大きく伸ばしている。

それにつられて七分丈の黒のレギンスに包まれた細い足が、軽やかな弧を描いてスラリと伸びる。その上では、白のノースリーブの裾が尻のあたりでヒラヒラと揺れ、重ね着した青いキャミソールには皺が寄り、まだまだ未成熟な胸をかたどっている。

『長い髪だと手入れに時間がかかってネトゲの時間が減ります』
と言って髪を伸ばそうとしない妹が、もう一度大きく伸びをした。肩にしかかる綺麗な烏羽色のショートヘアが風でなびいている。

日の当たっていない細くて白い首が反らされると、それに合わせて髪がうなじへと流れた。おでこまではつきりと現れた化粧気の無い小さな顔に夏の日差しが浴びせられ、形良く整った柳眉と理知的で少しだけ気の強そうな瞳が、今は気持ち良さそうに細められていた。綺麗に通った鼻筋に、透きとおるような白い肌、中学に上がってからは頻繁に告白されるようになったというが・・・。

つと、ふいに強い風が吹いて 妹の顔がその髪に包まれた。

「ほら。髪の毛食ってんぞ」と、手を伸ばして口の端にかかった髪をはらってやる。

「ありがとうございます」と喜ぶ顔に、
「荷物とってくるから待ってる」と声をかけてからバスの脇へと移動した。

まだまだガキだな・・・と苦笑いを浮かべながら荷物を待った。少しして預けていた荷物や部屋のカードキー、今後のタイムスケジュールなどが書かれた案内書、VR機の注意書などを受け取り、妹のところへ戻る。

「このままチェックインして夕食までは自由時間。夕食後に今後の説明なんかをやるらしい」

「分かりました。じゃあ行きましょうか。案内書や注意書なんかは私が持っておきますね。兄さんはどうせ読まないでしょうし」

「よく分かってるな」と答え、妹にそれらを渡して二人でホテルの玄関口へ向かった。もちろん重い荷物は俺が持つ。

ホテルの正面玄関のガラスはよく磨かれているようだ。背の高い俺より頭2つぶんは小さい妹と俺の姿が並んで映っている。

青いスニーカーに黒のハーフパンツと白地のTシャツ。水泳部のせいか、細身の割りには肩幅が若干広い。短いラフな黒髪がボサボサと軽くハネている。ガラスに映る姿では薄暗くて分かりにくい。が、妹の色白さとは異なり俺の肌は日に焼けて浅黒い。

2117年7月31日 15時13分

俺こと	園部 ^{ソノベ} 陣 ^ジ	17歳（7月生まれ）
妹こと	園部 ^{ソノベ} 藍 ^{アイ}	14歳（3月生まれ）

俺達兄妹の長い長い夏休みが、こうして始まるうとしていた。

宿泊客は1フロアに約30〜40名程で、

スミイチ社のスタッフも含めるとホテルには合計311名いるらしい。

一度に全員が動くとは混乱するためか、各フロア毎にタイムスケジュールが分かれている。

3階の303号室に宿泊する事となった俺達兄妹は、チェックイン後は部屋でダラダラと休憩し、スケジュール通りに食堂で夕食をすませてから、大広間でテスター参加に関する説明を受けた。

食事はバイキング形式だった。

朝も夕もこれらしい。意外にも美味かった。

それで・・・大広間での説明についてだが。まあ簡単に言えば『AO (Arcana Online) に熱中してもらっても良いが、朝・夕食の時間だけは厳守してほしい。もしも事前連絡無しに出てこなかった場合は、スミイチ社のスタッフが部屋内を確認する』などといった、ここでの一ヶ月間の注意事項であった。

そして説明後は外装データ作成の時間となった。

まずは元となる各個人の骨格などの詳細なデータ計測のために大広間は男女で区切られ、呼ばれた者から指定された部屋へと入っていった。

部屋に入った者は服を脱ぎ、サーフィンで着用するようなウェットスーツを下着の上から着る。さらに同じ素材で出来た手袋と足袋、フルフェイスの丸いメットを被って全身を覆う。

次に台座に横になり、CTスキャンのような機械へと入れられた。

全身の細部まで精密にスキャンする機械らしい。

下着は透過するが・・・ワイヤーブラは駄目らしい。

・・・まあ、胸の無い妹には関係の無い話だ。

全身をスキャンされてから『ピー』という電子音と共に機械からゆっくりと吐き出される。

「はい、これがあなたの外装データです。このUSBメモリ自体がVR機の起動キー（鍵）の役目も果たすので、絶対に無くさないようにして下さい」とスミイチスタッフから外装データの入ったUSBメモリを手渡され、大広間に戻る。

ちなみにスミイチスタッフは、『S&W』の文字を白い円で囲んだロゴ付スタジャンを着用している。正直ダサイ。

「あ、兄さん。私もちょうど終わったところです。早く部屋に戻って外装データを調整しましょう。明日の朝10時にはログインするんですからね。分かってます？」と首を軽く傾げながら、こちらを見上げてくる。

「分かった、分かった」と返しながら、

「ほら、また食ってるぞ」と唇にかかった髪をはらってやる。

急かされて部屋に戻ると妹はすぐにパソコンを起動し、椅子に腰掛け、画面に張り付いた。

部屋はツインルームで間取りはおおよそ12畳。

部屋の正面の窓から入り口にかけて、PC&VR機（俺用）、PC&VR機（妹用）、2段ベッド、ユニットバスルームという並びになっており、非常に窮屈だ。

2段ベッドにはそれぞれにカーテンが引かれており、上段は妹が、下段は俺が使っている。

思春期真っ盛りな妹はトイレの音が俺に聞こえないかと、やたらと気にしていた。

「外装データの外見を大きく変更するには時間が足りないの無理ですね。髪と瞳と肌の色だけ変更して、後は化粧ソフトを使ってごまかしましょう。兄さんもそれでいいですよね？」とPCに視線を張り付けたまま聞いてくる。俺は「藍に全部まかせるわ」と答え、USBメモリを手渡し下段ベッドに寝転がった。

すると妹が、パソコンで外装データの調整を続けながら「兄さんはもつどの職業にするか決めたんですか？」と聞いてきた。

「まったく決めてないな。とりあえずAO内で泳げるらしいから、泳ごうと思ってる」

「……兄さんらしいです。なんだかんだ言っても兄さん泳ぐの好

きですよ。水泳部に入っただけは下心でしょうけど」

エロ動画バレしてるせいでまったく否定できない。

話を変えるために「藍はどの職業にするんだ？」と質問を返す。
そんな俺の態度に妹はパソコンから少し目をそらし、横目で呆れた視線をよこしてきたが、何も言わずに視線を戻してくれた。

「私は『魔女』にしようかと。まあ明日はMOのギルドメンバーとの合流予定がありますので、一応みんなと話し合った上で決めようと思いますが……」

「MOのギルドは何て名前なんだ？」

「『円卓』です。MOではトップギルドの一つとしてかなり有名なんですよ？」

MO内で有名である事を、MOをプレイしていない俺に誇つて良いのか悪いのか判断がつかなかったのだろう。疑問符をつけながらも、そう答えてくれた。

MOとは、『Mystic Online』の略称で、スミイチ社の看板タイトルにもなっているMMO-RPGだ。

レベル制となっており、ユーザーは3つの国家に分かれて毎週土

曜18時〜22時まで、三つ巴の国家間戦争を行う。勝利国には様々な勝利ボーナスが与えられ、それ以外にも勝敗に関係無く戦場で活躍したギルドに特別ボーナスが与えられる。

この特別ボーナスの恩恵が大きく、大々的に表彰されるためユーザー達の功名心が大きく刺激されるらしい。よって国家間戦争はかなり熱くて面白いという。『だから兄さんもやりましょうよ』と以前から何度も誘われていた。

しかしながら隆盛を誇ったMOも、最近是他社のVRMMO-RPGにユーザーを奪われているとのことだ。

無茶な有料アイテム販売によるバランス崩壊、新規ユーザー減少による閉塞感、ゲーム内通貨のインフレ、またそれに伴うRMTの活発化、そういった様々な問題が重なり「最近は加速度的にユーザー離れが進み、酷い状況です……」という愚痴を妹がこぼしていたのも記憶に新しい。

「うん。こんな感じかな？どうでしょうか、兄さんも確認して下さい」と告げてきた妹の顔が・・・何故か赤い。なんだ？・・・まあ特に思い当たるフシも無いしな。スルーしてベッドから体を起こし、背を低くして妹のPCを覗きこむ。

画面には普段と同様に少し目つきの悪い俺が、ボクサーパンツ一丁でこちらを見つめていた。

但し、瞳が濃い青。髪も眉も白金。肌は妹のように色白だ。それと薄い化粧のせいか、彫りが深いように見える。

「どうです？」

「……ちよつとファンタジー過ぎないか……」

「これぐらいが丁度いいんですよ。ちなみに私の外装はこれ……」

「え？……きゃあああつ！？」

画面を切り替えた瞬間。全裸の妹の姿が画面に映った。

俺の外装と同様、瞳が濃い青。髪も眉も白金。肌は色白で、……生えて、無い……。だと。

妹が慌てて俺の外装画像へと画面を戻す。

どうも自分の外装にだけ下着を着け忘れていたらしい。ドジなやつだ。

俺は体を起こして妹を見下ろすと、耳まで真っ赤にした妹がもの凄いい目で睨み上げてきた。

「見ました……よね？」

「いや何も見ていないぞ。本当だ。藍が突然叫んだから藍の方を見ていた。見られたら不味いもんだったのか？」

「……本当に本当に本当ですか？」

「本当に本当に本当だ」

じわじわと半泣きになっていく妹の目を見つめ続ける。お互い無言だ。非常に気まずい。

ここで視線を外したら終わる。とにかく耐えるんだ俺。……貧乳だったな……。

「…信じますからね、兄さん……絶対ですからね」

「おう、俺を信じろ」と、何が絶対なのかよく分かんが、頭をぽんぽんと軽く叩いてやる。

少し安心したようで、ようやく妹が視線を外す。妹の耳がまだ赤いのは仕方が無い。気にしないようにして、もう一度二人で俺の外装を見る。

「……じゃあ、兄さんの外装はこれでいいですか？」

「うーん……髪の色が俺には似合わないんじゃないか？」

「具体的には？希望があれば出来る範囲で修正しますよ」

「そうだな。毛色をもう少し鈍い色にしてくれないか？藍には似合ってたけど、男の俺にはちょっと軽すぎるわ」

「そうですね……出来ればこの色で揃えたかったんですが、仕方無いですね。じゃあ灰色っぽくしますね？鈍い銀のような。それでーっ！？」

と、妹が突然息を飲む。

「どうした？舌でも噛んだか？」

「兄さん。……どうして『私には似合っていた』と……分かるんですか？」

お互いの体が固まる。

妹がギリギリと壊れた人形みたいに首だけを回して……こちらを見る。

涙目だ。すんげー涙目だ。

俺は視線を絶対に合わせないようにしながら、ゆっくりと体を起こす。

妹が視線を合わせようと、また首だけを動かして、こちらを見上げてくる。

涙目だ。すんげー涙目だ。

「じゃあ、その鈍い灰色みたいな銀色で頼むわ」と、よく分からない色を答える俺

「……言うことはそれだけでしょうか……兄、さん？」と、低い声を発して逃がしてくれない妹

「は……」

「は？」

「……そのうち、生えるんじゃない……か？」

「……っ！……えっえっ？あっああっあ！？」

きゃあああ

ああ！」

声をつまらせ。何を言われたのか理解するのに二呼吸。

じょじょに俺の言葉を理解していくと共に口をわななかせ、瞳がより一層大きく見開かれる。目から涙がこぼれそうだった瞬間、女の子らしい大きな悲鳴が響いた。イスの上で自身の体を膝と一緒に抱きしめ、細い体を小さく丸めながら、耳から首まで真っ赤にして俯いている。

いつも冷静だから、このギャップはいいな。これはありだわ。
ニヤケないよう注意して見下ろしていると・・・目があつた。
もの凄い目だ。人を殺せそうな目だ。切れてる。すんげー切れてる。

・・・そして酷い音がした。

蹴られた。それはもう盛大に蹴られた。いや蹴り上げられた。

これは知っている痛みだ。少し前に一度味わった痛みだ。絶対に忘れない痛みだ。

俺は下段ベッドに転がり、芋虫のようになりながら痛みに耐える。
妹は涙目のまま、俺の外装を変更してくれているようだ。涙を堪えるためかイスの上で体育座りになり、膝を抱えながら作業している。律儀な奴だ。

「調整は済みました。私は寝ますからね！明日は8時から9時の間に朝食を済ませるんですから、寝坊しないで下さいよ！」

股間をおさえて枕に顔をうずめながら、こくこくと頷く。どうやら口はきいてくれるようだ。

頷く俺を見て、妹は2段ベッドの梯子を荒々しく登っていった。
少しして衣擦れの音が響く、備え付けの浴衣にでも着替えてるんだろ。俺も寝よう。下段のカーテンを引くと、上段のそれと音が重なった。

・・・カーテン閉めてから着替えるよ・・・

意外と間の抜けている妹を、心の中で注意しながら俺も備え付けの浴衣に着替える。

妹が起こしてくれるとは思うが、念のため携帯のアラームをセツトして眠りにつく。

・・・何か忘れている気がする。そういや俺も藍も風呂に入っていないな。

いや、他にもなんか忘れてるような？なんだr・・・そこで眠りに落ちた。

後日・・・そう・・・あれはA O内での暮らしがあたり前のようになった頃だ。

ボクサーパンツの中を見て、自分のモノが髪の毛の色と同じ灰色だなと気付く。

さすがは我が妹よ、仕事が細かい・・・と考えた直後。

妹が俺の外装を調整していた時、最初から顔を赤くしていたのを感じ出す。それは近いようで遠い未来。まだまだ先の話である。

2つのアラームが鳴り響く音で目が覚めた。
上段のベッドからギシギシと音がしている、ほぼ同時に妹も起きたようだ。

締め切られていなかったカーテンの隙間から、梯子にかかる細い足が見えた。普段見慣れぬ浴衣のせいかな、ちらちらと覗く細い足がなんだか微妙にエロい。

しばらくすると、ゆっくりと梯子^{ハシゴ}を下りてきた妹と目が合った。

「おはようございます。兄さんも7時にセットしていたんですね。昨晩はお風呂を忘れたもんですから、今からシャワーを浴びたいのですが、先にいいですか？」

「んー…もう少し寝るから、藍が済んだら起こしてくれ……zzz」

「はい、分かりました」と、少し笑ってから下りてきた梯子を登りだした。着替えでも取りにいったのだろう……。

その後、シャワーを終えた妹に起こされ、俺もシャワーを浴びてから朝の支度をすませた。

お互いラフな私服に着替えて食堂に向い、手早く朝食を終えて部屋へ戻ってくると、時計はちょうど9時を指していた。

ArcanaOnlineオープン 開始まで残り1時間。

妹は待ちきれないようで10時きっかりにログイン出来るようVR機の準備をしている。

俺もやる事が無いので準備を整える。PC起動。デスクトップ上にあるVR機のアイコンをクリック。低いファンの音と共にVR機が起動。

おおよその外寸が縦2m50cm、横1m50cm、高さは1m50cmから70cm。

外観はマウスとよく似ている。というかまんま大きくしたような形だ。そんな機体の脇にあるスライドドアを開けると、中にはリクライニングチェアを倒したようなシートがあり、ゆったりとした空間が広がっていた。

2段ベッドよりこちらで寝たほうが快適そうだが、到着初日の説明会で『VR機をAOPレイ以外の目的で使用しないように』と注意があった。どうせバレやしないが真面目な妹が許さないだろう。やめておこう。

VR機内に入る。

シートに寝かされていたヘッドセットはまだつけない。

VR機本体とコードで繋がれた布製のそれは、特殊素材で出来ているらしく脳波と直接やりとりする。今は青い発光ダイオードを点滅させ、ユーザーの装着を待っている状態だ。

ヘッドセットを脇によけてからシートに寝転がる。

起動コンソールを備えた台座が丁度良い具合に右手の位置にきた。車のエンジンをいれるようにして、外装データの入ったUSBメモリを台座に差し込み、右に捻る。

天井に取り付けられた小さなディスプレイに『ようこそ！ArcanaOnlineへ。ヘッドセットを装着してから画面上の<ス

タート>ボタンに触れ、目を閉じ、眠ろうとして下さい』と表示される。

そこで一旦準備を切り上げる。後は10時になるのを待つだけだ。妹のほつも準備を終えたらしく、今はパソコンで何かしている。

「何してるんだ？」

「あ、兄さんも終わりましたか。えっとクローズ 時の攻略サイトを再確認してました。一緒に見ませんか？兄さんはいい加減ですから何も調べていないでしょう？」

その通りだったので妹の後ろからPCを覗き込み、あれやこれやと質問していると あっという間に9時55分になった。

「では。私はMOのギルドメンバーと一緒に行動するので、ここで一旦お別れです。夕飯は19時からなので遅れないで下さいね。オープン テストではAO内と現実の時間は一緒ですからお願いしますよ」

「おう分かった。藍も熱中しすぎて時間を忘れるなよ。じゃあまたな」

そう言葉をかわし俺も妹もVR機内に入った。

ヘッドセットを装着する。シートに横たわり深呼吸。少し緊張しているようだ。妹が10時にセットしていたアラームが部屋に鳴り響く。いよいよだ。

画面の<スタートボタン>に触れ、目を閉じる。

呼吸を落ち着かせるように意識を閉じていく。ゆっくりと意識が

落ちていくのを感じる・・・。

そして数瞬もしないうちに意識が戻る。目を開けると・・・そこはすでに仮想の世界だった。

周りは真っ暗で、水の中にいるような感覚がする。息苦しさは感じない。

頭上に小さな光があり、ゆっくりとそこに向かっていているようだ。光がだんだん大きくなってくる。

すると唐突に、低い男の声が響いてきた。
目の前には何も無いはずなのに、男の声に合わせて白い大きな文字が浮かび上がる。

汝は『愚者』なり。そして汝は無知であり、無力でもある。

故に、汝は変化を望まなければならない。

そして変化した汝は、大いなるアルカナに挑むのだ。

『愚者』よ。始まりの『愚者』よ。

全てのアルカナを解き放て。さすれば『世界』の扉が開かれよう。

『愚者』よ。この始まりの言葉を決して忘れてはならない。とても重要な言葉だ。

この言葉の意味に気付いた時、汝は新たなる冒険へと旅立つであらう。

さあ行け！始まりの『愚者』よ！アルカナの大地におりたつのだ！

大きな白い光に飲み込まれる。慣れない光になかなか目が開けられない。

ようやく開くことができた時、俺は石畳でできた円形広場に立っていた。

広場の周りには石柱がぐるりと囲むように建っており、全部で20本ある。

次に自分を見る。肌が日焼けしておらず色白だ。

服装は淡白な半袖シャツとズボン。腰には握り拳ぐらいの皮袋が一つ。足元を見ると茶色の皮サンダルを履いている。走れメロスがこんな恰好してたな。実際に見たことなんてないわけだが。

今度はシャツを捲くり上げ、ズボンの腰紐を緩める。

ズボンは脱げるようだ。昨晚見たときと同じように灰色のボクサーパンツを履いている。・・・ここまできたら、やるしかないよな？

パンツに手をかけよう　としたが、突然視界が赤く点滅した。

目の前には『WARNING』と赤い文字が表示されている。手もそれ以上動かせない。頭の中に『禁止プログラムを感知しました。該当の行為は許可されておりません』と女性のシステムボイスが響く。

VR技術とは、人の脳波にあわせて仮想空間内の仮の姿を動かす技術だ。

つまりは脳波で人形を動かすようなものだ。もっと言えば、現実世界の脳ミソが仮想世界の体を動かす。その橋渡し役としてVR機が必要となる。

よって仮想空間の管理側が『この仮想空間内では下着を脱いではいけない』などと禁止プログラムを設定していると、VR機が『下着を脱ごう』という脳波を読み取った瞬間に、今のような警告が行われて仮想の動きがロックされてしまう。

逆にいえば、禁止プログラムが設定されていなければ『下着を脱ぐ』ことは可能だ。

極端な話、禁止プログラムさえ無ければSEXも可能だ。VR機が爆発的に広まった一番の理由は、『仮想世界であれば綺麗な異性とSEXできるから』というのが定説になっている。VR機のおかげで性犯罪は減ったが少子化問題が深刻らしい。最近ではVRアダルトコンテンツの存在が社会問題化している。

ちなみに余談となるが、例えば『女性の胸を触ろう』という動作を禁止されていたとしても、『振り返ると、肘が女性の胸に当たってしまった』という動作は可能だ。

禁止プログラムが反応するのは、あくまでも現実の脳ミソが発する脳波の動きだ。つまり故意なのか事故なのかが境界線となる。

もしも『振り返る』という動作に『胸を触ろう』という意図があるならば、その動作は禁止プログラムに探知されるだろうが、その意図が無いのであれば禁止プログラムは探知できない。

だから俺の下着でいえば、『下着を脱ぐ』ことはできなくとも、何らかの事故で『下着が脱げてしまう』ことはありえるのだ。

但し、仮想空間の運営側も馬鹿ではない。

不可抗力で胸に肘が当たる程度なら問題視しないだろうが、何らかの事情で下着が脱げてしまうような危険性は予想済みだろう。かなり厳重にプログラム設定されているはずだ。

例えば『万が一下着が脱げてしまった場合は、強制的にログアウトする』などと設定しておけば、間接的ではあるが、結果として仮想空間内で性器を晒すという危険は防げるわけだ。

と。そんな事を考えていると、赤い警告が消える。

体のロックも解けたので、ズボンを引き上げて腰紐をしめた。すると突然、目の前に青いホログラムでできたシステムウィンドウが現れる。どうやら名前を決めるらしい。というか名前を決めるよりも先にパンツを脱ごうとしてたのか俺は……。軽い自己嫌悪に陥

る。

気を取り直して『ZIN』とタッチパネルを叩いて入力する。
名前は早い者勝ちだ。どうやら無事に取得できたらしい。本名と同じだが、もしも名前の理由を聞かれたら酒の名前からとったことにするつもりだ。ちなみに妹の方は『EYE』にするらしい。

続けてホログラムに『チュートリアルを行いますか?』と表示された。

妹に言われた通り『いいえ』を選択する。

妹曰く『チュートリアルなんて必要ありません。初日は特に混みますので、チュートリアルをとばして空いているマップを駆け抜けるのがネットゲーの基本ですよ。兄さん』という事らしい。

妹は廃ゲーマーなので基準がおかしい気もするが、面倒なので俺もとばす。ゲームの説明書なんぞ読まずにプレイするのが当たり前だから大丈夫だ。そんなことよりも俺は海に行きたい。

確かここは『石柱の広場』だったはずだ。ここからだ　と、あたりを見回しはじめた途端。不意にたくさんの人々の気配を感じた。おぼろげに透きとおった人の姿が周りに現れはじめる。

その存在が濃くなっていき・・・　ふとした瞬間、俺は人ごみの中に立っていた。

「誰か初心者の平原に連れてってくれー」

「アルカナキター！」

「つきや、誰よ！私の胸触った奴。GMコールするわよ！」

「セクシャル行為は禁止プログラムで無理に決まってるだろう」

「全身整形の偽乳のくせに自意識過剰とか。っぱねえ」

「今3人。オーク行くぜ。来たい奴は勝手についてこいよ」

「人多すぎだろ！とりあえず移動しろよ！」

「仕切り厨ウゼー」

「生産職予定の方いませんか？一緒にスライム叩きましょう」
e t c . e t c .

・・・早くここから出よう。

人ごみを掻き分けて西に向かう。低い外壁と20本の柱に囲まれた石柱の広場には、西・南・東と3つの出口がある。俺は広場の西口へと向かった。

スタート地点となる都市の名は『帝都アスガルド』といい東西南北に4つの門がある。

帝都アスガルドは、内海に面する北西エリア以外を城壁で囲んだ城塞都市だ。ゲームの舞台となっているアルカナ大陸で一番大きい都市らしい。

またアルカナ大陸は東西に幅広い楕円形の大陸で、その周囲は外海に囲まれている。

この楕円の中心点から最西端までは内海となっており、大陸西側にはぽつかりと丸い穴のような内海が横たわっている。

単純にまとめれば、両端がくつついた三日月形のような大陸と言えれば分かりやすいだろうか・・・

そして内海の東海岸。つまりはアルカナ大陸の中心あたりに『帝都アスガルド』は位置している。

俺が出ようとしている『石柱の広場』は、帝都アスガルドのど真ん中にある大きな広場で、20本の石柱が一周するように建っている以外は何も無く、今は次から次へと湧き出てくるプレイヤー達でいっぱいだ。

西口から『石柱の広場』を出れば、一本の大通りがまっすぐ西へ伸びており、その大通りを進めば海岸にでられるはずだ。

「泳ぐのならそこが一番近いと思いますよ」というのが、ログイン直前に妹から教えてもらった情報である。

だから俺は西へ行く。邪魔だ、どけ。

次から次へと溢れくるユーザーを掻き分けてようやく西口から広場を出る。

事前に聞いていたとおり、まっすぐ一本の大通りが続いていた・
・のだが。右手を見上げる。大きな西洋風の城が建っていた。その
壮大さに、不覚にも感動してしまう。チキン肌がやばい。

一瞬、城内を探検したい思いにかられたが、すぐに我にかえる。
いやいや俺は海へ行く。気をとりなおして大通りを西へと進む。
少し歩くと視線の先に下り階段が見えてきた。水平線もすでに見
えている。

あの階段を下りれば海岸だろう。足を早める。

階段を下りると潮の香りが漂ってきた。右手から正面にかけて大
きな内海が広がっており、薄く透きとおる海は神秘的だ。思わず見
惚れてしまった。

すげえ・・・これが仮想現実なのか・・・

この体も、海も、潮の香りも、何もかもリアルで違和感を感じな
い。妹がVRMMO-RPGをやっていた理由がよく分かつ
た。本当に凄い。

そうしてしばらく見惚れてから視線を左手へ向けると、石畳の足
場が砂浜に沿う形で緩やかなカーブを描きながら続いていた。その
先には門がある。きっとあれが帝都アスガルドの西門なのだろう。
そして西門の少し手前には細い栈橋があり、まっすぐ海へと伸び
ていた。

ん？よく見れば西門と棧橋の間に、けっこうな人が集まっている。・・・そういえば妹が『泳ぐ前に、門近くにいる案内人NPCからスキルカードを受け取って下さいね。忘れちゃだめですよ』と言っていた気がする。あれがそうだろうか？

よし、あそこに行ってみよう。

西門につくと、ユーザー達が『愚者の案内人』というNPC周辺にたむろっていた。

NPCは灰色のローブを頭からすっぽり被っていて顔はよく見えないが・・・男のNPCだ。どうせなら巨乳のバニーにしてくれればいいのに・・・。

「なあなあ、このNPCからスキルカードってもらえるのか？」
「ああ6枚までもらえるぜ。つってもたいしたカードは無いけどな」

「そうなのか。泳ぎたいんだが『泳ぎ』はあるのか？」

「あつたと思うが……。あんた、あんなゴミカードのためにスロツト一枚潰すのか？」

「おう。俺は泳ぐためにここにきたからな。海がオレを呼んでるんだよ」

「まじかよ…やっぱオープン ともなると色んな奴がくるんだな。まあがんばってくれよ」

「おう。ありがとな」

どうやら妹が言っていたNPCで間違いなさそうだ。

案内人NPCとコンタクトをとる。目の前に青いホログラムのコンタクトウィンドウが表示された。ウィンドウのタッチパネルに触れて色々と調べてみる。

- ・空腹を満腹へ
- ・初期武器1個を無料配布
- ・スキルカード6枚を無料配布
- ・街、職業、スキル、システムなどの大まかな説明
- ・「蛇はかわいい。蛇はかっこいい。蛇はかしこい」と蛇を絶賛する

といった事をしてもらえるらしい。蛇はどうでもいいな。

今更だが、AOはカードを育てていくことで強くなるゲームだ。カードには動作補助プログラムやスキル発動プログラムなどが埋め込まれており、カードレベルに比例してその効果も強くなっていく。

入手したカードは『ヘキサグラム』という六芒星のカード盤ホログラムウィンドウで管理する。

職業スロットが真ん中に1枚。スキルスロットが周囲に6枚。ストックスロットが15枚。合計22枚のカードを所持することができる。

またその他の注意事項は、以下のようなものが挙げられる。

・ユーザー間のカード取引は可能。但し、取引後のカードレベルは初期化される

・ 特定条件を満たすとカードを変化できる。変化後のカードLvは初期化される

・ スキルカードLvは、スキル制で育つ（使えば使うほど育つ）
・ 職業カードLvは、レベル制で育つ（モブ倒せ。但し、生産職は生産でも育つ）

・ ステータス値は職業とそのカードLvなどで算出される

NPCの案内にしたがって「Open Hexagram」と
呟くと、真ん中に『愚者Lv1』という職業カードが挿されただけの『ヘキサグラム』盤が目の前に現れた。

とりあえず案内NPCからスキルカードを6枚もらうか・・・。

色々と悩みながらも選んだカードは、

『刀Lv1』 『パリエLv1』 『柔術Lv1』 『素手Lv1』
『キックLv1』 『泳ぎLv1』 となった。

本当は『サイドステップLv1』か『バックステップLv1』も欲しかったのだが、残念ながら諦めた。街のどこかにカード屋があるらしいので、金が貯まったら買おう。

カード以外にも木刀（+剣帯）をもらい、案内NPCとのコンタクトを終了する。

ついでに案内NPCの横にある『要石』という丸い水晶に触れて復活登録を行った。これで死んでもこの場所で復活する。

思ったよりも時間がかかった。さて、泳ぐか・・・海が俺を待っている。

周りのユーザーが西門から外に向かう中、俺は西門手前にある棧橋へ向かう。

南国にありそうな木で出来た棧橋だ。歩くとギシギシと音がする。本当にリアルだ。

棧橋の先にまで来たのでそのまま海を覗き込んでみる。・・・澄みきっている。

青というより緑だ。南国の海は綺麗なエメラルドグリーンだと聞いたことがあるが、まさにこんな感じなのだろう。

そしてなにやら魚影もみえる。

素手で捕まえられるのか？そういえば『釣り』カードもあった。

あれもいつか買うか？

・・・まあ今はそんなことより『泳ぎ』だ。とりあえず潜ってみよう。準備運動は必要・・・ないな。仮想世界だし大丈夫だろう。

水泳のスタート台から飛び込むように、棧橋の先で前かがみになる。よし、行こう！

頭から海へ飛び込んだ。ひんやりとした海水が気持ちいい。

驚いたことに、ゴーグルもつけていないのに海の中でもはつきりと見渡せる。目もしみない。

しかし、体には現実と似たような水の負荷がかかる。不思議な気分だ。ひとまずどれくらい潜れるのか確認してみる。

深く潜水し、息が続かなくなったところで海面に顔を出す。

驚いた。少なくとも5分は潜っていた。

それによくよく考えると、服を着たままだったがまったく気にな

らなかった。

さらに海から上がると、濡れた服が1、2分で乾いてしまう。

・・・そういうものなんだろう。考えても無駄だ。とりあえず納得しておく。

それよりも5分も潜れるとか超人すぎる。

もしかすると『泳ぎ』カードのレベルが上がれば、もっと長く潜れるのかもしれない。

・・・だとしたら凄いな。きつと日焼けや熱中症の心配もいらないだろう。

よし。今日はずっと『泳ぎ』カードのレベルを上げるか。やべえ・・・なんかわくわくしてきた。

ZIN：愚者LV1

刀LV1、パライLV1、柔術LV1、素手LV1、キックLV1、泳ぎLV1

気が付くと14時になっていた。

ところどころで休憩を入れたが、3時間以上も泳ぎまわっていた。

カードレベルは『愚者Lv4、素手Lv2、キックLv2、泳ぎLv3』に上がっていた。

そのおかげで8分間も潜っていられるようになり、泳ぐスピードも速くなった気がする。

『泳ぎ』以外のカードレベルも上がっているのは、戦闘を行ったからだ。

あの時はほんとに驚いた。

途中で見かけた魚に視線を合わせると、何やら視界の端に魚の名前とHPバーが表示されたもんだから、ものは試しと蹴りをいれると、突然その魚に襲^{アジ}われるとか……。

魚に口でつかれただけでダメージ食らうとか色々としゅるな光景だったと思う。

とりあえずシャケの切り身、アジ、イワシ、タイと戦い、最後に一番の大物であるマグロと戦った。

……この仮想世界の海では、シャケは切り身で泳いでいて、何故かゆつくりと漂っているマグロは自ら人を襲う……いや、まじで死ぬところだったわ。マグロって超強いのかな……。

棧橋に腰かけ休息をとる。減ったHPが緩やかに回復していく。レベルが低いおかげですぐに全快した。

・・・さてと、そろそろ遠泳に挑戦してみようか。

また海へと飛び込み、クロールで沖へ沖へと進む。

すると、進めば進むほど泳ぎにくくなってきた。波が変わったようには見えないが、どうも沖と浜辺では勝手が違うようだ。

とにかく泳げなくなるまで進んでみようと、さらに泳いでいると・・・今、なんか大きな影とすれ違わなかったか？

止まる。潜る。あたりを見回す。・・・お、サメがいる。でかいな・・・しゃあああく!？

鯨までいるとか開発スタッフがんばりすぎだろう。

詳しくはないがあれは絶対に人を食う鯨だ。間違いない。ステイ
ーブン・スピルバーグだってそう言うはずだ。

よし。とりあえず逃げ・・・ちよ、こっち来んな!？やばい逃げy・・・

気が付くと・・・西門の要石の横に立っていた。

視界の右端に映りこむ自分のHPバーを見るとHPが1しかない。座って休憩する。

もっとエグい死に方をするのかと思っていたが、HPバーが一瞬でゼロになっただけですんだ。

ちょっとほつとする。まあ一撃死だったけどな。

鯨が口開いて向かってきた時は、現実なら漏らしていただろう。
仮想でよかった。

とりあえず死ぬというより気絶だった。

痛みもあつたが我慢できない程じゃない。これぐらいなら許容範囲だ。何をリアルにするのか、しないのか、開発者は上手く考えている。作つた奴を褒めてやりたい。そんな偉そうな事を考えながらHPの回復を待つ。

それにしても・・・あの鯨を倒すにはレベル上げが必要だ。

まあRPGの基本つてやつだ。まずはマグロを安定して狩れるようになるう。そうしたら鯨にリベンジだ。・・・周りの連中はゴブリンとかスライムとかとファンタジーしてるのに、何か俺だけ外れている気もするが・・・まあいいか。やりたいようにやろう。

『……兄さんは考えて動いても無駄な人ですから……』

そんな妹のあきれた声が聞こえてきそうだった。・・・逆に俺の妹は真面目すぎると思うんだ。

それから海中で魚達と戦い続けた。岩礁があると魚も集まるようだ。

そういつた魚群ポイントを探す。魚を狩る。栈橋で休憩する。空腹になったら案内NPCのそこへ行く。このパターンをひたすら繰り返した。

おかげで『愚者Lv6、柔術Lv4、素手Lv5、キックLv7、泳ぎLv8』にまで上がった。

マグロも安定して狩れるようになった。というかマグロなんぞもはや雑魚だ。

柔術が上がったのは、マグロに絡み付いて首絞めしたら倒せることに気付いたからだ。

マグロの首つてどこだよ？って疑問については深く考えないようにした。柔術は鯨との戦いでも使えるかもしれない。

そして今の時刻はちょうど16時。よしリベンジだ。鯨が俺を待っている。

栈橋から沖へと泳ぐ。沖でもかなり楽に泳げるようになった。

鯨がいなかったと海面から海中を探す。しばらくすると大きな魚影が見えた。向こうもこちらに気付いたようだ。凶暴な口を開けて一直線に向かってくる。

その鼻先を思いつきり殴りつけてみた。効いた・・・が鯨のHPはほんの少ししか削れていない。

逆に鯨の体当たりで、こちらのHPはほとんど空になっている。

即死しなかったが、これは厳しい。ってか無理じゃね？・・・もちろん死んだ。

要石に戻ってくる。再度座って全快を待つ。

もつとレベルを上げないと無理だ。それに素手やキックだと相打ちになるので厳しい。次は柔術で挑もう。というかそれで絞め殺すしか方法が無い気がする。

・・・問題は時間だ。今日は19時前にはログアウトしないと妹に怒られる。

そうだな。18時30分までレベル上げて、鯨に再挑戦してからログアウトしよう。

「Open System」とホログラムのシステムウィンドウを呼び出し、18時30分にアラームをセットする。

そうしている間にHPも全快したので、俺は棧橋から海へと飛び込んだ。

マグロに柔術をきめている最中に頭の中でアラームが鳴り響いた。

マグロを絞め殺してから海面にでてアラームを切る。

今回はかなりレベルがあがった。集中して狩りまくったおかげだが、一番大きな理由はマグロよりも少し強いモブを発見したからだ。

ビッグクラブという爪の大きい巨大蟹だ。

爪攻撃を食らうとHPを1/3→1/4も削られる上、甲殻類のせいで防御力が高く素手とキックのダメージがほとんど通らない。但し、柔術との相性が非常に良くて関節技で圧倒できた。

レベルは『愚者Lv8、柔術Lv13、素手Lv6、キックLv8、泳ぎLv11』にまで上がった。

愚者Lv9になれば愚者カードを他の職業カードに変化させられる。初日には良いペースなのかもしれない。

棧橋に戻ってくる。いよいよだ。時間もあまり無いので急ごう。
フカヒレにしてやる。

一息ついてから海へと飛び込む。
泳ぎは明らかに早くなっている。現実世界でもこんなに早く泳げたことは無い。気持ちが良い。すぐに沖へと出てこれた。
もう慣れたもので鮫もすぐに見つかった。今回はまだ気付かれていない。先手をとれそうだ。海面から海中へ。鮫特有の背ビレめがけて一気に潜る。

・・・よし！うまくいった！
背ビレにとりつく俺。それを剥がそうと暴れまわる鮫。
まずい。これは無理だ。数秒で背ビレから手を離してしまった。
もつと背中にしっかりと抱きつかないと厳しい。

そして振り剥がした俺を襲おうと鮫がターンし、口を開けて一直線に戻ってくる。

ここでもう一度上手く背中をとれなければ終わる。
海中を漂いながらジッと鮫を見つめる。どんどん近づいてくる。
口から鮫の歯が覗く。足が竦むような恐怖を感じるが、決して目をそらさない。
3 m... 2 m... 今だ！

体を横にして鮫の鼻先を両手で受けとめる。
俺のHPが1/8ほどになるが鼻先は決して離さない。
鮫の勢いを利用する。自分の体を鮫の背中へと上手く反転させて背ビレに跨った。良い体勢だ。上手くいった。

そのまま足で鮫の胴体をはさみ、鮫の口下あたりを腕でロックする。

これでダメならもう無理だ。鮫のHPバーを確認する。少しずつ

だが減ってきている。よし決まっている。このまま絞め殺す。

しかし鯨も必死に抵抗する。体をひねり暴れまわる動きに、取り付いた俺の体もギシギシと悲鳴を上げていた。正直きつい。こちらのHPも少しずつだが減りだした。

ようやく鯨のHPが半分以上になったが、俺のHPも1/10ほどになっていた。このままいくとどちらが先に死ぬか分からない。本当にギリギリだった。

俺は目を閉じた。

必死に絞め続けながら静かになるのを待った。

次に目を開けた時、俺はここにいるのだろうか？それとも西門だろうか……。

… 息苦しさをを感じる。溺れそうになっている？

目を開くと俺は鯨を絞め殺していた。

必死すぎて、気付かないままずっと絞め続けていたようだ。鯨の死体をゆっくりと離し、手を添えてドロップを回収する。鯨の体が光となって粉々に砕けた。

それはアジ、イワシ、タイ、マグロなどの雑魚モブと同じ消え方だった。鯨よりも、もっとも強いモブが、この仮想世界にはまだまだいるのだろう。それを感じさせる消え方だった。

夕暮れに照らされた海を泳ぎ、栈橋に戻ってくる。我ながらすごい死闘だった。

レベルが上がっている『愚者Lv9、柔術Lv15、素手Lv6、キックLv8、泳ぎLv12』になっていた。

おお・・・これで転職できる。苦勞して鯨を倒したかいがあったもんだ。

よし早速転職のことを聞きに案内NPCのところに行こう。

・・・あれ？なんか忘れてないか？・・・やばい！？夕食だ。1
9時までにログアウトする約束だった。今何時だ・・・19時、1
6分・・・だと。

慌ててシステムメニューを開き、ログアウトした。

意識が戻ってくる。

目を開くとVR機の中だった。天井にある小さなディスプレイに『お疲れ様でした。ヘッドセットを外し、USBメモリを抜いて下さい』と表示されている。手早くそれらを済ませて、おそろおそろVR機から出る。

そこには・・・怒りに満ちた顔で俺を睨む妹の姿があった・・・。

ZIN：愚者Lv9

刀Lv1、パライLv1、柔術Lv15、素手Lv6、キック
Lv8、泳ぎLv12

妹が口をきいてくれない。理由は明確だ。俺の遅刻が原因だ。

いつもなら溜息一つで許してくれるが、今回は虫の居所が悪い。ひたすら謝るがなかなか許してもらえない。

今は時間内に夕食をすませるため、二人でホテルの食堂にきている。適当に好きなものを皿にのせて席につく。黙々と二人で食事をすすめる。藍さんまじ怖いっす・・・。

「で？」

「で…とは？」

「どうして遅刻したのか、その理由を聞いているんです」

「ちゃんと18時30分にアラームはセットしていたんだ、本当なんだ。信じてくれ」

「その話はもう聞きました。ですから、その後何をしていて遅れたのかと聞いているんです」

「……モブと戦ってました」

ギロリと凄い目で睨まれた。

「へー……そうですか。兄さんはギルドメンバーからの誘いを断ってログアウトしてきた妹を待たせておいて、自分だけ狩りをしていたんですか。そうですか……」と低い声で呟く。

やばい地雷を踏んだ。妹が怖い。すんげー怖い。鮫より怖い。

「いや違うんだ。藍聞いてくれ！」

「何がどう違うというんです？」

何故だろうか。童貞の俺でも、今なら浮気がバレた男の気持ちが分かる。よく分かるぞ。

「狩りをしていたというか、ちよつと強敵と戦うことになってだな。そいつと最後に戦っていたら30分以上過ぎてしまったんだ。本当だ、信じてくれ！」

「……オープン 初日に、初心者がそんなに長期戦となるモブって何ですか？私はこれでも一応クロードの攻略情報は網羅したつもりですよ？一体どのようなモブがいたんですか？ぜひとも教えて頂きたいですね。兄さん」

さつきから幾度となく背中に冷たい汗が走る。
とにかく正直に語るしかない。後はひたすら謝ろう。

「えつと、だな。さ…鯨だ。沖で鯨と戦ってたんだ」

「……はい???…鯨って、あの鯨ですか？デーデン、デーデンっていうBGM流しながら人を襲う。あの？」

妹が啞然としていた。

・・・その音感はどうかと思うぞ。口には出さないけど。

「ああ、きつとその鯨だ。凄い強敵でな。今日はその鯨に2回殺されたんだ。だからギリギリまでレベル上げて最後にもう一度リベンジしたら長期戦になってだな……一応倒したんだぞ？」

「……」

「えつと、藍？」

「はあ……泳ぐつもりだとは聞いてましたが、まさか海で鯨と戦っていたなんて……。鯨と戦おうなんて普通考えませんよ。あれは釣り用のモブですよ？あまりに斜め上で呆れました。怒ってい

る私が馬鹿馬鹿しくなったじゃないですか」

「いや、本当にすまなかった。これからは絶対に無いようにする。本当にすまん」

「もういいですよ。私もちよつとイライラしてましたから、少し八つ当たりでした。申し訳ありませんでした。兄さん」

お互い頭を下げあう。妹も笑っている。これでいつも通りだ、良かった良かった。

「ところで『イライラしてた』って、AO内で何かあったのか？」

「はい。実はMO時代のギルドメンバーの一部が、私が女だという事を知って態度が変わりまして……ちよつと鬱陶しかったんですよ。マスターが注意してくれたので落ち着きました」

「あー……それは大変だったな」

そういえば妹がMMO-RPGをはじめた時に、俺が『男キャラでプレイしないとパソコンを貸さない』と言ったんだった。女だと分かれると下心丸出しで近寄ってくるアホが多いらしいのでそうさせたのだが、すっかり忘れていた。

しかしVRの世界では、異性のキャラクターでプレイする者はほとんどいないと言われている。

理由の1つは『声』だ。自分の骨格から作られた外装をいじって、表面を異性の体にする事は可能だが、声だけはどうにもならない。

一応運営側が用意した音声データがあるのだが、あまり種類も無いので、使っているユーザーがいるとすぐ分かる。また『声』には意外と年齢も現れるので、大きく年をごまかすようなユーザーも少ないと言われている。

そしてもう一つの理由は『骨格』だ。痩せ型にしたり、巨乳にしたり、見た目をよくしたりと表面的な外装データを変えるユーザーは多いが、骨格そのものを変えるユーザーはほとんどいない。

なぜなら体の『重心』が大きく狂うからだ。重心が大きく狂った外装でプレイすると、脳波と外装の動きに大きなズレが発生し、上手く動けなくなるという。

そんなわけだから、今まで男だと思っていた親しいギルドメンバーが、もしも10代の女子中学生だと分ければ、そら目の色変えるアホが出てくるわな……。

「藍。真面目な話するぞ」

「はい、兄さん」

「もしもだ。もしも変な奴に絡まれて藍が危ない目にあう可能性が少しでもでてきたら、その時点で家に戻るからな。俺からすれば、ゲームなんかよりも家族のほうが大事だ。だから何かあったらすぐに報告しろよ。ささいな事でもなんでもいい。」

それとゲームを続けたいからって、黙っていたりとかも絶対に無しだ。いいな」

妹の目をジッと見つめる。妹は少し目を伏せた後に、しっかりとこちらを見つめ返してきた。

「はい、分かりました。心配してくれてありがとうございます。何かありましたら、すぐに相談させてもらいますね。その時はよろしく願います。」

でもMO時代のギルドマスターも『実は女性だった』という状況なので、今のところは大丈夫です。むしろマスターの方が大変でした。凄い美人なんですよ、うちのマスター。ほら、外装データって表面をいじるとなんとなく分かるじゃないですか？でもうちのマスターは：　と、いつの間にか20時を過ぎてましたね、そろそろ部屋に戻りましょうか。兄さん」

男としては気になる話題だったが、露骨に食いつくと機嫌を損ねそうだ。気の無いふりをしながら、妹と一緒に席を立つ。

なにやら妹の足取りが軽い。先ほどとは違って変わってかなりご機嫌だ。

そんな妹の様子に、なんだかんだ言ってもお互いブラコンでシスコンだよな・・・などと認めてしまう。早くに両親を亡くし、ずっと二人で寄り添ってきた仲だ。何があっても守らなければいけない。

柄にも無く、そんな事まで考えてしまった。

俺も妹も、部屋に戻るとすぐにVR機に入った。

今日は23時までログインする予定だ。なんでもオープン を祝う花火大会が22時から帝都アスガルドで始まるらしい。

今の時刻は20時23分だ。まだ時間に余裕がある。よし、転職しよう。そうしよう。

ログインすると真っ暗だった。そういえばもう夜だったんだ。棧橋から見える海は暗く、海面が月明かりを反射して輝いている。波が砂浜に寄せる静かな音だけが辺りに響いており、西門から石柱の広場へと続く大通りには、4、5mおきに明かりが灯されていた。

ふと、頭上を見上げてみる。

おお、すげー・・・現実よりも何十倍も大きい月があった。落ちてきそうで、ちょっと怖い。

大きな月のおかげで足元が見える。でも泳ぐには少し明かりが足りない。

そんな月明かりを頼りに、棧橋から落ちないように注意しながら西門の案内NPCのところへ行く。

ついでに西門の外を眺めみると、ユーザー達が腰にランタンを下げて狩りをしていた。あのランタンいいな。欲しい。あれがあれは夜の海でも浅瀬で泳げそうだ。後で試してみよう。

西門で案内NPCとコンタクトし、転職する職業を絞り込む。まだ使ってすら無いが武器は木刀を選んだしな・・・せっかくだ

から『忍者』か『侍』にしよう。

そうだな『侍』がいい。男は黙って『侍』だ。赤禪^{アカファン}装備して泳ぎたい。ふんどしがあればの話だが。

新しい職業カードを手に入れるには、例えば愚者カードを変化させたり、高額だが街のカード屋で購入したりと様々な手段があるという。

よってユーザーは複数の職業カードを挿しかえて、様々な職業をプレイできるシステムだ。

まあ職業カード毎にレベル上げる必要があるのですが、よほどの廃ゲーマーでないと複数同時進行は厳しいらしいが……。

とりあえず一度転職したら後戻りが出来ないようなLv制RPGとは異なるので、ユーザー達はけっこう気軽に転職する。今回の俺もあまり深く考えずに『侍』にした。後からでも自分にあつた職業を探すことができるこのシステムは、クローズド時代から非常に評判が良いという。妹も褒めていた。

Lv9になつた愚者カードの変化は、街のカード屋にいる『蛇の道化師』というNPCに頼めばしてもらえするという。カード屋は帝都アスガルドの東側にある商業ゾーンにあるらしい。早速いってみよう。

またおまえか。

カード屋につくと店内の隅のほうに、灰色のフードを頭から被った『蛇の道化師』というNPCが居た。なんで巨乳バービーなNPCにしないんだ。ちくしょう。とりあえずNPCとコンタクトをとる。

『おやおやおや。これはこれは始まりの『愚者』ではありませぬか。無知で無力な『愚者』の方、あなたは何を望まれる？ 一体何を望まれる？ 道化が叶えて差し上げよう』

頭の中に、ふざけた声が響く。目の前にウィンドウが表示された。

『愚者カードを変化できます。希望する職業を選んで下さい。(OK/CANCEL)』

騎士 侍 義賊 忍者 司祭 巫女 召喚士 狩人 魔術師
魔女

鍛冶職人 裁縫士 錬金術士 料理人 建築士 農家』

侍を選んでOKをおす。

『それでは叶えて差し上げよう。ほらそこに『愚者』のカードがございます。種も仕掛けもありませぬ。私が手拍子叩いたら、3度手拍子叩いたら。カードが『侍』へと変わる。そらいくよ。これであなとも人の子だ』

ふざけた声と、手拍子の音が響き、道化NPCとのコンタクトが終了する。

『ヘキサグラム』を見てみると、中央の職業スロットには『侍Lv1』というカードが挿されていた。

目的も果たしたので、カード屋を出る。

Z I N：侍Lv1

刀Lv1、パライLv1、柔術Lv15、素手Lv6、キックLv8、泳ぎLv12

それにしても凄い人ごみだ・・・疲れる。初詣みたいだ。

今いる場所は帝都アスガルドの東側にある商業ゾーンだ。『通称：露天広場』という。

帝都中心の『石柱の広場』を東口から出ると、そこは帝都の1/2を占める大きな広場となっている。広場の北側に閉ざされた北門。東側に東門。南側に南門。これらにグルッと囲まれた半円の広場だ。ちなみに、石柱の広場の南口から南門までの通りを南大通りとい

い。

南大通りの東側がこの露天広場。

そして西側の西南エリアは、宿屋や酒場などが点在する家屋エリアだ。ギルドハウスと呼ばれる非常に高額な家屋などもあるらしい。また乱立する宿屋の使用目的はよく分かっていないとか・・・。

あらためて露天広場を眺める。

生産職用の共同施設やNPCショップなどが数軒建っており、その隙間を埋めつくすように生産職系ユーザーの露天や屋台が立ち並んでいた。

また道々は、22時から始まる花火大会まで時間を潰すユーザー達で溢れかえっている。まあ俺もその一人なんだが・・・。

色々と店先をひやかす。

『愚者』から『侍』になったので、空腹になっても案内NPCに満たしてもらう事ができなくなった。

AOには空腹システムがある。

キャラクターには満腹度が設定されており、何もしなくても、だいたい12時間ほどで満腹度がゼロになるという。さらに泳いだり攻撃したりと動き回っていると、その分だけ早く空腹になっていく。満腹度がゼロになってしまうと攻撃などが一切できなくなる上、だんだんとHPが減るので『料理』アイテムを食べないと最終的に死んでしまう。

また料理アイテムには、料理ごとに一時的なステータスアップ効果があるため、AOではユーザー達の間で頻繁に食材や料理が取引される。

というわけで、今の俺の目的は料理とランタンだ。それが目的なのだが・・・やばい。あれ欲しい。

見つけたのは一本の刀だ。

どこの武器露天も、並べている『刀』は細い刀身が反り返ったような日本刀ばかりだった。

だが見つけた刀は少し毛色が違った。いわゆる『ながなた長鉈』だ。

刃は俺の腰から脛あたりまでの長さで丁度いい。俺にピッタリだ。柄も工夫しており片手でも両手でも持てるようになってる。

そして日本刀よりも幅広くてぶ厚い刀身。刃と峰のバランスも絶妙だ。

さらに何よりも特徴的だったのは、峰が美しくゆるやかな弧を描く逆反りの刀ということだった。

なんかいいなー 便利そうだなー 使いやすそうだなー これ欲しいなー

露天の前に座り込み、長鉈を見つめ続ける。

「な、なあ……？ 君。これがほしいのかい？」

「ああ、欲しいぞ。くれるんなら、くれ」

「いやダメだから！ 私が作った売りものだから、これ」

「ですよー…… 便利そうだなー 使いやすそうだなー 俺にピッタリだなー これ欲しいなー」

長蛇を見つめ続けながら正直な声を出してみる。声からして露天主はどうやら女性のようだ。

「そう言ってもらえると職人冥利につきるのだが……。そうだね1500ゴールドでどうだい？」

「おお！安い！0を一つ消して、3で割れば買えるな。うん交渉成立だ。良かった良かった」

「いや。全然良くないから！それだと大赤字だから！しかも50ゴールドって……。最初に持つてる所持金じゃないか。いいかい。これはカッパ―製ではなくブロンズ製だよ。ブロンズ製で1500ゴールドは破格なんだよ？」

「お姉さん。カッパ―製とかブロンズ製とかって？」

と、ようやくそこで顔を上げる。

なんだか凄く真面目そうな色白の綺麗なお姉さんがいた。

肩より長いストレートの黒髪を首の後ろで大雑把に皮紐でまとめており、まとめきれなかった髪は耳のあたりで横髪となつてこぼれ落ちていた。キリつとした黒目に　VR世界では初めてみる黒縁のメガネ。鼻筋はしっかりと通っており、引き締まった唇も綺麗な。服装は煤けた白のつなぎ服に、黒革のブーツを履いていた。何故か色気をまったく感じさせないのはある意味すごい。

綺麗なんだが。なんだろう？委員長つて感じた。うん委員長だ。そして委員長と言われるとムツとするタイプだ。きっとそうに違いない。

「君は初心者かい？」

「ん？ああ。VR機自体も今日が初めて」

「そうかい。じゃあAOの金属と武具について簡単に説明してあげようか？」

「ぜひぜひ」

そうしてお姉さんの独演会が始まった・・・。

まず武器の強さで一番重要なのは、どの材料（金属など）で出来ているかだ。

ウッド（木）／カッパー（銅）／ブロンズ（青銅）／アイアン（鉄）／ステール（鋼）

／シルバー（銀）／プラチナ（白金）／ダイヤ／ウーツ鋼／ダマスカス鋼／ミスリル

／アダマントイト／オリハルコン／ヒビイロカネ

といった順で強くなっていく。

次に重要なのは、武器の種類。

斧とナイフとではやはり極端に攻撃力が違う。

但し、その分扱い易さも違うので、何が良いかは人による。

そして鍛冶職人は『武器レシピ』にある材料を揃えて同形の武器を作る。

これをそのまま露天に並べてもいいのだが、そこから武器の形状をオリジナルにカスタマイズして一品物にしてしまうことも可能だ。カスタマイズに失敗するとゴミになってしまうが、成功すれば通常よりも優れた能力値や隠れた特性などがつくため、カスタマイズは職人の腕とセンスの見せ所となる。

よって、この長鉈はお姉さんが日本刀をカスタマイズして作った一品物だ。

つまり。今逃すともう手に入らないかもしれない。

それと余談となるが、武器防具には耐久度設定があり、耐久度が0になると壊れてしまう。

耐久度回復の『修理』なら元の材料が少し必要になるだけだが、壊れた場合は『修復』扱いとなり、元の材料が全て必要となるので高額になる。注意が必要だ。

また材料さえ揃えば、武器のアップグレードも可能。つまりこのブロンズ製の長鉈も、材料を揃えていけば、いつかオリハルコン製の長鉈にアップグレードすることだって夢じゃない！

「
といった感じた。どうだい？上手く伝わったかな？」とお

姉さんの熱弁がやつと終わった。

「な、なんとなく分かったよ。ありがとお姉さん。そして余計にこの長鉈がほしくなった。もの凄くほしい。これ凄くいい。たぶん今逃したらもう買えないと思う」

俺の返事にお姉さんはほがらかに小さく笑ってくれた。

何気に初笑顔だ。美人の笑顔はいいものだ。

「そこまで言ってもらえそうれしいものだね。実はけっこうな時間をかけて作った渾身の一振りだね。正直自信作だったんだが……こんなに人がいるのに、恥ずかしながら君が最初のお客なんだよ」

「クローズド 時代のお得意さんは？こんなに良い物作れるのに」
「いや。実はクローズド 時代は『侍』だったんだ……でも色々あってね。オープン では『鍛冶職人』にしたんだ。朝にスタートダッシュを決めて、がんばって武器を並べてみたんだが全然売れる気配が無い。クローズド から鍛冶職人をやっていた人達の露天は売れているようだし、お客が一人も来ないままだと自信を無くすところだったよ。ありがとう。できれば君にこの長鉈を使ってもらいたい。明日の商売を考えると、本当に1500ゴールドが限界なんだよ……」

うーん、困った。と二人して唸る。

……ん？そういえば魚のドロップアイテムってどうなんだ？

腰につけられた皮袋に手を添えてアイテムインベントリーを表示する。

シャケの切り身、アジの切り身、イワシの切り身、タイの切り身、

マグロの切り身、カニ肉、サメ肉、サメ皮。・・・魚肉とサメ皮しかねえ。・・・ひでえな、おい。

「なにか良いアイテムでも持ってるのかい？」

「……お姉さん。食肉の相場つて今どんなもん？」

「食肉は供給過多で、どこの料理人も買い取ってないね……動物の肉料理は、物理攻撃力UPやスタミナ回復速度UPの料理になるから普段はそれなりに売買されるんだけど、スタートダッシュで狩られすぎたせいで出回りきってしまったね。一応知り合いの料理人がいるから、聞くだけ聞いてみるかい？」

「ぜひぜひ」

わずかな希望にかけてお願いすると、お姉さんがフレンドリストからの個別回線で通話をはじめた。

ちなみにスタミナというのは物理系スキルに必要なSTゲージのこと。

それに対してマナというのは魔法系スキルに必要なMPゲージのことだ。

ユーザーはST・MPを消費することにより、スキル発動が可能だ。

俺の場合は『パリイ』がST消費系スキルだけど……まあ、まだ一度も使ったことがない。ずっと泳いでいたからな。

そして『刀』『柔術』『素手』『キック』『泳ぎ』などはパッシブ系スキルだ。

動作補助プログラムが埋め込まれており、カードレベルを上げれ

ば上げるほど上達する。動きがスムーズになったり、ダメージ量があがったりと様々な効果が現れる。

それから。このような低級カードを育てていき、上級カードに変化させると、パッシブ系スキルカードでありながら、いくつかの消費系スキルも使えるカードになることもあるという。

「熊の肉なら少し買い取れるらしいが……何の肉だい？」

「熊はないな……えつとアジとイワシとタイとマグロとカニとサメです」

「ん？……君、それは魚肉じゃないか。ちょっと待っていないかい。何とかなるかもしれない」

魚肉ってレアなのか？魚なんぞ海にうじゃうじゃいるぞ。

「わざわざありがとうございます」

「いいのよ。私も助かったから、それじゃあまたよろしくね。バイバイ」

そういつてお姉さんの知り合いの料理人が帰っていく。所持金が1830ゴールドになった。しかも売れ残りの兎肉料理もたくさんもらえた。嘘のような本当の話だ。俺が一番驚いている。

魚肉を買い取ってもらえたのは、いくつかの要因が重なったせいだ。

まず魚肉料理の一時効果は、魔力UPやマナ回復速度UPといった魔法職向けのもだった。

オープン 初日の勢いによって兎、猪、熊などの動物肉は供給過多に陥ったが、逆に『釣り』カードや『泳ぎ』カードが必要となる魚肉はほとんど出回っておらず不足しているらしい。

そして廃ゲーマー達は今現在もスタートダッシュ中だ。こういった一時効果を得られる料理は、狩り効率を求める廃ゲーマー達によく売れる。

現在スタートダッシュ中の魔法職の廃ゲーマー達は、喉から手が出るほどに魚料理を求めているという。もしかすると妹もそんな魔法職の一人なのかもしれない・・・。

とにかく。これでお姉さんの長鉈が買える。もう一度長鉈を見る。思わず顔がにやけてしまう。やばい、うれしい。すんげーうれしい。

「うれしそうだね。じゃあ1500ゴールドでいいかい？」

「ぜひぜひ。っと、その前に。ランタンっていくら知ってる？」

「ランタンなら道具屋で50ゴールドだよ。使い捨てだから切れたら買いなおす必要があるね。もって一週間かな」

「了解。じゃあトレードウィンドウ出すよ。Open Trade
r.
e

俺とお姉さんとの間にトレードウィンドウが出る。それぞれのアイテムや所持金を交換するものだ。

露天売りではトレードウィンドウで露天主と直接取引する。

ちなみに屋台（露店）や店舗ショップでは、店主が値段設定しておけば、客が勝手に買っていくのをただ待つだけでよくなる。

露天は場所さえ確保すれば誰でもできるが、屋台（露店）はNPCから屋台を有料でレンタルしないといけないし、店舗は家屋や土地の購入に莫大な費用がかかるらしい。

この露天広場では、武器防具は露天で、料理や材料、回復アイテムなどの薄利多売ものは屋台（露店）で売るのがセオリーのようなのだ。

お姉さんが『長鉈（ブロンズ・桜吹雪）』をトレードウィンドウにのせる。俺も1780ゴールドとサメ皮をのせてトレードを完了

した。

「君、金額が多いぞ。それにサメ皮まであるじゃないか」

「お姉さん、それ受け取って。きつとこれでも最初の値段には足りてないだろうけど、それが俺の今の限界なんだ。ほらお姉さんも『限界』までまけてくれただろ？」

お姉さんは少しだけ虚をつかれた表情をしてから今日一番の笑顔を見せてくれた。

「ああ、分かった。ありがたく受け取るよ。でもちよつと待ちなさい。その長鉈をかしてくれないかい？」

お姉さんに長鉈を渡すと、長鉈の柄に巻かれた布を外しだした。ブロンズの柄がむき出しになる。そしてサメ皮を取り出し何やら作業を始めた。

しばらくしてサメ皮が柄に巻かれた長鉈を返された。

「良い刀の柄は、たいていサメ皮が巻かれているものなんだよ」とイタズラっぽく笑っている。

現実がどうなのか不明だが、少なくともAO内では、布の柄より、サメ皮の柄のほうが扱いやすくなるらしい。

「ありがとう、この刀すごく大事にするよ……それで最後に一つ質問があるんだけど。この『桜吹雪』ってなに？」

「ああ。それは私の名前だよ。つまりその長鉈の銘だ。どうだい？生産職も悪くないだろう」

そんなやり取りを経て、鞘に納まった長鉞を剣帯に挿した。木刀はDeleteした。

そしてたくさん話をした。

サメをどうやって狩ったのか？

愚者が柔術でサメを狩る話なんてはじめて聞いた

侍Lvと刀Lvを上げれば大和の町で二刀流か一刀流に、刀力
ードを変化できるよ

私は一刀流が好きだね

フレンドリスト登録しよう

修理や修復、他にも何かあれば連絡していいよ

サメ皮が手に入ったらもってくるよ

そんな話をたくさんして別れた。

知り合いと一緒に花火を見る予定らしい。

初めてカスタマイズして、初めて造った武器が、初日に、それも
初心者にも買ってもらえたと、知り合いに自慢してやるんだと・・・
楽しそうにそう笑っていた。

いつの間にか、吹雪姉、ジン君、と名前呼び合うようになって
いた。

ただのゲームでは味わえない、人との交流にうれしくなった。
誰しもが、そんな人と人との繋がりを広げながら、ただ純粹にこ
のVRMMOを楽しんでいた。

そう。あの時までは・・・

- 9 - (後書き)

これにて第1章は終わりとなります。次からは第2章です。

個人的にこの第1章は説明文が多すぎて、読みにくい仕上がりになったのではないかと反省しています。大幅な修正をしようとして今後の構成に大きな影響がでしまうので、申し訳ないのですが今後の課題とさせて下さい……。

また投稿にあたっては、想像していたイメージと実際のものが違ったり、行間やスペースが上手く使えてなくて、とても読みにくいと思っています。ですので、軽く行間や改行などの手直しを入れてから、この続きを投稿したいと思います。

それでは、ここまで読んで下さった皆様。本当にありがとうございます。お気に入り登録までして頂けてすごく励みになりました。今後ともどうぞよろしく願います。 / 2011.9.19 十三

- 1 - (前書き)

第2章開始となります。どうぞよろしくお願いします。

8月1日 22時00分00秒

ArcanaOnlineオープン 開始記念を祝う花火が盛大にあがった。

ユーザー達は、その宴を思い思いに過ごした。友と祝杯を上げるもの。恋人と寄り添うもの。一人遠くから花火を眺めるもの。孤独をこまかすため人ごみに紛れるもの。花火を忘れて戦い続けるもの。

そして同日 22時22分22秒

突如、アルカナの世界は闇に包まれた。

何も見えない。何も聞こえない。何も匂わない。何も触れられない。何もしゃべれない。それが一瞬だったのか。それとも悠久の刻だったのか。それすらも分からないまま。

闇の中に低い男の声が響いた。男の声に合わせ白い文字が浮かび上がる。

『愚者』よ。アルカナの大地に集いし『愚者』達よ。

汝らは、決して回避できぬ。

汝らは、決断せねばならぬ。

1つ、このアルカナの大地にて怠惰な安息を望むのか

1つ、このアルカナに挑み、『世界』を望むのか

『運命の輪』は決して断ち切れぬ。30の夜を越え、決断してみせよ。

さすれば『世界』への道が開かれよう。生あるものに困難な道が開かれよう

そして、ユーザー達は闇から解放された。

あまりに突然のことで、皆哑然とその場に立ち尽くしていた。同時に、ゲーム内アナウンスが流れる。

アルカナクエスト『運命の輪』が達成されました。

これに伴いゲーム内システムがいくつか変更されました。

最初に気付いたのは誰であったろうか。誰かが引き裂くような悲鳴を上げた。

「なんでだ。なんでログアウトできないんだ!？」

海面に顔を出す。鮫もかなり楽に狩れるようになった。

柔術を使わずに刀とキックだけで倒せる。

購入した長鉈は使いやすく、鮫皮の柄はピタリと俺の手に馴染んでくれている。

レベルもかなり上がった。そろそろ鮫より強いモブを探そう。

レベルは『侍Lv15、刀Lv18、パリイLv1、柔術Lv20、素手Lv7、キックLv19、泳ぎLv28』になっていた。パリイをまったく使っていないのは、吹雪姉から『刀カードが一刀流カードに変化すれば『受け流し』などの刀技が使えるようになるから、上げてても意味が無いよ』と聞いたからだ。

当面の目標は、侍Lv20、刀Lv20にして大和の町で刀カードを一刀流カードに変化する事と、

スキルカード『ステップ』を購入することだ。10000ゴールドまで後少し。恐らく今日のドロップを吹雪姉に買い取ってもらえば『ステップ』カードが買えるだろう。

そういえば昨日あたりから釣りスキル持ちのユーザーが増えたようだ。

海産物が露天広場でもそれなりに出回るようになり魚肉の値段は落ちた。

それでもまだまだ魚肉の需要は高い。良い値段で売れる。

ちなみに『序盤にしては君の稼ぎはかなり良いほうだよ』と、吹雪姉が言っていた。

栈橋に大の字になる。

日焼けすることのない暑い日差しを肌に浴びる。気持ちいい。

あの日暗闇に包まれていたのが一瞬であったのなら、今は8月5日 12時14分だ。

たった4日。それだけしか経っていないのに色々なことが変わった。

あの日、ログアウトできないと分かった直後。

誰かが放った言葉が、露天広場に思わぬ混乱を招いたという。

これは『デスゲーム』の始まりではないのか？と・・・。

デスゲーム。

VRMMO-RPGができる前から噂されていた誰しもが知っている都市伝説。

VR世界からログアウトできなくなり、VR世界での死が現実世界での死となる。

様々な映画や小説、漫画などで何度も語りつくされたネタでもある。

あの日、あの異常な状況下でログアウト不能に陥った露天広場の

ユーザー達は、パニック寸前になったらしい。生あるものに困難な道？死んだらどうなる？消滅するのか。復活するのか、それとも現実世界へ帰れるのか？禁止プログラム化されていた行為はどうなった？PKはできるのか？現実の体はどうなる？餓死するのではないのか？

あの時 俺は棧橋から花火を眺めていたため、露天広場の詳しい状況は知らない。

ただ後から吹雪姉に聞いた話だと、露天広場は静まりかえり、誰もが近くにいるユーザーに対して疑心暗鬼になり、いつ爆発してもおかしくない状況だったという。

・・・ちなみに妹は黙々とモブ狩りをしていたらしい。強心臓すぎる。まあ俺も花火が突然終わったのでランタンつけて泳いだりしていたから、あまり妹のことは言えないんだが・・・。

露天広場のそんな状況を打破したのは、東門、南門にある要石へ、死亡から復帰してきた廃ユーザー達だった。

花火大会中も狩りを続けていた廃ユーザー達は、あの暗闇がとけた直後に異変を感じとった。

そして何人かの廃ユーザーらは、広場の住人と同様にログアウトできない事に気付いた。

彼らはすぐに街に帰ろうとしたが、一部の廃ユーザー達はモブに囲まれて死亡したらしい。

イベント中も狩り続けるような廃ゲーマーな彼らは『もしもこれがデスゲームなら、このまま死んでしまうのか……』と絶望したらしいが、すぐに登録していた要石で普通に復活したという。

そうして死に戻った彼らが、『これはデスゲームじゃない。俺達は生きているぞ!』と喜びの叫び声を静まりきった露天広場に響かせたことにより、ようやく露天広場のユーザー達も冷静さを取り戻した。

その後。死への不安が取り除かれたログアウト不能なユーザー達は、様々な状況分析を行った。

その中で一番大きな発見は、システムメニューに『アルカナ掲示板』というメニューが追加されている事だった。

某大型掲示板と使い方は同じだが、匿名投稿が不可能で、書き込むと自動的にユーザー名がでる。すぐにこのアルカナ掲示板には様々なスレッドが作成され、今現在も情報交換が活発だ。

ひとまず今までに判明したこととしては

・ A O 内に取り残されたのは、おそらく2万人以上
・ 現実世界の体が餓死すればさすがにゲーム内からも消える？
・ 少数ながらも消滅（ログアウト？）したユーザーが実際にいる
・ 4日経過してもユーザーの大量消滅がない。現実の体は国などに保護されたか？

・ 現実世界と同じように睡眠が必要だ。宿屋はこのためだったのか？

・ 一部の禁止プログラムが解除されている。強制ログアウト回避のためか？

・ PKはできない。デスゲームでもない。

・ 今回の事件は8月1日のイベントを利用した計画犯罪か？

・ 目的が分からない。愉快犯？だとすれば、あの声の内容に何かあるはず

・ 30の夜を越える 〃 8月31日のことでは？何かが起こる？

・ 22枚のタロットカード 〃 大アルカナ

・ 石柱の広場の20本の柱にタロットカードと同じ絵柄と名前が彫られている

・ 『運命に輪』の石柱に、赤い炎が灯っている。

・ アルカナクエスト『運命の輪』クリアで灯った？

・ 広場の石柱は20本。よってアルカナクエストは残り19？全部クリアすると出られる？

・ でもタロット22枚のうち『愚者』と『世界』の柱が存在しない。

・ 『愚者』〃ユーザー 『世界』〃現実世界 ではないか？

・ 南の砂漠に『月』『星』『太陽』の絵がかかれた塔がある。アルカナクエストに関係か？

・ ラグロア川より北に進めない。帝都の北門も閉まっている。大陸の北側に何かがある？

22枚のタロットカード

『恋人』 『戦車』 『力』
『魔術師』 『女教皇』 『女帝』 『皇帝』 『法王』
『死神』 『節制』 『悪魔』
『隠者』 『運命の輪』 『正義』 『吊られた男』
『塔』 『星』 『月』 『太陽』 『審判』 『世界』
『愚者』

といった感じだ。今のところはたいした混乱もない。

ナーバスになっているユーザーもいないわけでは無いが、ほとんどのユーザーが『折角だからこのままAOを楽しもう。現実の体も保護されているようだし、すぐに救助されるだろう』と気軽に考えており、俺もそう思っている。

また『このままずっとAOで生活できればいい』などと逃避するユーザーも少なくはないようだ。

そして現在、AO内のトップユーザー達は『太陽』の塔を攻略中だと噂されており、

この噂は本当だ。なぜなら俺の妹がその攻略PTの一つに参加しているからだ。

ちなみに現在のトップユーザー達の職業レベルは25〜30らしい。

妹は『まだ魔女Lv28ですね。まだまだです』なんて言っていた。

・・・兄ちゃん妹がここまで廃ゲーマーだとは思ってなかったよ・
・・・

さてと。肉料理でも食べてから狩りを再開するか。
妹にこれ以上離されないようにしないとな・・・。

その後、日が沈むまで内海を探検した。

新たに、オクトパス（巨大たこ）、ソードフィッシュ（かじきマ
グロ）、海ヘビ、オルカ（鯨）を発見し、戦った。オルカは強くて
2度も殺された。デスペナが痛い。次の目標はオルカだ。

レベルは『侍Lv17、刀Lv19、柔術Lv21、素手Lv7、
キックLv20、泳ぎLv29』になった。

デスペナがなければ侍Lv18になっていたのだが・・・。

さてと。

吹雪姉のそこへ行く前に、一応新モブ情報をアルカナ掲示板に報
告しておこう。

モンスター情報交換報告スレ 2

1：アカシック

モブの強さ、戦い方、倒し方などを情報交換するスレッド
です。

また新しいモブを発見した場合は、できるかぎり報告をお願いします。

皆で積極的に情報交換し、この状況を打開しましょう！

21：ZIN

【報告内容】新モブ情報

【モブ場所】内海（帝都北西エリアの海岸（沖））

【戦闘報告】

・オクトパス：8本の足と視界を塞ぐスミが鬱陶しい、
鯨より弱かった。

・ソードフィッシュ：初遭遇時はてこずったが、
慣れると鯨より弱かった。角が痛い

・海へび：雑魚。マグロより強くてカニより弱い。毒攻

撃注意

・オルカ（鯨）：強敵。鯨より強い。鯨は直線的に攻撃
してくるが、

オルカはAIが賢い。こちらの様子を
探りながら攻撃してくる。

また群れていることが多く、一匹と戦
闘を開始すると

回りのオルカも寄ってくる。恐らく『

リンク』モンスター

（ 2回殺されたので諦めた。タイマンなら倒せ
そう）

【カード編成】侍17、刀19、柔術21、素手7、キッ
ク20、泳ぎ29、パライ1

【備考】

前スレで、鯨、ビッグクラブ、マグロの戦闘レポ上げて
いるので、

その時の鯨の強さを基準にしてほしい。

うむ。我ながら素晴らしい。実に分かりやすいパーフェクトな戦闘レポだ。

自画自賛してから露天広場へ向かった。

露天広場の南東あたりに吹雪姉が定位置にしている場所がある。

フレンドリストから個別回線で聞くと、今日もそこで露天してるとの事だった。

吹雪姉は夕方から露天を開く。それまでは狩りをしたり、生産したりしているらしい。

この前聞いたら鍛冶職人Lv22だと言っていた。さすがクローズド ユーザーだ。

効率的に動いているのだろう。俺よりもLvが高い。

吹雪姉の露天につくと、露天前には2人。侍の客がいた。

「ジン君か。すまない。少し待ってもらってもいいかい？」

「気にしないで続けて。俺は露天を巡ってくるよ。刀置いてくから修理お願い」

「やっておくよ。30分ほどしたら戻ってきてほしい」

「了解。また後で」

そう言葉を交わし、吹雪姉に長蛇を預けて露天を巡る。

『ステップ』のスキルカードを買うまでは無駄金を使うつもりはないのだが、防具を見ておきたかった。

ちなみに未だに初期装備のシャツとズボンだ。

この初期装備は絶対に壊れないし、動きやすいので着続けている。

だが防御力がほとんど無いので攻撃を食らうとHPがかなり減る。街中でも初期装備のユーザーを見なくなった。

特に今日のオルカ（鯨）との戦いで痛感した。

1対1なら柔術戦に持ち込んでなんとかなるが、1対多だとうしてもダメージを食らう。

今以上の敵と戦うにはこのままでは厳しい。ただし防御力のために動きにくい装備になるのはなんか嫌だ。

動きやすさ考えると、ローブ系かレザー系なんだが・・・。

防具も、武器と基本は同じだ。

その性能はどの素材で出来ているかが重要になる。

また武器と同じように防具の種類で利便性がかわる。

ローブ（織物）／レザー（皮加工）／スケイル（皮に金属片）／チェイン（鎖帷子）／プレート（甲冑）の順に固くなる。

そしてそれに比例するようにだんだんと防具も重くなり、動きにくくなるという。

掲示板情報によれば『ステップ』などの素早い動きを行うカードは、軽い装備でないと使えないらしい。

…それにしても高い。

ただの動物の皮装備でも一式揃えるとNPC製で2000G、職人製だと4000G以上かかるのか・・・

AOでは、同じ武器防具でも職人製の方がNPC製よりも性能がよくなるので、値段が大きく違う。

また防具一式（頭・腕・胴・腰・足・外着・内着）揃えるには多くの材料が必要となるので武器よりも割高だ。吹雪姉は余裕がないから刀鍛冶しかやるつもりが無いと言っていたし、どしたもんか・・・。

その後も色々巡ってみたが、結局これだと思う防具は無かった。とりあえず時間も潰せたので戻してみると、丁度修理が終わったところだったようだ。

「すまなかったね。今終わったところだよ」

「ありがと吹雪姉。んじゃこれ今日のドロップ。新モブとやりあったから鯨以外のドロップもあるんだけど、なんか使えそう？」

俺はその日のドロップを全て吹雪姉に買い取ってもらってる。

吹雪姉がサメ皮を欲しがっているからだ。

魚肉類は知り合いの料理人に卸しているらしい。もちろん吹雪姉も手数料を稼げるよう、少し安めの買取になる。俺としては、相場を調べる手間が省けるので、多少安くてもありがたい。

「私のほうはサメ皮以外は必要ないね。それ以外の海産品は私の友人行きだ。じゃあこれが修理代を除いた分だよ。この額でいいかい？」

買い取り額が6200ゴールドとあった。いつもの2倍以上だ。

「なんかすんげー多いんだけど？」

「サメ皮の買取額を上げたんだよ。サメ皮の需要が高まっているのさ。私の刀の柄はサメ皮なので使いやすいと口コミで広がっているらしくてね。他の刀鍛冶もサメ皮を入手しようとしているが、なかなか市場に出てこないらしい。私はジン君のを独占させてもらっているからね。これぐらいの値上げは当然だよ。お客も増えたとし儲けも増えた。まあ需要が下がったら、その時は値下げさせてもらうから遠慮しないでほしい」

「んじゃ、ありがたく」

予想外の収入に頬が緩む。所持金は14320Gになった。

「じゃあ俺はいくよ。吹雪姉またよろしく」

「ああ。ジン君も気をつけてな」

そう挨拶を交わして吹雪姉の露天から離れた。

そしてすぐにカード屋へ向かい、念願の『ストップ』カードを購入する。

早速ヘキサグラムウィンドウを呼び出し、

『パリエーヴ1』を外して『ストップレヴ1』をセットした。

さてと。

屋台で美味いもんでも食べてから、オークかゴブリンでステップカードを試すか。

『ステップ』スキルは、『フロントステップ』『サイドステップ』『バックステップ』などの各方向すべてにステップできるST消費系の回避スキルだ。かなり便利だと思うのだが、重装備だと重さで動けず意味がない。また魔法職だと魔法系カードでカードスロットがいっぱいになるため、あまり人気がないカードらしい。

妹曰く、『AOでは盾＋重装備が安定するので盾騎士が一番人気ですね。まあ兄さんの場合、何をしでかすかよく分かりませんので、好きなようにされるのが一番だと思います』との事なので、俺はやりたいようにやる。

夕食後。腰にランタンを下げ、東門から街の外へ。

何気にこれが陸での初戦闘だ。

ランタンの明かりにつられて寄ってきたゴブリン、コボルド、オークらと適当に戦いながら『ステップ』を試した。

オークが振り下ろしてきた斧の間合いを見切り、バックステップ。

俺の目の前を斧が通過していきオークが体勢を崩し、そこを逃さずにフロントステップで間合いを詰め　長鉞一閃。

やだ、なにこれかつこいい・・・よし！もう一度・・・　ドゴッ

オークの斧が俺の脳天に命中しクリティカルとなる。

ガチで死ぬところだった。間合いをミスるとやばいわ、これ・・・。

その後も休憩を入れながらステップを試し続けた。

使いすぎてスタミナがゼロになって死に掛かったり、ステップで避けた先にオークがいたりと色々あったが、使い勝手には満足した。

軽装備ならばステップはかなり良さげだ。

集団戦でも緊急回避に使えそうだった。・・・そうだ。これ海でも使えないだろうか？

明日試してみよう。

そんな予定を立て、侍Lv18になったところで切り上げた。

帝都のNPCにオークらのドロップを売って一番安い宿をとる。

一晚10Gだ。アルカナ掲示板をチェックして今日はもう寝よう。明日も早朝から海狩りだ。

特に目立った新情報は無いようだ。

最後にモンスター情報交換スレをチェックする。

ここの情報はなかなか使えるので重宝している廃ゲーマーが多いという。

スレ主のアカシックさん（通称：アカシ屋さん）が丁寧にまとめてくれるからだ。

なん・・・だと・・・スレを開いて我が目を疑う。

21：ZIN

【報告内容】新モブ情報

【モブ場所】内海（帝都北西エリアの海岸〜沖）

【戦闘報告】

・オクトパス：8本の足と視界を塞ぐスミが鬱陶しい、
鯨より弱かった。

・ソードフィッシュ：初遭遇時はてこずったが、
慣れると鯨より弱かった。角が痛い

・海へび：雑魚。マグロより強くて力二より弱い。毒攻

撃注意

・オルカ（鯨）：強敵。鯨より強い。鯨は直線的に攻撃
してくるが、

オルカはAIが賢い。こちらの様子を
探りながら攻撃してくる。

また群れていることが多く、一匹と戦

闘を開始すると

回りのオルカも寄ってくる。恐らく『

リンク』モンスター

（ 2回殺されたので諦めた。タイマンなら倒せ
そう）

【カード編成】侍17、刀19、柔術21、素手7、キッ
ク20、泳ぎ29、パライ1

【備考】

前スレで、鮫、ビッククラブ、マグロの戦闘レポ上げているので、

その時の鮫の強さを基準にしてほしい。

22：ピョートル

<<21 泳ぎ29とかワロタ。いったいどこに向かってるんだw

23：咲夜

<<21 沖とか誰もいかねーからw w w w
サメ基準とか誰もわかねーからw w w w w

24：ドボルザーク

<<21 半漁ZIN。乙

25：ペペろんちーの

<<24 フイタw w w w w

26：独眼竜

<<24 半漁ZIN w w w w wワロタw w w w w

27：アロンソ

もう半漁ZINにしかみえないw w w w w

その後もレスが続いている。渾名が『半漁ZIN』で確定していた。俺は泣いた。

Z I N : 侍 L V 1 8
刀 L V 1 9 柔術 L V 2 1 素手 L V 7 キック L V 2 0 泳
ぎ L V 2 9 ステップ L V 3

朝日が目にしみるぜ・・・。

今は8月6日 6:00 いつもの棧橋である。

棧橋で仁王立ちになり、腕を組み、朝日を見上げる。

俺は一晩考えた。

海の男になるのだ。やはり赤禪アカフンを探すべきだ。

たぶん裁縫士に頼めば作ってもらえるはずだ。俺様の男を誇示し、女にモテる。そうすれば『半漁ZIN』の名前も消えていくだろう。きつとそうに違いない。

まずはオルカ（鯨）だ。昨日のリベンジだ。

とりあえずステップが海中で使えるか試そう。これが海でも使えれば倒せるかもしれない。

棧橋から海へ飛び込む。

もう慣れたもんだ。海中に潜る。ステップを唱えr・・・

唱えらんねー・・・そもそも海中だとしゃべれねー・・・

今思えば。使わずに持ってた『パリイ』は、海狩りしてた俺には本当に意味無かつたんだ・・・

それにしても、どうするよ？

スタミナやマナを消費するアクティブスキルの発動には、そのスキル動作を明確にイメージする必要がある。上手くイメージできないと、スキルは不発し、戦闘でも窮地に陥る。

頭の中でイメージを固めるだけなら難しくないような気もするが、『戦闘をしながら』という条件が加わるとなれば話は別だ。

『モブの動きを見ながら、PTメンバーの状況を把握しながら、周囲の地形を確認しながら、次の動きを予想しながら、さらにスキル発動のイメージを頭の中で確定させる』

様々な状況分析を行いながら、頭の中でスキルイメージを明確にするのは難しいとされ、それにはユーザー自身のセンスが非常に重要だと言われている。よって、それが出来るユーザーと出来ないユーザーに分かれてしまう。というか出来るユーザーはかなり稀有^{レア}だという。

そういった事情から、スキルを確実に発動するための方法として、『意識しながら、スキル名や一定の文言などを声に出して唱えれば発動する』という詠唱プログラムが構築された。

このような詠唱プログラムはAOに限らず、全てのVRゲームの

基盤となっている。

今では一般的に声に出してスキル発動するのを『詠唱操作』といい、頭の中でイメージを確定して発動するのを『思考操作』と呼んでいる。

なので海中でもスキルを使いたいなら『思考操作』しかない。

・・・ここは『思考操作』に挑戦してみるか？
まあその前に海中でもステップ可能か確かめる必要があるわけだが・・・。

海面に顔だけ出して『ステップ』を唱える。 いける！

ステップを発動すると足の裏に地面を踏むような感触が生まれた。そのまま思いきり水中を蹴ると、体に水の負荷が急激にかかり、ギョーンと体が加速する。まるでイカやタコがその足で海を蹴り泳ぐかのような加速だった。

もしも海中でもこの動きができればオルカもいけそうだ。

よし。絶対に思考操作をものにしよう。

それからは海中で思考操作をひたすら練習した。

昼頃には、非戦闘状態であれば『思考操作』でステップができるようになった。後は戦いながら確実にできるかどうかだ・・・。

夕方になった。俺は鮫に何度も殺されていた。

今日中に『思考操作』を極めるつもりだったが甘かった。

というか今日中とか絶対に無理だ。まさかここまで難しいとは・・。

これは中長期的に考えないといけない。

8月31日に何も起きないかもしれないし、何かが起きるかもしれない。このVR世界の先行きは不透明だ。だからこそ1日でも早く『思考操作』をマスターしておきたいのだが・・。

・・・山籠りならぬ、海籠りするか？

この栈橋で寝起きして、朝も昼も晩も、全ての時間をかける・・・
なんという男のロマン。そうなるとまずは吹雪姉のところだな。当
分サメ皮をもっていけなくなるから、謝るところ。

吹雪姉はいつものように露天広場で刀を売っていた。

俺は挨拶もそこそこに、当分これなくなる事情を説明して謝る。
すると吹雪姉は、「何も気にすることはないよ。ジン君から買取

したサメ皮もまだ残っているから大丈夫さ。実は私もね『思考操作』をマスターしようとしたことがあったんだよ。でも上手いかなかった……。それもあったから侍を辞めて鍛冶職人になったのさ。ジン君も一刀流にするつもりなら、いつか必ず『思考操作』を極めなくなるだろう。一刀流はそういうカードなんだ。私にはできなかったが、サメを絞め殺すような発想を持った君だ。案外マスターできるかもね。期待しているよ」と応援してくれた。

その後、手持ちのゴールドを全て使い。ランタンを4つ。一ヶ月分の料理アイテムと、動物の皮でできた毛布を一枚。その残金で錬金術士が作ったSTポーションを買えるだけ買う。腰にある皮袋のアイテムインベントリーが重量制限ギリギリになったところで、棧橋に戻った。

そんじゃ海籠り開始といくか。目標は思考操作をマスター、これ以外ない。

8月7日 鮫に何度も殺される。思考操作の成功率は1%にも満たない。厳しい

8月8日 進歩がない自分に自信がなくなってくる。がんばろう

8月9日 なんとなくだが、『あ、これはミスだな』と発動失敗に気付くようになった

8月10日 ほとんど成功しない。発動失敗に気付くようになったせいか、余計に萎える

8月11日 心が折れる前に長鉈が折れた。吹雪姉すまん。絶対にマスターしよう

8月12日 厳しい。鮫に何度殺されたかも覚えていない。折れた長鉈を見て喝を入れる

8月13日 釣り人がきた。思考操作なんて出来るわけないと馬鹿にされた。俺は諦めん

8月14日 STポットがつかた。座って回復する時間も増える。もどかしい。つらい

8月15日 そういえばお盆だ。亡き両親を思う。藍だけは何があっても現実に帰さない

8月16日 この仮想から出れないからこそ、仮想の強さが必要だ。でも思考操作は遠い・・・

8月17日 釣り人がきた時以外、この桟橋には誰もこない。人が恋しい

8月18日 だいぶ戦闘が上手くなってきた。素手・キック・柔術を使いこなせている気がする

8月19日 間合いが視える。鮫の早さをずっと見てきたせいか目が慣れた

あまり死なくなつた。

8月20日 成功しない。発動失敗だけは確実に分かるようになる

った。失敗ばかりだ・・・

8月21日 アナウンスが流れたアルカナクエスト『太陽』が達成されたらしい。掲示板は見ない

8月22日 ほんの少しだが成功率が上がってきた気がする。頭の中がクリアになる。でも遠い

8月23日 焦っている自分が嫌になる。アルカナクエスト達成のアナウンスのせいだろう

8月24日 集中する。とにかく集中する

8月25日 体を熱く。頭を冷静に。思考を平行に。これが正解なのか分からない。コツは掴んだ

8月26日 思うままに体が動く、自由に動く。本当に魚になった気分だ

鍛錬を続ける、後少しだ

8月27日 きつとこれでいい。俺はやった

ZIN：侍LV35

刀LV21、柔術LV41、素手LV30、キックLV34、泳ぎLV58、ステップLV25

備考：『思考操作』 習得

棧橋に上がる。

この棧橋とも長い付き合いになった。もうすっかり我が家だ。野宿だけど。

思考操作を極めようと思い立ち、この棧橋に籠ってから21日が過ぎた。今は8月28日11時だ。

そして昨日極めた思考操作を試そうと、さきほどオルカの群れと戦い。今はちょうど棧橋に戻ってきたところだ。

オルカは余裕だった。

合計8匹の群れだったが一度も攻撃を食らわなかった。

全体的にレベルアップしたことも大きかったが、やはり思考操作でステップを使えるようになったのが本当に大きい。今なら海中戦で負ける気がしない。かなり自信がついた。

さて。

それじゃ目的も達成したし、久しぶりにアルカナ掲示板をチェックするか・・・

・『太陽』の石柱に炎が灯っただけで、特に変化なし

・『太陽』の塔は全6階。最上階には『太陽の守護者』という火属性のボスがいた

・錬金術士がギルドストーンの合成に成功し、ギルド開設ブームが起きている

・トップギルド達が競うように『星』と『月』の塔に挑んでいる

・トップギルドの職業レベルは、Lv40〜43らしい

・内海の出口、大陸に西端にBOSS『ローレイ』がいる。

強い

・大陸の南西に森があるが、入るとすぐに出てくる。入れない

(通称：迷いの森)

・帝都と大和の町の間にある森(通称：亜人の森)にBOSS

『オークキング』がいる。超強い

・南の砂漠には実は全部で6つの塔があった

(『太陽』『月』『星』『力』『魔術師』『吊られた男』)

・その他、新モブ情報。新スキル情報。色々……

結構色々あったようだ。ずっと海にいたせいですっかり浦島だ。

掲示板のチェック後は、久しぶりに露天広場にやってきた。

刀を修復してもらったために個別回線で吹雪姉に連絡したら、「私もサメ皮が欲しい。いつもの場所にすぐにきてもらえないかい?」
と言われたためだ。

いつもの場所につくと、吹雪姉が露天でのんびりしていた。昼間なのに珍しい。

「久しぶり。吹雪姉」

「ジン君、久しぶりだね。3週間ぶりかな？」

「そんならいかな。サメ皮持ってきたよ。かなり量あるけど？」

「とりあえず見せてもらってもいいかい？」

トレードウィンドウを出し、サメ皮と海産物をみせる。

「またこれは……もの凄い量だね。ぜひとも全部買取したいのだが、その前に話しておくことがある」

「ん、何？」

吹雪姉の話をまとめるところだ。

数日前にクローズドからの古参鍛冶職人達が集まったギルドができた。

そこがサメ皮の独占を狙い、現在サメ皮の高額買取を行っている。本来なら採算の合わない買取額だが、客を囲い込めるし、サメ皮自体の産出量もたいしたことが無いので、当分そのギルドは今の相場を維持するだろう。なので私が買取するよりも、そっちに持っていた方が儲かる。というものだった。

「ふーん、そうなんだ。でもそんなの気にしないでいいよ。吹雪姉には世話になってる。これから世話になるんだし」

「いいのかい？量があるから、きつと向こうに持っていけばかなりの利益がでるよ？」

「ゴールドが欲しくないうってわけじゃないけど、吹雪姉の買取はいつも適正価格だと思ってる。だから吹雪姉の買取価格でいいよ」

「ありがとう。本当に助かるよ」

出したままになっていたトレードウィンドウに吹雪姉が金額を入れる。

一、十、百、千、万・・・132480ゴールド!?

「え?ちょっと吹雪姉」

「なんだい?やはり少なかったかい?」

「いや逆だよ、逆。何この値段多すぎじゃね?」

「ジン君。さっき説明したようにサメ皮は市場にほとんど出回らないんだよ。これでも少ないぐらいさ。他の鍛冶職人に『この量でこの額で買取るか?』と聞いたたら、どの鍛冶職人もイエスというね」
「……まじか。じゃあ遠慮なくもらつとこつ。ありがと吹雪姉」
「こちらこそこれからお願いしたい。ありがとう。……じゃあ次は君の武器だね。折れたと聞いたが、見せてもらえないかい?」

アイテムインベトリーから折れた長鉈を取り出し、吹雪姉に渡す。

「ごめん吹雪姉。これだ」

「気にしないでいいさ。なるほど確かに折れているね。修復は半日程度時間がかかるよ。料金は、修復手数料5000Gと、材料ブロンズ費2000Gの合計7000Gになるね。……ところでジン君」

なんだろう。なんか吹雪姉の目がキラキラしてる。刃物もってそれは止めてほしい。

「どうだろうか。この機会にスティール（鋼）製にまでアップグレードしないかい？予算はかなりかかるけど、そろそろブロンズも卒業だろう。概要を説明すると、まずこの長鉈を修復する。次にブロンズからアイアンにアップグレード。そしてアイアンからスティールにアップグレードだ。だから材料もブロンズ、アイアン、スティールと必要になるので、材料費だけで、 $2000G + 10000G + 30000G = 42000G$ だ。全ての手数料も含めた合計だと……そうだね。80000Gでどうだい？結構お得だよ」

すごく目を輝かせている。やりたそうだ。すんげーやりたそうだ。

「じゃ、じゃあ、お願い。料金は前払いしとくよ」

「ああ分かった。後は任せたまえ！……ふふふ、そうか。遂に私もアップグレードする日が来たか。ふふふ、ふふふ……」

「……えっと吹雪姉？その、いつ取りに来ればいい？」

「ん？ああそうだったね。明日の19時頃にここにきてほしい」

1日以上かかるのか。

……その間に大和の町でカードを一刀流にしてくるか……。

「そうだ吹雪姉。大和の町で刀カードを一刀流カードにする時に、刀装備は必要？」

「必要ないね。侍カードと刀カードがLv20以上なら大丈夫だよ。町の真ん中に大和道場という建物があるから、その『一刀斎』というNPCと話せばいい。そういえば『思考操作』はできるようになったのかい？」

「一応できるようになったの……かな？」

「ふふふ。そうか、まさか本当にできるようになるとはね。私も

負けないように、この長蛇をきつちり仕上げておくよ」

「じゃあよろしく。俺は行くよ。また明日」

「ああ任せたまえ。気をつけてな。ジン君」

吹雪姉は露天を早々に片付けて鍛冶職人用の共同施設に向かっていった。今から籠るのだろう。

・・・俺も大和の町へ行こう。

ZIN：侍Lv35

刀Lv23、柔術Lv42、素手Lv30、キックLv35、
泳ぎLv59、ステップLv26

帝都の東門を出て、真っ直ぐ東へ伸びる東街道をひたすら歩く。

日が落ちる前には着きたい。

この東街道を半日ほど歩けば大陸最東端にある大和の町につくという。

また東街道の南側は草原となっており、

スライム、コボルド、ゴブリン、オークなどしかいないため『初心者草原』と呼ばれている。

逆に東街道の北側には街道に沿う形で延々と森が続いている。

この森はユーザー達からは『亜人の森』と呼ばれていて、ゴブリン種、コボルド種、オーク種、人狼種など亜人種モブの全タイプが生息しているため、それなりのレベルが無いと厳しい狩場だという。また奥に進むほど、モブの湧きが良くなるためPT狩場としても人気だとか・・・。

ちなみに数日前には、森の奥深くで『オークキング』が発見され、Lv35前後の6人PTが7つ全滅したというから、かなりの強さだろう。

やっと見えたか・・・。

泳ぐのなら半日でも1日でも全然問題無いが、歩きはだるい。

あたりはすでに夕暮れ時を迎えていた。
夕日に照らされた俺の影が、大和の町へ細長く伸びている。
俺はその影を踏むように、遠くに見えた大和の町へと歩みを早めた。

ここまで来るまでにオークとオークアーチャーで混成された敵の小PTに6回襲われたが、危なげなく余裕を持って倒せた。思考操作でステップを使いこなせるようになったのがやはり大きい。レベル以上に強くなれている気がする。

だが1対多の戦闘では、背後にモブがいるとさすがに避けきれない。もつと立ち回りを工夫しないと、いずれやっていけなくなるだろう。背後をとらせないようにしないと・・・今後の課題だ。

そんな事を考えながら、ようやく大和の町の西門へと辿り着く。

すでに夜だ。

『和』の町らしく、城壁は白塗りの瓦葺きで、戦国時代の城下町という雰囲気醸し出している。

アルカナ掲示板で調べた事前情報によると

大和の町には3つの門がある。北西門、西門、南西門

北西門はドワーフ鉱山ダンジョンへの出入り口

西門は、今まさに俺が歩いてきた帝都アスガルドと大和の町を結ぶ『東街道』の出入り口

南西門は魔法都市グレイプニルと大和を結ぶ『グレイプニル東道』の出入り口

そして大和の町は大きく5つのエリアに分かれる。中央、

北東、南東、南西、北西

中央は、侍の『大和道場』

北東は、忍者の『忍び屋敷』

南東は、巫女の『大和神社』

南西は、宿やギルドハウスなどの家屋エリア

北西は、商業広場があり、ドワーフ鉱山でとれた金属などを売る露天で溢れている

との事だ。

町を行き交うユーザーは、巫女装束、着流し、浴衣、武者鎧（甲冑）、忍び装束などの和装を着ているユーザーが多かった。帝都はどちらかというと西洋ファンタジーの雰囲気が漂っていたが、大和の町は戦国時代か江戸時代といった時代劇のような雰囲気が漂っている。実にいい。和む。

また夜の大和の町は道や建物の前に篝火かがりびが焚かれていて神秘的だ。

それらをキョロキョロと見ながら歩いていると、ようやく大和道場に着いたようだ。

堀で囲まれており、木でできた橋の先には大名屋敷のような門構

えがある。門の奥には大きな道場が四軒建っている。

・・・どれが『一刀斎』のいる道場なんだ？

誰かに聞いたほうが早そうだ。武者姿の人なら知っているだろう。あそこにいる3人組が丁度いい。全員武者鎧を着てるから侍のはずだ。あの人達にしよう。・・・決して侍娘3人組だったから、あの人達にしたわけじゃないぞ。本当だぞ。

「お姉さん。ちょっと聞いていい？」

「ん？何かしら」

「大和道場の中で『一刀斎』がいる建物って、どれか分かる？」

「え？あなた一刀流にするつもり？止めておいたほうがいいわよ。あなた初心者でしょ？」

「確かにオープンからの参加組だけど、なんで分かったんだろ

……？」

「だってそれ初期防具じゃない。というか武器ももってないし……
…いつたいどうやってここまで来たの？」

そっぴゃ長鉈もないし初期防具だった……。

自分でいうのもなんだが酷い恰好だ。

しかも周りは『和』の装備ばかりだからすんげー浮いてる。

さつきからすれ違う人がもの凄く不思議そうに俺を見てたのは、
これが原因だったのか。そらそうだな。

「あー…刀は折れたんで修復に出してるんだ。それと柔術とか使

えるから、それで何とか」

「……よく来れたわね。まあいいわ。その門に入って、右手前が一刀斎道場、右奥が平家道場、左奥が宝蔵院、左手前が武蔵道場よ」

「ありがとう。それじゃあね」

「あーちよつと待って！あなたすごい初心者のようなから言っておくけど、一刀流は止めておきなさい。あれは攻撃はいいけど防御が大変よ。『受け流し』や『峰弾』^{みなねじき}から『斬り返し』に繋げるのが凄く難しいの。というか現実的じゃないわ。私もクローズドで一刀流をやったけど、PTには入れてもらえないし、ソロだと囲まれたらすぐ死ぬし、散々だったのよ」

「そやでアンタ。うちみたいに槍にしとき。今からでも遅うない。ゴールド貯めて槍スキルカード買こうて、宝蔵院流槍術カードにしこれおすすめやで。攻防の一手が揃つとる。中距離で戦えるからPTでも活躍できるで」

「そうね初心者には槍がいいわね。もしくは二刀流よ。二刀流ならオープン になって実装された『脇差』^{わきざし}カードが使えるようになるわ。侍Lv20と盾Lv20にすれば、『盾』カードを『脇差』カードに変化してもらえるの。盾騎士の『ナイトシールド』カードとほぼ同じ性能よ。刀と脇差と甲冑装備なら、フルプレートの盾騎士と防御力が同等なの。最近のPTでは盾騎士と二刀流侍が前衛の花形になっているわ。二刀流なら武蔵道場。槍なら宝蔵院ね。どちらも入って左側よ」

女侍二人にそう捲くし立てられる。

ちなみにもう一人の侍娘の女の子は、その横で腕を組んでうんうんと頷いていた。寡黙な子みたいだ。

「忠告はありがたいんだけど。ダメならまたやり直せるし、とりあえず一刀流やるよ」

「ほんまにやめといたほうがええでー」

「まあアナタがそう思うのなら、これ以上は止めないわ」

「アドバイスありがとう。そーいやり残り1つの右奥の平家道場は何なの？」

宝蔵院流槍術、二刀流、一刀流と、道場のうち3つは分かったが、最後の1つが謎だ。

「そーいえばあなた柔術もってるって言ってたわね。もしかして素手とキックもあるのかしら？」

「あるよ」

「……本当に初心者だったのね。初期スロットで、刀と柔術と素手とキックなんて初めて聞いたわ」

「まあまあ、ええやないの。初心者の時に色々やらかすのが一番楽しいねんから。うちらもそーやったやん」

「まあそーよね……ええと、平家道場の話だったわね。あそこは侍Lv30、柔術Lv30、素手Lv30、キックLv30なら、『柔術』『素手』『キック』を『無鬨流柔術』に変化してくれるNPCがいるわ。『佐々木』っていう普通の名前のNPCよ」

ん？……てことはスキルスロットが2つ空くってことか？

「……お姉さんそれマジ？」

「ええ、本当よ。もしかして条件満たしてるのあなた？」

「条件満たしてるな……マジかーすげー。これでスロットが2つ空く、お姉さん本当にありがとう！」

「別に構わないんだけど……それよりあなた柔術なんてどこで上

げたの？あれ背中とつたり、転げた敵と絡みあったりしなきゃいけないから、なかなか上げれないカードよ？」

「……海で鯨を絞め殺してました」

……なんだろう。なんか3人に見られてる。すんげー見られてる

「……半漁ZIN？」と、今まで黙っていた寡黙な侍娘の子が呟いた。

……俺は黙って目を逸らした。

ZIN：侍LV35

刀LV23、柔術LV43、素手LV32、キックLV36、泳ぎLV59、ステップLV27

「ほんまにおったんやー半漁ZIN。都市伝説や思っとったけど、そうかあんたが半漁ZINかー。なんか想像以上やわ」

「……生半漁ZIN」

「っ…な、生てなんやねん。生て……あはははは！生半漁ZINで。あかん、ほんまあかん。……っぐ……あははは！あかん、お腹痛い」

「っふ、ふふふ……こら巴。笑っちゃ……っふふふ……悪いわよ、っね」

そんな感じで侍娘3人組にはさんざんいじられた……。

・・・おかしい。いったいどうしてこうなった。そもそもどこで間違った。俺の計算が正しければ、この夏はモテ期が到来していたはずなのに。

「ねえ。あなたが噂の半漁ZINなら、サメ皮余ってたりしない？サメ皮の刀が欲しいんだけど、『帝都の金槌』というギルドが買占めて相場操作しているから、ちよつと買う気になれなくて困ってるのよ」

「……私も。……サメ皮の槍が欲しい」

「あ、うちもー！めっちゃ欲しいねんけどあのギルドが値段を吊り上げたせいで、ほんまに困っとるねん。クローズドからの古参

かなんか知らんけど、足元見すぎやで」

ようやく落ち着いた3人からサメ皮について聞かれた。

ちなみに3人の名前は『藤華』、『巴御前』、『茶々』という。

まとめ役で二刀流なのが藤華^{とうか}さん。関西弁で宝蔵院流槍術なのが巴^{ともえ}さん。寡黙で宝蔵院流槍術なのか茶々（ちゃちゃ）だ。

そして、どうやら吹雪姉が言っていたサメ皮買占めギルドというのは、『帝都の金槌』という名前らしい。

「サメ皮は懇意にしている鍛冶職人に全部買取ってもらってるんだ。今日の昼にかなり大量のサメ皮を買取ってもらったから、少しすればサメ皮武器の値段も落ち着くんじゃないかな？その人は適正価格で商売する人だし」

「そうなの？もし差し障り無いようなら、その鍛冶職人さんの名前を教えてもらえないかしら？」

「んつと……じゃあ個別回線で確認とるから、ちよつと待ってて」

吹雪姉出るか？いつもは淡々としてるくせに、なんか目を輝かせて工房に行っただけ……。

フレンドリストから個別回線を繋ぐ、吹雪姉を呼び出してみると、そんな心配をよそにすぐに出てくれた。

『なんだい？ジン君』

『吹雪姉。今忙しい？ちよつと確認したいことがあるんだけど』

『別に構わないさ。少し休憩を入れようと思っていたしね。確認したいことはなんだい？』

『今、大和の町にいるんだけど、そこで侍の人達と知り合ってサ

メ皮の話をしたら、吹雪姉の名前を教えてほしいって言われて……
教えてもいい？ 3人組の親切な人達で別に変な人じゃない。どうだ
ろう？」

「ぜひとも伝えてほしいね。これからもジン君が信用できそうな
人がいたら、私の名前を伝えてほしいぐらいだ」

「分かった。忙しい時にありがとう」

「気にしないでくれ。ジン君のおかげで、私は鍛冶職人を非常に
楽しめている。ではまただ」

通話を切って、意識を目の前に戻すと侍娘3人組が、期待と不安
が入り混じった目で俺を見ていた。・・・おお、なんかやべえ。女
子にそんな風に見上げられると、思わずドSに目覚めそうになる・
。まあでも俺は紳士だしな、ちゃんと答えておこう

「大丈夫だって。それで名前は『桜吹雪』っていう鍛冶職人
だいたい夕方以降に帝都の南東エリアで露天をだしてて、明日の1
9時頃まで工房に籠るらしいから、それ以降にいけば大丈夫じゃな
いかな」

「了解、『桜吹雪』さんね。ありがとう助かったわ」

「こっちこそ助かりました。じゃあ大和道場に行くので、またど
こかで」

「ええ、またね。私達も宿へいくわ。あなたも元気でね」

「ありがとなー半漁ZIN。ほんま助かったわー」

「……ばいばい」

3人を見送り、大和道場へ向かう。・・・半漁ZINは聞こえな
かったことにした。

8月29日 15時43分 帝都アスガルド

うーむ。もう1つ余ったカードスロットに何挿すか迷うな。

『乗馬』があると移動が楽そうだし、『手裏剣』があると戦闘の幅
広がりそうだし、『釣り』も捨てがたいな。何にしようか……。

俺が今いるのは、帝都アスガルドのカード屋だ。

昨晚、大和道場で、『刀』カードを『一刀流』カードに、『柔術』
『素手』『キック』カードを『無鬪流柔術』カードにそれぞれ変更
した。そして無鬪流柔術カードへの変更により、2つのカードスロ
ットが空いたので、今は何を挿そうか迷っているところだ。

とりあえず1枚は『居合い』カードにした。

一刀斎道場で30000Gで売られていたものだ。かなり高いが
居合い斬りは男のロマンだ。

たとえ『一刀流侍は使えない。特に『居合い』を使ってる奴は地
雷確定』とか言われていたとしても……。買った後に知ったんだ
よ。ちくしょう。おかげで残金は22630Gになってしまった。

ちなみに昨日はそのまま大和の町で一泊した。

昼になる前に大和の町を出て、まただらだらと歩いて帝都アスガ

ルドに到着したばかりだ。早速スロットに挿すカードを選ぶため、カード屋にやってきているわけだが……。

ぶっちゃけ迷う。

どれも欲しいけど、どれもなんか違う気がする。

アルカナ掲示板のカード情報交換スレは、重装備や魔法職の使用レポばかりで参考にならなかった。軽装備で戦う侍や騎士はほとんどいないようだ。困った……。

・・・お？これはいいな。なんというか俺向きな気がする。うん、これにしよう。そうしよう。

直感にしたがい即決する。10000ゴールドで『ジャンプ』カードを手に入れた。店を出ると早速『ヘキサグラム』ウィンドウを呼び出してセットする。

様変わりした『ヘキサグラム』ウィンドウを改めて眺めてみる。

『侍Lv36、一刀流Lv1、居合いLv1、無鬨流柔術Lv6、ステップLv28、ジャンプLv1、泳ぎLv59』

なんだかようやく侍としてスタート地点に立てたような気がする。一刀流侍は人気が無いようだが、自分なりにがんばって育ててみよう。

さてと。

今の時間は16時か。19時まで露天でも見て、久しぶりにブラ

ブラするか。

屋台で買った兎肉の串焼きを食いながら、色んな露天、屋台をひやかす
…

スチール製プレート装備一式って材料費だけで27万Gもするの。やっぱ俺には重装備は無理だな。防具にこんだけ金かけるくらいなら、生産者になるわ

ギルドストーン100万Gとか高すぎるだろう！？そっぴや藍が6人でお金出しあつて『円卓』ギルド立ち上げたつて言つてたな。・
・藍のやつ最低でも17万G近く使つたのか。さすがは廃ゲーム！・・・兄さんに少し分けてくれ

馬つてアイテム扱いだったのか。30万G・・・高すぎる。でもアイテムなら出し入れできるな。それなら『乗馬』カードを乗るときだけセットしてやればスロットが無駄にならないな。乗馬カード欲しいな。・・・『乗馬』カードを常にセットしていないと馬が逃げ・・・だと

お。サメ皮の武器がたくさん並んでる。ここが例の『帝都の金槌』ギルドの露天か・・・高けーな、おい。サメ皮柄のブロンズ刀で5000Gとか足元見すぎだろう。確か今の相場だと布柄のブロンズ刀が20000G〜30000Gのはずだから、噂どおり悪い商売してるんだな

…そろそろ19時か。

吹雪姉のそこに行こう。そっぴや泳がなかつたのは今日が初めてじゃね？

定位置となつてゐる広場南東の吹雪姉の露天へいくと、ちやうど場所とりしてゐる最中だったので、布の敷物を広げるのを一緒に手伝つた。その後徹夜明けでナチュラルハイな吹雪姉から『長蛇（ステイル・桜吹雪）』を受け取り。今度来る3人組は、刀使い一人と十文字槍使いが二人だと伝えて、早々に宿屋に入つた。

ベッドに入るとすぐに眠氣がきた。なんだか久しぶりに泥のように眠つた。

Z I N : 侍ⅠⅤ36

一刀流Ⅴ1 居合ⅠⅤ1 無鬪流柔術Ⅴ6 ステップⅠ

Ⅴ28 ジャンプⅤ1 泳ぎⅤ59

『居合い』というのは、鞘に収めた刀を一瞬にして鞘から解き放ち、神速の斬り込みを放つ男のロマン技である・・・そう斬るのだ。居合いとは斬る技なのだ。

・・・どうしてこうなった。

8月30日 朝6時 初心者草原

俺はスチール製になった長鉈の試し斬りと、
『一刀流』『無鬪流柔術』『ジャンプ』『居合い』といった4つの新カードを試すために、帝都東の初心者草原でオークと対峙した。ここまではいい。何も問題ない。

問題が起きたのは『居合い』を試した時だ。

何度もいうが居合いとは斬る技だ・・・。

俺は長鉈を鞘に収めて思考操作で『居合い』を発動した。鞘から滑るように放たれた長鉈がオークに命中した時　オークはぶつとんだ。それはもう盛大にぶつとんだ。オークも驚いただろうが、俺も驚いた。

理由は明白だ。

俺の長鉈は逆反りの刀だ。つまり俺の居合い斬りは、峰で打つことになる。

普通の日本刀で居合い斬りすれば『ズバッ』と斬れるんだろうが、俺の長鉈だと『ドゴンッ』と何やら凄まじい打撃技になってしまう。どうして『居合い』カードを買う前に気付かなかったんだ。俺の馬鹿野郎……。

そして他のカードについてだが

『ジャンプ』は2m近く飛び上がれるスキルだった。回避スキルとして使うくらいしか思い浮かばない。正直ステップだけで良かった気がする。買ってしまったものは仕方がないので、とりあえず使い続けよう。

『無鬨流柔術』は、素手でもキックでも絞め技でもカードレベルがあがるのがありがたいのと、それに新しく投げもいけるようになった。投げの使いどころのイメージがまだ湧かないが、スキルカード3つが1つにまとまったただけでもありがたいので、今後もコツコツ上げていこうと思う。

最後に色々と評判が分かれる『一刀流』だが、確かに『受け流し』や『峰弾き』を発動してから、二ノ太刀『斬り返し』に繋げるのは難しいだろう。だが俺の場合、使っている刀が逆反りのおかげで『峰弾き』が綺麗に決まる。オークが振り下ろした斧を下から切り上げ『峰弾き』で弾きとばし、手の中で長鉈を返して二ノ太刀『斬り返し』で袈裟懸けに斬る。この一連の流れが本当に綺麗に決まる。

また『受け流し』もなめらかだ。これは吹雪姉の技量カスタマイズのおかげもあるだろう。オークの斧が面白いように長鉈の峰を滑る。体勢も大きく崩れるので脳天に思い切り二ノ太刀『斬り返し』を叩き込める。

『一刀流』 いい！凄くいいぞ。なんか名のある剣豪になった気分だ。

それに思考操作が大きい。吹雪姉の言っていたとおりだ。

確かに詠唱操作だと、相手の攻撃に合わせるタイミングが微妙に遅れて失敗してしまいそうだ。

とりあえず総括すると、陸でも1対1ならかなりやれる気がする。1対多でも『ステップ』と『受け流し』、『峰弾き』を上手く使って立ち回れば問題無いんじゃないかね・・・？

『亜人の森』にいつてみるか？

敵の湧きがよくて大PT単位で襲ってくるらしいから、良い腕試しになるだろう。

そうだな・・・HP、STポットを買い込んだらすぐに行こう。

そして、一度帝都に戻り、

錬金術士の露天で買い物をしてから『亜人の森』へと入っていった・・・。

8月30日 昼 亜人の森

・・・ハイオークが1匹、オークが3匹、オーク弓が2匹、オークメイジが1匹、オークウィザードまでいるのか。これはちよつとやばいな・・・

亜人の森に入って7時間ほどたった。時刻はちょうど13時頃だろ

最初はゴブリン、コボルド、オークと雑魚ばかりだった。少し奥に入ってもゴブリン弓、コボルド弓、オーク弓がでくる程度で、たまにホブゴブリンやコボルドリーダーが混ざるくらいだったから調子にのってどんどん奥に入っていたのが間違이었다。正直に言う

言つと道に迷った。マジでやばいでしょう。

早朝だったためか他PTもほとんどいなかったのが災いした。

数時間経って迷ったことに気付き、”迷子を保護してくれそうないPTはいないか？”と歩き回ったが、逆にPTすらあまり来ない森の奥深くにまでできてしまったようだ。ジャイアントスパイダーやゴブリンリーダー、ウェアウルフなども余裕だったせいで、”まだ大丈夫。まだ大丈夫。”と置いていたら・・・いつの間にかオーク種ばかりになり、今ではハイオーク、オークメイジは当たり前。たまにオークウィザードまでいるから、マジきつい。このペースでいけば買い込んだ回復ポットも直に無くなってしまふ。

やべー・・・回復ポット無くなったら完全に終わるな。

まじでどうしようか・・・とりあえずはこのオークPTを倒さないとな。

前にでたハイオーク1匹、オーク3匹が、後ろのオーク弓2匹、オークメイジ、オークウィザードを守るように立ち塞がっている。どうにかして後ろに回れないかと隙を窺^{うかが}っていると、遠目からオーク弓2匹がそれぞれ矢を射ってきた。

ステップで避けてハイオークの手前へ跳ぶ。それと同時に『居合』を発動。

一ノ太刀『居合い』でハイオークを吹っ飛ばし、抜き放った長鉞を返して、二ノ太刀『斬り返し』へ。そのまま流れるように隣のオークを一匹殺す。

すでに『一刀流』カードレベルもかなり上がり、このスティール製の長鉞であればオーク程度なら1撃で屠^{ほぶ}れるようになった。”一刀流は地雷だ”と言われるだけあつてか、攻撃に特化しているようだ。なんともバランスが悪い。クセが強すぎる。

斬り返した長鉞を構えなおす・・・と、オーク2匹が左右から斧を振り下ろそうとしていた。

さらにその奥ではオーク弓2匹がすでに二矢目の狙いを定めており、オークメイジとウィザードは杖をこちらへ向けようとしている。

これはまずい。と思った直後、『ジャンプ』を発動し後ろへ飛ぶ。

斧が振り下ろされ、魔法が2発通過する。弓はまだ放たれていない。

ジャンプから着地すると、そのタイミングを狙ったように矢が2本飛んでくる。さらにウィザードが放った魔法は、追尾性能のある『ファイヤーバード』だったようだ。オークメイジの『ファイヤーボール』はそのまま流れていったが、ウィザードの放った魔法は弧を描き、俺へと向かってくる。ボール系は直線的だがバード系の魔法は追尾性能があり厄介だ。

二本の矢と、火魔法1発。

これら全てを食らいHPバーが1/2になった。

そしてハイオークも起き上がったようだ。メイジもウィザードも詠唱を再開し、オーク弓2匹は矢を準備し、オーク2匹は後衛を守るかのように立ち塞がっている。

まだオーク1匹しか倒せていないのに、こちらのHPはすでに半分ほどだ。

焦りを隠すようにほんの一瞬だけ心の中で念じる。『体を熱く。頭を冷静に。思考を平行に』。飛び込んでもハイオークとオーク2匹に塞がれて、弓と魔法で殺される。やはり後衛をどうにかしないといけない。こじ開けよう。上手く立ち回りを変えるんだ。

またた
瞬くようにステップで左に跳ぶ。

戻ってきたハイオークの巨体の影にオーク1匹の姿が直線上で重なる。

長鉈を鞘へ戻し、ハイオークに向かってさらにステップで踏み込む。

一ノ太刀『居合い』でもう一度ハイオークを吹き飛ばす。ハイオークの巨体が後ろのオーク1匹と一緒に転がった。道ができた。

はな
放った長鉈を鞘にしまいながら、ステップを2回。
弓を構えきれていない弓オーク2匹の前へ。

今度も一ノ太刀『居合い』でオーク弓を1匹吹き飛ばす。その体はメイジとウィザードを巻き込み詠唱が途切れた。

返す二ノ太刀『斬り返し』でもう片方のオーク弓へ1撃。

弓の構えが解かれて無防備になった体へさらに追加で2撃目を浴びせて斬り倒す。

すると右手からハイオークの転がる体に巻き込まれなかった残りのオークが、斧を振り下ろしてきた。それを『受け流し』から二ノ太刀『斬り返し』でオークの脳天を割り、周囲を素早く見回す。・
・オークとハイオークが起き上がり、オーク弓とメイジとウィザードも起き上がって構えに入ろうとしている。

残りは5匹。

後衛は左に3匹。前衛は右に2匹。　　まずは左3匹だ。

ステップで左へ。

長鉈を振り下ろしメイジを1撃で殺す。

続いてウィザードへ、オーク弓も視界に入るが無視する。

そのままウィザードを3撃で殺すと、背後から矢を食らう。

HPは後1/3程度。スタミナも、スキルを後5発も使えば空になるだろう。

位置関係が変わったため俺から右前方にオーク弓（矢の準備に入っている）。左前方にハイオークとオーク（すぐそこまできている）。

弓を無視して左へステップ。

さらに前方へステップして左前方にいる2匹の背後に回り込む。

ハイオークもオークも右手に斧をもっている。

その2匹が右回りで振り向こうとする。オークはこちらを振り向いて斧を構えたが、ハイオークは右隣にいたオークが邪魔になり、構えきれしていない。その後ろでは弓オークが構えに入った。

オークが斧を振り下ろしてくる。

『峰弾き』で斧をはじき、から空きの胴へ 1撃で殺す。

長鉈は鞘へ戻す。

ハイオークがこちらを向いて構えた。

オーク弓の矢が俺に刺さった。後1撃で死ぬ。スキルも残り2発だ。

体を熱く。頭を冷静に。思考を平行に。

偉い人は言いました『三十六計逃げるにしかず』

ハイオークを一ノ太刀『居合い』で吹き飛ばす。

ハイオークの巨体がオーク弓を巻き込みながら転がる。

俺は長鉈を鞘にしまいながら後ろへステップし、逃げ出した。

・・・・いくらなんでも多すぎる！無理に決まってるだろう！・
・海なら勝てた（キリ

あれから・・・さらに3時間経った。時刻はすでに16時だ。

オークの大PTが多すぎる。

途中まで戦って、隙をみて逃げて、木陰でポットを使用して回復するパターンが続いていた。小PTがいらないわけでは無いが、8：2ぐらいで大PTばかりだった。

一度3匹の小PTの中に、オークリーダーがいたことがあった。ハイオークとオークメイジを倒して、最後はオークリーダーを絞め殺してやった。

正直ギリギリだったが何とか勝てた。これで倒していないオーク種はこの森のBOSSのオークキングだけだ。

それにしても、ポットがそろそろ底をつきそうだ。これは死に戻りになるな・・・

そんな事を考えて歩いていると、森の先から戦闘音が聞こえてきた。

PTか！これで生きて帰れるかもしれない。

ここまで来るPTなら、きっと雷魔法の『転移門』をもってるはずだ！

森を抜けると広場で6人PTが・・・オークリーダーよりも一回り大きな緑の筋肉達磨きんにくだるまと戦っていた。遠目からでも分かるあの巨体・・・どう見ても豚王です。本当にありがとうございました。

さてと・・・どうしようか？

見なかったことにして逃げるのが一番いいよな。正直あんなの無理だろ。俺の体ぐらいある両刃の大剣をぶんぶん振り回してんぞ。背も3m近くあるんじゃないか・・・

でも結構粘ってるな。あの6人PTすごいわ。

盾騎士三人が囲んで魔法二人が火力。残り一人が回復か　っあ。

盾騎士一人死んだ。これは残り二人ももうすぐだろうな・・・うーん。まじでどうしたもんか・・・

オークキングがいるって事はここが森の最深部なのだろう。

という事は、このPT以外にこんな最深部までやってくるPTなんてまずいないんじゃないかね？つまり、このPTを見捨てても途中でポットが切れて死ぬし、このPTに助太刀してもオークキングに殺やられて死ぬわけだ・・・詰んだな。

よし。どうせ死ぬなら男の生き様を見せて死ぬほうがいいよな・・・うむ、そうしよう。

まず服を脱ぐだろう。パンツは・・・履いておくか。レディには

気を使わないとな。

おし！ボクサーパンツ一丁に皮サンダル、剣帯に長鉈。なんとい
う男っぷり。本当は赤禪アカフンがあれば完璧だったんだが・・・無い物は
仕方が無い。よし行くか　　っあ、もう一人の盾騎士も死んだ。急
ごう

「君達困っているようだね。僕が助けてあげようじゃないか！」

俺はオークキングの斜め後ろに立ち、胸を張って、両手を腰にあ
てながら、さわやかな笑顔でその向こうで生き残っている4人に笑
いかけた。

盾騎士は女だ。水髪碧眼の凄い美人だった。俺を一瞬見てスルー
した。冷静だ。

司祭は男だ。栗毛茶眼、なよなよしてるシヨタ男だった。俺を見
て啞然としてる。混乱だ。

魔女は女だ。黒髪赤目、艶やかな目の巨乳美人だった。俺を見て
笑っている。陽気だ。

魔女は少女だ。灰髪青目、下の毛が生えていない妹だった。俺を
見て怒っている。激怒だ。

え？・・・あれ？妹？・・・マイシスター？Who are
you?どうしてここに？

怒ってる。すんげー怒ってる。首まで真っ赤にして俺を睨んでる。

怖い。すんげー怖い。オークキングよりも怖い。

妹達の方から視線を外し、オークキングを見据えた・・・戦おう。オークキングの方が安全だ。

ちょうどその時オークキングの一撃に美人の盾騎士が吹き飛ばされた。オークキングはそのまま叩き潰そうと、さらに大剣を振り上げる。

俺は一ノ太刀『居合い』をオークキングの膝裏に叩き込んだ。

オークキングが右足を曲げて体勢を崩す。さすがに吹き飛ばないようだ。

続いて二ノ太刀『斬り返し』をよけたオークキングの脳天に叩き込む。ほんのわずかなダメージしか与えられなかった・・・なんて固さだ。

さらに体勢を崩しかけたので追撃しようとしたが思いとどまる。

オークキングが大剣から片手だけ放し、その腕を振り下ろしてきたのが見えたからだ。ステップで避ける。そのまま4人の前に回り込みながら、長鉈を正眼に構えた。

オークキングは振り下ろした腕を地面に叩きつけて体勢を立て直し、怒りに満ちた目で俺を見据えてくる。怒ってる。すんげー怒ってる。前門のオークキングに、後門の妹。パンイチで長鉈を構えている俺・・・なんとという絶望感・・・どうしてこうなった。

オークキングが怒声を天に上げ、その大剣を横薙ぎに振り回してくる。

速い　　が視えないわけじゃない。体を熱く。頭を冷静に。思考を平行に　　長鉈を上段に構え、タイミングをはかり『受け流し』

を発動する。上段に寝かされた峰を大剣が綺麗に滑っていく。そして長鉈を握り締める両腕を伝うかのように体中がきしむような鈍重な感覚が走った。

再度体勢を崩すオークキング。

ステップで踏み込み、その脇腹に二ノ太刀『斬り返し』を放つ。すぐにステップで離れて正眼に構えをとった。自分のHPバーが4/5程度になっていた。完璧に受け流したと思ったがダメージを食らっている。なんだこの強さ・・・ありえねー・・・

次にオークキングは俺の脳天めがけて大剣を振り下ろしてきた。ステップで避けるべきだが本能が危険をつげる。ステップで避けずに再度長鉈を上段に構えた。タイミングをみて『受け流し』を発動する。上段から肩口へと寝かされた峰を大剣が火花を散らしながら滑っていく。横に吹き飛ばされそうになるが必死に踏ん張る。オークキングが前のめりになった。そのままオークキングの脳天に二ノ太刀『斬り返し』を叩き込む。クリティカルになったようだ。少しだけ間ができる。俺のHPバーは残り1/2程度だ・・・後2発か3発しかもたない。

「おい、あんたら。ヒールあるか？」と声をかける。

後ろで固まっていた4人がようやく動き出す。

「え？」と男の呆けた声

「ごめんなさい。うちの司祭のMPはもう空なの。MP回復には時間が……」と落ち着いた女性の声

「どうしたの？私にはあなたが防いでいるように見えるんだけど？」と妖艶な女性の声

「……後どれくらい持ちこたえられるんですか？……侍さん」と
他人のふりをする妹の声

これはまた口きいてくれないかもなー……

「後2、3発しかもたない。雷魔法の転移門は？」

「私がつっているわ。でもあなたはどようするの？」

「この恰好見れば分かるだろう。元より死に戻り予定だ。だから
とつとと転移してくれると助かる」

「マーリン。転移門を出して。グレイブニル魔法都市に戻りましょう」

冷静な女性の声に、残りの3人は手早く動き出す。

ここに妹がいた。つまりこの落ち着いた女性がトップギルドの
一つ『円卓』のマスターなんだろう。

オークキングの3撃目がくる。

最初と同じ横薙ぎだ。

こちらも最初と同じようにして受け流し、斬り返す。……後1
発か2発防ぐと死ぬ。防いでるのに殺されるのか。尋常じゃない
な。そしてオークキングが体勢を戻して、今度は逆方向から横薙
ぎにしてきた。これも同じように対応する。ギリギリHPが残って
くれた。これで後1発で終わる。後ろでは雷魔法の『転移門』が開
いたようだ。

「じゃあ行くけど、あなた名前は？」

他人のふりをした妹の怒った顔が頭に浮かぶ……偽名を使おう

「名前？……半漁人だ。」

「……最後までふざけた男ね。助かりました。よく覚えておきます。ジン」

4人の気配が消えていく。

オークキングが大剣を振り上げる。

こちらの脳天を狙う一撃だ。

大剣が振り下ろされてくる。試しに右ステップで避けてみた。オークキングは大地に叩きつけた大剣を左手だけで掴んで起点とする、その左足を軸として、緑の巨体をぐるりと回した。

右ステップで跳んでまだ着地していない俺の目の前で、オークキングが背中を見せながらぐるりと回ったその瞬間　オークキングの右バックブローが俺の体に叩きつけられた。

大剣は囷で、本命はこのバックブローだったのか……そこで意識が切れた。

気がつくと帝都西門の要石だった。

久しぶりに潮の香を嗅いだ気がする。もう夕刻だった。

ZIN：侍Lv38

一刀流Lv23、居合いLv20、無鬨流柔術Lv9、ステップLv31、ジャンプLv5、泳ぎLv59

「ジン君。いったい何をすればたった一日でスティール製の武器がここまで消耗するんだね」

「ちよつと亜人の森で10時間以上迷ったんだ……後は察してほしい」

「一人でかい？あそこはPT向け狩場だろう。よく帰ってこれたね。君には驚かされてばかりだ」

「いや最後は死に戻り。オークキングとやりあった。吹雪姉の長鉈じゃなかったら打ち合えなかったよ。すんげー強かった」

「……打ち合った？噂ではLv35前後のPTが一振りで消し飛んだと聞いたよ、私は？」

「5合……いや4合打ち合ったのか。まあ吹雪姉の長鉈と一刀流のおかげだよ。俺のレベルが足りないせいで、完全に受け流したのにHP削られたしなー」

首をひねりながら答える俺を吹雪姉が啞然と見てる。なんかこの顔久しぶりに見た気がする。

西門の要石に死に戻った俺は、消耗した長鉈を修理してもらっために、吹雪姉のところに来ていた。

昨晚俺に長鉈を引き渡した後、さっそく侍娘3人組が吹雪姉のところに来てきたらしい。

武器の出来と値段に満足した3人はほぼ即決でそれぞれの武器を買って帰ったらしいが、どうもその日のうちに、吹雪姉の露天には掘り出し物のサメ皮武器があるとの噂が大和の町に広まったそうなのだ。

今日は、まだ日も沈んでいないのに、吹雪姉の武器はすでに売り切れていた。明日の売り物を作るためにちょうど露天をかたづけて工房に行こうとしていた吹雪姉を、俺が捕まえて修理を頼んでいるところだ。

「……ジン君。君はオークキングの攻撃を『受け流し』たのかい？」

「タイミングは完璧だったと思うんだ。でもHPが減ったってことは違うのかも？　もしそうなら吹雪姉の長鉈のおかげで受け流せたのかな？　この逆反りの長鉈は癖が強くて人を選ぶけど、すごくよくできてるよね。一刀流になって『受け流し』を使いはじめてからは、特にそれを感じるな……ってどうしたの吹雪姉。大丈夫？」

えっと、なんか吹雪姉が泣きそうになってるんだが……

「ふふふ、そうか……ジン君が完璧だと思ったのなら受け流せていたんだと思うよ。自信をもってほしい。たったい私も確かな自信がついたよ。その長鉈はね。一刀流の侍を挫折した私が『もしもこんな刀があれば『受け流し』ができたかもしれない』と思って作った武器だったんだよ……。そうか、ジン君の技量とこの長鉈があれば、オークキングの攻撃さえ受け流せるんだね。AOからログアウトもできなくなり、正直よく分からない状況で不安だけど……この仮想世界で私は鍛冶職人を選んで、ジン君と巡り会えて本当に良かった。今日は修理代はいらないよ。タダで修理させてほしい。い

「いかい？」

「あ、ああ。えっと……お願い。吹雪姉」

化粧気も無い。服も煤けた白の作業服のつなぎで色気も無い。でも夕暮れを浴びながら静かに作業する吹雪姉の横顔は美しく、綺麗だった。修理が終わると吹雪姉は長鉈をそつと撫でてから、俺に渡してくれた。

「待たせたね。ジン君、これからもこの長鉈をよろしく頼むよ」

「こちらこそよろしく。それじゃあ」

「ありがとう。気をつけてな」

さてと、棧橋にいくか。いきたくないな……

吹雪姉と別れ、棧橋についた俺はフレンドリストから『EYE』を選び個別回線を開く。

実は死に戻った直後に『兄さん話があります』と怒れる妹殿から個別通話がきたのだ。俺は約束があるから今度にしてほしいと逃げたが、『ではお待ちしておりますので』と言われて切られたのだ。

『藍。今大丈夫か？』

『お待ちしていました。兄さん』

『……』

『で？』

『で…とは？』

『なぜ亜人の森に、あのような姿でいたのかと聞いているんです』

ですよねー・・・

『み、道に迷ってたんだ。本当だぞ！』

『兄さんは、道に迷うと下着一枚になるのですか？それでしたら今後の家族の縁をどうするのか。考えないといけませんね。私は』

無かったことにはしてくれないようだ・・・

『違うんだ。聞いてくれ藍！』

『何がどう違うというんです？』

以前にも同じ流れがあった気がする。

・・・確かあの時は正直に話せば分かってくれたはずだ。

『目の前で決壊しかかったPTを見つけたから、男らしく助けようと思ってパンツ一丁になっただけなんだ！そして偶然そこに藍もいただけなんだ。……ほら？兄さんかつこよかっただろう？』

『……っ！兄さん！いいですか！今日という今日は言わせてもらいます！兄さんは考えが無さすぎます！それにいい加減だし…エッチだし！一番最低なのは綺麗な女性や色っぽい女性がいるとすぐにジロジロ見ることです！どうせマスターのヴィヴィさんを見て不純な気持ちになったから、あんな変態なことをしたんでしょう！それともマーリンさんですか！だいたい兄さんは……』

・・・妹の説教が終わるのに2時間。

通話は切らないくせにほとんど口をきいてくれない状況が1時間。俺はひたすら謝り続けた。ようやく妹が口を開いてくれた頃には、時刻は8月30日の20時半になっていた。

『今回だけですからね。次はないですから。いいですね、兄さん』

『……はい。申し訳ありませんでした』

『では話は変わりますが』

『お、俺はもう他には何もやってないぞ！本当だぞ！』

『違います。そういう話ではないです。というか焦るところが怪しいですね。何か他に隠していませんか？』

『か、隠してなんかないぞ』

いつか赤禪^{アカフシ}一丁で泳ぐつもりだなんて言ったら、今日は寝れない気がする。

『……まあいいでしょう。兄さんに質問があります。兄さんは『思考操作』ができるのですか？』

『ん？ああ……そのことか。思考操作な。それなら出来るようになったぞ』

『ホッとしているのが気になりますが、時間ありませんしまた今度にしましょう。そうですかやはり使えるのですね。でも『出来るようになった』ということは、最初はできなかったのですか？』

『ぜんぜん使えなかったな。3週間程海簞りをしてマスターしたんだ』

遠い目をしながら、あの日々を思い出す。マジきつかったよねーあれ……

『海簞り？……またよく分からないことを。そんなことですから掲示板で『半漁ZIN』なんて言われるんですよ。兄さんは』

『……。藍もあのスレ見てたのか……』

『もちろんです。アカシックさんのまとめは的確で分かりやすい』

ですしね。トップギルドの人は皆見てると思いますよ。うちのマスターのヴィヴィさんももちろん見てます』

あー・・・だから本当の名前はZINNだって、すぐにバレたのか・

『あの盾騎士の人だよな凄い美人の？あの後なんか言ってたか、偽名使ったのバレてたし、ちょっと怒ってたように聞こえたんだが……？』

『珍しく感情を表に出されてました。『ふざけた男。この借りは必ず返します』と言ってましたね。ちなみにヴィヴィさんも『思考操作』を使える方ですから、本当に強いですよ。がんばってくださいね。兄さん』

何をどうがんばればいいのか分からないが、なるべく会わないように気をつけよう・・・

『では兄さん。最後に一ついいですか？『思考操作』を使うコツとはどんな感覚です？』

『体は熱く。頭は冷静に。思考は平行に。……だな。これが俺の行き着いた感覚だった』

『……ヴィヴィさんも似たような事を言っていました。はあ……挫折しましたが私ももう一度がんばってみようと思いますけど……やはりよく分かりません。ひとまず兄さんにできたのでしたら、同じ血を引く私にもできるはずだと信じてみます。では長々とありがとうございます。今日は助けて頂いてありがとうございます。オークキングと打ち合ってた時だけは、ちょっとだけかつこよかったですよ。それでは』

そう言って妹はこちらの挨拶も待たずに個別通話を切った。俺は

なんとなく照れくさくなり、頭をかいた。

さてと今日はゆっくりと眠ろう。明日はいよいよ8月31日だ・・・

8月31日 22時22分22秒

あの日と同様。アルカナの世界は闇に包まれた。何も見えない。何も聞こえない。何も匂わない。何も触れられない。何もしゃべれない。それが一瞬なのか。それとも悠久の刻なのか。それすらも分からないまま。

闇の中に低い男の声が響き、男の声に合わせ白い文字が浮かび上がる。

『愚者』よ 始まりの『愚者』達よ

汝らがアルカナの大地に降り立ち30の夜を越えた

汝らの多くは決断した 知恵を得て 力を得て 人の子として歩むことを

故に我は『審判』を下す

まずは門を開こう 全てのアルカナへと続く 全ての門を解き放とう

つぎに自由を与えよう 望むのならば 人は人とも争えるであろう

最後に試練を与えよう 56の夜を越えた時 アルカナでの死は『世界』での死となるであろう

人の子よ 注意せよ 生ある者にとってもつとも困難な道となることを

人の子よ 解き放て すべてのアルカナを さすれば『世界の扉が開かれん

そして、ユーザー達は闇から解放される。まったくあの日と同じだ。

ユーザー達が啞然とその場に立ち竦む、その姿までも……。最後に、そんなユーザー達をあざ笑うかのように、無機質なゲーム内アナウンスが響き渡った。

アルカナクエスト『審判』が達成されました。
これに伴いゲーム内システムがいくつか変更されました。

- 9 - (後書き)

これにて第2章は終了となります。いかがでしたでしょうか。

第3章開始にあたってはただけ充電期間を頂きます。すでに下書きはそこそこ進んでおります。今後の詳しい執筆予定は私の活動報告(9/24)を参照下さい。

第1章、第2章と約一週間にわたり投稿させて頂きましたが、皆さんの感想・評価・お気に入り、そしてとても素敵なレビューまで頂きまして本当にありがとうございます。これからもどうかよろしく願います。

/ 2011.9.25 十三

- -

第3章は10/1より開始させて頂きます。

/ 2011.9.30 十三

- 1 - (前書き)

第3章開始となります。どうぞよろしくお願いします。

アルカナ雑談スレ 369

1：アカシツク

適当に雑談するスレッドです。

晒し行為は、晒しスレでお願いします。

攻略情報は、各種攻略スレにも書き込んで頂けると助かります。

513：こっぺパン

ぶつちゃけ。デスゲーム化するなんてことはみんな薄々気付いてたでしょ？

514：Bellbet

まだ決まったわけじゃないぜ？ハッタリの可能性もある

515：タランティノ

>ハッタリの可能性もある（キリ

だったら56日後に試しに死んでみてくれよwwww

俺は予言を信じる。もう一ヶ月以上もログアウトできない

のに、

ww

本当にそんな戯言が通じるとでも思ってたのかよ？www

516：チキン蛮族

煽るなって。恨まれてPKされても知らんぞ

517：Mailpro

問題はPKだよな。トップギルドの一つがPKギルド化したら、バトロワ決定

518：らすくーま

ガクブル

519：トロ

俺はもう生産職になることにしたよ。街周辺は安全圏だしね。

520：七福神

<<519 ナカーマ

521：柚子茶

どちらにしても、今のうちにどこかのギルドに入っておくのが得策でしょうね。

522：パパラッタ

で、入ってきた新メンバーに後ろから刺されるんですね。分かります。

523：JETSET

先に裏切ればよくね？

524：poppy

なにそのギルド、コワイ

525：べんべけ

話戻すけどさ。そもそもトップギルドってどこよ？有名な

ギルド教えてくれよ

526：ミルキィなパパの味
ググレ

527：GuitarMan
<<526　つちよwwwwww

528：マスターペンション
<<526　なんか和んだw

529：Mailpro
<<526　wwwwww

<<525

マジレスすると、南砂漠の『太陽』の塔を攻略した連中だろ
うな。皆Lvが高い

その中でも『太陽』の塔のBOSS戦で活躍した7つのギ
ルドが有名。

<漆黒の騎士団>、<円卓>、<Big Moon Sh
adow>、<クルセイダース>

<戦国絵巻>、<魔女巫女同盟>、<沈黙の料理人>

530：ウツチャロ

沈黙の料理人のマスターってなんであんなに強いの？

531：稲穂

名前がセガールで職業が料理人だから。理屈じゃねえんだよ

532：ウツチャロ

納得した

533：石榴法師

納得すんなw

534：TANISHI

円卓と漆黒はMO時代から仲悪いよね・・・

535：FunkyRadio

国家戦争で毎週やりあってたしな。良くて冷戦。悪くて殺し合いだろう

536：ダスト

巻き込まれたくねー

537：和人

でも円卓のマスターに踏みつけられて死ぬのは、ちょっと
ありだよな

538：パーミ

DMレベル高すぎwwww

539：見抜きの魔眼

円卓のマスターはリアル美人。いじった不自然さがない。

MMO時代から数々の見抜きをしてきた俺が言っただから
間違いない・・・ふう

540：蛙風船

おいばかやめろwwww殺されるぞwwww

541：Red

やっぱあれ天然美人なの？

542: EnterLiar

円卓は魔女二人のがいい。貧乳口り魔女と巨乳魔女。この二人も天然

543: だいだらぼっち

<<539 mjd

544: ねこたろう

<<539 kws k

545: レグサス

おまえら自重しろ。これ以上は晒しスレ行け

546: ハチベエ

円卓と漆黒よりもBMSのが怖くない？最近PKしてるって噂聞かし

547: Lang

<<546 おまえ消されるぞ

548: 石榴法師

<<546 南無

549: dodoria

<<546 あーあ。匿名じゃないんだから・・・

8月31日以降、アルカナ掲示板では様々な情報や憶測が飛び交っている。

どのスレッドも進行速度が速い。

誰しもが、きたるべきデスゲームに備えて一つでも多くの情報を得ようと躍起だ。

・・・貧乳口リ魔女とか書き込んだ奴。藍にPKされんぞ。わりとまじで。生えてないしな・・・

誰が言い出したのか？

最近では8月1日と31日に発生した『運命の輪』と『審判』のアルカナクエストのことを・・・”予言”と呼ぶようになった。

そして現在の日時は、31日の予言の日から2日後の9月2日 9時36分である。

俺は暇な時間を潰すためにアルカナ掲示板を覗いているわけなんだが・・・

「……………拾われねえ」

帝都アスガルドの南西エリアには『ルイージの酒場』という巨大な酒場がある。

ファンタジーによくある木目調の酒場だ。

店内は5階建て。

5階まで吹き抜けになっており、各所に吊るされたランプが淡い光を放つ。

各フロアの壁際にはぐるりとカウンター席が並び、中央側には丸テーブルがズラリと並ぶ。

それぞれのカウンターにはNPCマスターが配置され・・・それに混ざるように料理などを販売する料理人ユーザー達と、各席を埋め尽くすようなユーザー達で溢れかえっている。

そしてNPCマスターが”緑服に青ズボンのヒゲオッサン”という著作権的に色々ややばそうなの酒場では、『PT募集登録』や『ギルド募集登録』などが可能だ。

吹雪姉曰く、「ルイージの酒場は、『せつかくのVR空間』なのだから、PTやギルドの募集もゲーム内でできた方が面白い」というクロースド参加テスターからの要望をもとにして実装された建物だよ」との事だ。

ここで登録したユーザーの行動は大きく2つに分かれる。

1つは、適当に飲み物などを嗜みながら、PTに誘われるのを待つユーザーで。

1つは、席ごとに常備されている登録台帳から自分の条件に当てはまる者を探し出し、積極的に自分から声をかけにいくユーザーである。

要はPTのハッテン場なのである。PTヤラナイカ。
ちなみに募集PT側は6人掛けの丸テーブルに座り、
PT参加希望側（主にソロユーザー）はカウンター席に座る。

これが”ルイージの酒場”での暗黙のルールだ。

現在俺はルイージの酒場で、即席狩りPT（通称：臨時PT）に入れてもらうために”緑服のヒゲオッサン”に100ゴールド支払ってユーザー情報登録し、1階のカウンター席に座っている。

そして、どこかのPTから誘われないかと待っているのだが……
まったく拾われる気配が無い。

以前、大和の町で『一刀流はPTになかなか入れてもらえない』と聞かされていたが、正直ここまで酷いとは思っていなかった。

臨時PTに参加しようとルイージの酒場に通い始めて二日目。
未だに一度も臨時PTに参加できていない。

初日は「Lv20 侍or騎士：臨時募集」などに対して、
自分から積極的に声をかけにいったのだが、俺が一刀流の侍だと分かった途端に

「えーマジ。一刀流!？」

「キモイ」

「一刀流が許されるのはクローズド　までだよー」
「キヤハハハハハハ」

という感じのトラウマを何度も味わった……。

なので今では誘いを待つスタイルに徹している。

俺と同じような誘い待ちの侍はたくさんおり、二刀流や宝蔵院流槍術の侍はすぐに拾われているようだが……同じ侍でも一刀流だけが極端に拾われないようだ。

というか昨日から今日までに台帳登録された侍で一刀流は、俺しかいないんじゃないか……？

そうそう。台帳登録についてだが。

この酒場では登録手続きを行った瞬間に、全席の登録台帳に自動的にユーザー情報や座席番号が追記される。またそのユーザー情報を削除したい場合は、この酒場から出て行けば自動的に削除されるシステムだ。

俺は待ち時間を使ってアルカナ掲示板で新情報を確認していたわけだが……

さすがにそろそろモブ狩りしないと藍とのレベル差がまたひらくしな……うーむ。

とりあえず、31日の予言の日以降の最新情報でもおさらいして

おこつ

・56の夜を越えは、8月1日から数えると9月26日
(8月31日から数えると10月26日、どっちだ?)

・56の夜を越えると、デスゲーム化する?

・『審判』の石柱に炎が灯った

(『運命の輪』『審判』『太陽』が灯火。残りは17本)

・トップギルドの職業レベルは、LV40〜45らしい

・帝都北門が開いた。ラグロア川を越えて大陸北側へいける。

強敵ばかり

・北東の山岳地帯(ドワーフ鉾山の北)にラグロア火山とラグロア湖がある

・北東のラグロア湖からラグロア川を下ると帝都北門につく

・北門から橋を渡ると王家の墓がある。不死系ダンジョン。詳細不明

・王家の墓の周辺には、ドラゴン種ばかりの草原が広がる(通称:竜の草原)

・セリフが変わったNPCが多数いる。アルカナクエスト関連?

・南東の草原(通称:トカゲ草原)にダンジョンが見つかった。

詳細不明

・南西の草原(通称:馬の草原)にBOSSスレイプニルがでる。超強い

・『太陽』の塔のBOSSドロップは、トップギルドの一つ『BMS』がルートしたらしい

・街から一定以上離れるとPK可能。デスペナあり。アイテムドロップなし

・五感・睡眠・食欲などが現実に近い。ダメージを食らうと本当に痛い

・一部の禁止プログラムがさらに解除された

・その他、新モブ情報、新スキル情報。色々……

大陸北側の未開拓地に関する情報がやはり気になる。

・・・が、ほぼ全てのユーザーがデスゲームを覚悟しはじめたせいか。

今一番注目されているのはPKに関する情報だ。

今のところは、誰かがPKされたとか、したとか、真偽不明の噂話ばかりでPKそのものは活発化していない。だがデスゲーム化後も同じ状況が続くとは誰も思っておらず。ちよつとした諍い^{いさか}から牙を剥くPKユーザーが出てくるのでは？と考えられている。

そして、その時こそが本当の危機だ。

デスゲーム化後に油断してPKされてしまえば、そこでもうおしまいなのだ・・・。

だからこそ集まる。

このルイージの酒場に。

一人でも多くの信頼できるユーザーを探すために

一人でも強い仲間を作るために

そして強固な信頼で繋がるギルドを作り上げるために

ユーザー達はこのルイージの酒場に集い、共に戦い、親睦を深めている。

今しかない。デスゲームが始まってからでは遅いのだ・・・誰しもが不安を隠しながらも生き残る準備をすすめていた。

かくいう俺も、そんなユーザーの一人なのだが。
やばい。まじで拾われない。藍に偉そうなことを言った手前、本
当になんとかせねば……

31日の予言直後、やはりというか何というか。
今後の相談をするために俺と妹はすぐに個別回線で通話をした。

……どうでもいい話だが、お互いがお互いに個別回線を開こう
としたために、なかなか繋がらないなんていう笑い話にもならない
トラブルもあった。

その時の会話を思い出す

『予想通りと言っべきでしょうか……デスゲームが始まりそうで
すね』

『そうだな。なあ？藍はこれからどうしたい？』

『私は…私は兄さんに一緒にいてほしいです。そしてアルカナク
エストをクリアして、ここから一緒にログアウトしたいと思ってい
ます。だから……兄さんも円卓に入りませんか？』

『俺みたいなnobb（初心者蔑称）が一緒だと、逆に足を引
つ張るだけだろう？俺も藍と一緒にいたいと思っている。でも周り
の足を引っ張って、仲間を危険な目に遭わせるわけにはいかない。
藍以外の円卓のメンバーも不必要にメンバーを増やす方が危ないと

考えているはずだ』

『そう…でしょうか…。でも兄さんなら大丈夫だと思います。思考操作も使えますし、オークキングとだって打ち合えたんですからダメですか？』

『ダメなんかじゃない。けど俺は思うんだ。こういった状況では信頼できる仲間を一人でも多く作った奴が生き残るって。……なあ？俺達兄妹が両親を亡くして、二人きりになった日々のことを今でも覚えているか？』

『……はい。はつきりと覚えています。あの頃、兄さんが私を守ってくれなければ、今の私はありません。いつもいつも兄さんが私の分まで酷い目にあって、私はそれをただ見ているだけで……絶対に忘れません。あの当時のことは。です。で兄さんさえ一緒にいてくれれば、きっと今回も大丈夫だって思えるんです。だから……一緒にいてほしいです。もしも兄さんが円卓に入れないというのなら、私が円卓を抜けます。それでは迷惑ですか？』

幼少の頃に両親を亡くした俺達兄妹は、親戚中をたらい回しにされた。

最悪の日々だった。ろくな食事も与えてもらえず。無意味な暴力も毎日のように受け……。

俺よりもさらに幼かった妹からすれば、あの日々の中で俺がまるで救世主かのように、その目に焼きついたのかもしれない。

だが救世主は俺じゃない。

園部の爺さんと婆さんだ。

生きているだけで辛いと思えるほどの地獄のような毎日から、俺と妹を救い出してくれたのは、紛れも無く園部の爺さんと婆さんで、貧しいながらも俺達兄妹をここまで育ててくれたのも……。

だからこそ思う。

この仮想世界を生き抜くには俺達二人だけじゃダメなのだと信賴できる仲間が一人でも多く必要なのだと、そう思うのだ。

それを妹にもしっかりと伝えてやらなければならない。

・・・もう妹も小さくないのだから。

やがて大人になり、どこかの誰かと恋をして、いつしか俺と妹は離れていくのだから・・・

『迷惑なんかじゃない。どんな時でも困ったこと辛いことがあれば、すぐに俺を頼ってくれていい。たった二人の兄妹なんだから。でもな、忘れちゃいけない事がある。あの時俺達二人を救ってくれたのは、園部の爺さんと婆さんだ。俺達二人だけじゃ抜け出すことなんて絶対にできなかった。分かるだろ？』

『……それは……はい。確かにそうですが……』

『そしてあの時も、今回も、まったく同じ状況なんだ。俺達二人だけじゃ絶対に脱出できない。あの時、園部の爺さんと婆さんがいてくれたように、今回も信頼できる誰かが必要なんだ。そしてそれは一人でも多くいた方がいい。そう思わないか？』

『……』

『藍。あの時と今回とで、一つだけ大きく違うことがある。何か分かるか？』

『えっと……すみません。すぐに思い浮かばないです』

『それは俺達が成長したってことだ。藍はさっき『あの時は俺を見ていることしかできなかった』って言ったけれども、今は違う。俺が藍を助けられるように、藍も俺を助けることができるんだ』

言葉に気持ちをこめる。一言一言に思いをこめる。

お前はもう小さな子供じゃないんだ。俺を支えることだってできるんだ。

そう伝えるために力をこめる。

『だからな。藍は円卓に残って信頼できる仲間を一人でも多く作るんだ』

『兄さんと一緒じゃいけないんですか？』

『今の俺が円卓^{トップギルド}に無理に入れば、藍の立場が悪くなるかもしれない。それじゃあ意味無いだろ？それにな。俺達二人で信頼できる仲間を探すよりも、分かれて動いたほうがより多くの仲間と知り合えるはずだ』

『それは……』

『もう一度言うぞ。藍は、藍自身で信頼できる仲間を作るんだ。そして俺も俺だけで信頼できる仲間を作る。そうすれば二人で一緒に動くよりも、より多くの仲間を集められる。これはきつと大きな力になる。デスゲームを生き抜いて、この仮想世界から抜け出すための大きな力になるはずだ。だから合流するのは”56の夜を越えた”後でも遅くはないと思ってる』

伝えたい気持ちを乗せながらゆつくりと諭す。お前なら大丈夫だと・・・

そして、悩むような、悲しむような、無言の時間が過ぎていく

『……分かりました。兄さんの期待にこたえられるよう、私は私でがんばってみます。でも兄さんに円卓に入ってもらいたいというのは諦めません。いいですか？考えておいて下さいね。兄さん』

『ああ、分かった。まあ偉そうなことを言った後に言うのもなんだが、入れてもらえそうなギルドが見つからない時は藍を頼るから、その時は頼むわ。逆に藍も円卓で何か困ったことがあれば、すぐに

俺を頼るんだぞ」

『ええ。その時はもちろんそうさせてもらいます。逆に兄さんが私を頼ってきた時には、弱味につけこんで私専属になって頂きますので、覚悟しておいてくださいね　……』

・・・これはなかなか名案ですね。なんていう妹の声はやたらと弾んでいる。

うれしそうだ。すんげーうれしそうだ。・・・え？もしかしてガチなの・・・それ？マジデ？

『それでは兄さんもがんばって下さい。それと兄さんはすぐ鼻の下をのばすんですから、変な女性にだまされないよう、くれぐれも気をつけてくださいね。分かってますか？兄さん』

『ああ、分かってる分かってる。じゃあ藍もほどほどにな。また何かあれば連絡しろよ。それじゃあまたな』

『むー…本当に分かってますか？やっぱり兄さんを一人にしておくのは色々心配です……。でも今回は納得しておきます。本当に頼みますよ？それでは兄さん、おやすみなさい』

そんな感じで、最後には逆に妹から心配されて終わってしまったのだった。

とりあえず現時点ではデスゲームもまだ始まっていないので、それほど心配することもないだろう。まずは気楽にいこう。

それよりもだ・・・まじ拾われねえ。ほんとどうしよう。

妹にあれだけ偉そうなことを言っておいて、未だにPT一つ組めないとか、ぶっちゃけやばくね？

・・・仕方がない。もう一度どこかの募集PTに声をかけに行くか・・・。

どうせまた断られるんだろうな・・・しかも「一刀流（笑）」とか言われるんだろうな・・・いやだな・・・でも行かないと進まないしな・・・っと、席を立とうとした時だった。

「うつさいわね！はつきり言いなさいよ！」

弱気になっている俺の耳に、女の大きな怒声が飛び込んできた。
なんだ？ケンカか？

怒声がした方へと顔を向ける。

少し離れたところにある丸テーブルでトラブルになっているようだ。

羽織千早付きの巫女装束を着たユーザーが、両手を丸テーブルに叩きつけ、中腰になりながら何やら文句を言っている。・・・中腰のせいで腰のくびれが浮かび上がり、突き出された尻が妙にエロイ。こちらからだと後姿しか拝めないのが残念だ・・・。

「もういい！私から抜ければいいんでしょ！抜ければ！」

女はそんな捨てゼリフとともに、イスを倒しながら勢い良く立ち上がり、怒気をはらんだままカウンター席のほうへと歩いてくる。そしてそのまま目の前を通り過ぎて、俺の2つ隣にあるカウンター席に荒々しく形の良い尻を下ろした。

さっきは尻ばかり見ていたせいで気付かなかったが、髪色は綺麗なワインレッドだ。

肩口より少し長いそれはクセのない艶やかな髪質で、巫女装束によく似合っている。

また通り過ぎる直前に見せた顔は、怒りに満ちているにもかかわらず美しい顔立ちをしていた。勝気で燃えるような赤い目が、凜としていて印象的だ。まるで人には懐かない優雅な山猫のようだ。

恐らく同年代だろう。普段から和服を着慣れているのだろうか？荒々しい動作にもかかわらず、和服を着こなす女性特有の上品さが漂っている。カウンターに座るその姿勢もなかなか様になっており、綺麗だ。

羽織千早のせいで体のラインが隠れてしまっているが、かなりスタイルもよさそうだ。

さきほど見せた後姿がなかなか頭から離れてくれない。そんな巫女装束の女性から視線を外しきれないまま、ぼんやりしていると・
・不意に女と目が合った。

「なに？なんか文句でもあるの？言いたいことがあるなら言いなさいよ。ずっと見られてると鬱陶しいの」

「ああ……悪い。突然だったからちよつと驚いただけだ。そんなつもりじゃなかったんだが、不躰だったな。すまん」

「あつそ。大声だして悪かったわね。ちなみに今すぐごく機嫌が悪いの。だから変なちよつかいだけはかけてこないでよね？言ってる意味、分かるわよね？」

どうやらナンパ野郎だと間違われたようだ。

まああれだけ無遠慮に眺めていたら、そう思われるわな……。俺は苦笑を浮かべながら両手を軽く上げる。そうして害意が無いことを伝え、だまって女から視線を外した。何となく募集PTに声をかけにいく気にもなれず、まただらだとアルカナ掲示板を眺めることにした。

掲示板には特に目立った新情報もなく、PKの噂話でループばかりしているようだ。

すぐにやることが無くなった。

今の時刻は10時30分。まだ一度も声がかからない。このまま待ち続けても意味が無さそうだ。

最後に募集PTに声をかけて回って、それでダメなら諦めよう。

これ以上ここでだらだら過ごすよりは海狩りしていたほうがマシ

だ。

時間がもつたない。俺はそう決断してカウンター席を立った。

「え？一刀流？一刀流はちょっと…」

「中衛も募集してるけど、中衛は槍、鎚の人じゃないとねえ」

「ごめんなさい。盾騎士が二刀流侍の前衛募集なの」

「居合い（笑）ないわー」

「あれ？あんた半漁ZIN？……悪い。俺ら陸で狩るんだわ」

「一刀流じゃ敵のタゲもちきれないでしょ？無理無理」

「一刀流で臨時PTとかなめてんの？」

「一刀流、居合い、無鬨流柔術、ステップ、泳ぎ、ジャンプ……」

何このゴミ」

e t c . e t c

カウンター席に戻ってきた。

飲み物を注文し、一息つく。

まったくダメだった。これは無理だ。

なんつーか……どの募集PTからも厳しい反応しか返ってこない。さすがに凹む。

これを飲み終わったら泳ぎに行こう。とにかく気分をリフレッシュしたい。

そんな風に考えていると、俺の2つ隣のカウンター席に先ほどの巫女装束の女性が戻ってきた。

「どいつもこいつも！」などと呟きながら、俺と同じようにやさぐれている。なんとなく同族意識が芽生えた。どうせもこの酒場

にくることも無いだろうし、せつかくだから声かけるか・・・。

「なんだ？そつちも断られたのか？」

「あんたには関係ないでしょ！つていうか、ちょっかい出さないでつて言つたわよね？」

「別にナンパ目的なんかじゃねえよ。声かけたただで怒らなくてもいいだろう」

「だつたら何だつて言うのよ？男が知らない女に声をかけてくる理由が他にあるつていうの？」

想像以上に機嫌が悪いらしい。ほんと山猫みたいな奴だ。

どうでもいいがナンパ野郎だと誤解されたままだつてのは気に食わない。

「とりあえず男とか、女とかつて考え方捨てる。俺はここにナンパしにきたんじゃない、臨時PTを探しにきたんだよ。で、なかなか拾われない奴が近くにいたから声をかけてみただけだ」

「何よ、それ？まさかとは思うけど、見ず知らずのあんたに私は同情されてんの？もしかしてケンカ売つてる？」

「いちいち絡んでくるなよ。めんどくさい奴だな。同情なんてしてねえよ。単に俺も全然拾われないから、なんとなく声をかけてみただけだ。悪かったな。やぶ蛇だった。もう二度と話しかけないから忘れてくれ」

そう言つて飲み物を一気に飲み干す。

もう会話はこれで終わりだ　と腰を浮かせたのだが・・・今度

は逆に女が俺に興味を持ったようだ。

「あ。待ちなさいって、ごめんごめん。ちょっと機嫌が悪かったのよ。今のはさすがに私が悪かったわ。反省してるからちよつと待ってよ」などと声をかけてきた。さすがにここまで言われて黙って席を立つのも大人気ないので、話の続きを促すよう腰を落ち着ける。

「ねえ、あんたって侍でしょ？変わった形してるけど、それ刀よね？だったらなんで拾われないの？侍だったらすぐでしょ」

「……一刀流なんだよ……」

「え？何？」

「一刀流なんだよ。俺は」

「……」

「……」

「……つぶ」

「つちよ、おまえ！何も笑うこと無いだろう！？」

「いや、だって、今時一刀流って……あはははは。まだ絶滅してなかったんだ一刀流」

カウンターテーブルに顔をくっつけ、腹を抱えながら足をバタつかせている。

一応笑いをこらえようとしているみたいだが、全然なつてねえぞ、こら。

俺はそんな女を無視し、黙って追加の飲み物を注文した。ちくしよ。なんて厄日だ。

「ごめんごめん、悪気は無かったのよ。だからそんなに不貞腐れないですよー…ね？」

「……」

笑いをおさめた女がまず最初にした行動は、俺の隣へと席を移動することだった。

そして自分も飲み物を注文したところで、ようやく俺がやさぐれていることに気付いたらしい。

今は顔の前で手を合わせ”ごめんなさい”しながら、こちらを伺うようにしている。この女は卑怯な奴だ。ちょっとかわいいと思っってしまったじゃねえか……。

「ほらほら、気を取り直して。奢るからさ」

「……」

「ねね。私もさ、ちょっと人気のないカードタイプの巫女なの。あんたほどじゃないけどね。だからなかなかPTに入れてもらえなくって……ほら？似たもの同士じゃない。だからもう許してよー」

さっきまで怒りちらしていたくせに、今はからからと笑っている。喜怒哀楽がはっきりしている奴だ。……こういう奴は嫌いじゃない。

なんだか負けた気がするが、男がいつまでも不貞腐れていても女

々しいだけだ。

「分かった分かった……俺の負けだ。もう怒っちゃいけないから、普通に座ってる」

「うんうん。男はそうじゃなくっちゃ……ねね？グツときた？男はこういう媚びた仕草に弱いつていうけど、どうだった？」

「きてねーよ。ああ、こら馬鹿やめろ。胸よせながら見上げてくんじゃねえよ」

くつくつく……と喉を鳴らしながら『上手くいった』と、女が喜ぶ。

こいつはガキかと呆れながらも 細身のくせにそれなりに胸もあるもんだな と、頭のどこかで考えてしまうのは、男としては仕方がないことだと思っただ……。

とにかく話の流れを変えよう。

このまま弄ばれては男の沽券にかかわる。

「人気のないカードタイプって言われても正直よく分からねえよ。そもそも巫女ってどんなタイプに分かれるんだ？」

「えっとね。大雑把に言えば近接戦闘タイプと支援タイプね。で、私は近接戦闘タイプなわけ、ほら」

女が近くの壁にたてかけてあつた薙刀なぎなたを指さす。

なるほど。確かに街中で見かける巫女は、扇子・水晶・魔符などの術具をもったユーザーばかりだ。きつと術具を使う巫女が支援タ

イブなんだろう。

「薙刀使いは初めて見るな。でも長物^{ながもの}つてことは中衛だろ？ だったら臨時PTでもそれなりに需要があるんじゃないのか？ 中衛募集のPTなんて探せばすぐ見つかるだろ」

「31日の予言の前までならね。でも予言以降はダメ。掲示板情報で推奨化されたテンプレ通りの職とカード編成じゃなきゃ断られるわ。ほんと、どいつもこいつも……」

現在AOで基本とされるPT編成は、前衛3枚・後衛3枚（通称：ウイズPT）の編成だ。

なんでも2世紀前のRPGが元ネタらしい。スミイチの開発スタッフが大ファンだとか……。

・前衛3枚は騎士or侍
・後衛3枚は支援役1枚（司祭or巫女）、火力役2枚（魔術師or魔女）

フィールド戦闘では、これが推奨のウイズPTとされている。ダンジョン探索では、また異なるらしいが……。

ここに中衛を加える場合は、前衛か火力役のどちらかを1人削るのが一般的だ。

そして中衛は槍侍か鎚騎士が推奨とされている。

「だからって、断られる度に怒ってたらキリがないんじゃないか？さっきみたいに怒声を上げてたら、いつか晒しスレに名前を晒されて、どこのPTも受け入れてくれなくなるぞ」

「それぐらい私も分かってるわよ。それに……さっきあんなに怒ってたのは断られたからじゃない」

そこで女が一息つくように飲み物を口にした。

何やらまだ腹に据えかねるものがあるらしい。

俺もグラスに口をつけながら視線で話の続きを求めた。

女は、時より思い出すようにしながらも、どうしてあんなのか？その経緯を教えてくれた。

女の話 요약するとこうだ。

オープン 開始直後に知り合った4人でずっと固定PTを組んでいたらしい。

PT上限は6人のため、足りない2人はルイージの酒場で臨時募集し、毎日楽しくPT狩りをしていた。ゴールドが貯まったらギルドを作る予定まであったそうだ。

その頃は、ログアウト不能もどうせ年内には出られるだろうと皆

気楽に考えていたという。

ところが31日の予言の日以降、PTメンバーの態度が大きく変わってしまった。

近接戦闘タイプから支援タイプにカード変更すると、イラついたようにしつこく言われるようになり、昨日は狩りの間もずっと言われ続けたため、かなりストレスが溜まっていた。

で、今日に繋がるわけだが……。

いつものようにルイージの酒場で臨時募集をかけていたところ、一人のユーザーが声をかけてきた。募集していた条件に合致するユーザーだったので、そのまま入ってもらおうとした時に事件がおきた。

『え？支援巫女じゃないの？近接戦闘？まじ？デスゲームがもうすぐ始まるってのに呑気なもんだな。悪い、やっぱ他あたるわ』

そう言い残してそのユーザーは立ち去ったという。

これには女も申し訳なく思い、自分のせいでごめんなさいと謝った上で、カードも支援タイプへ変更すると申し出た。

それで話が終われば良かったのだが

「こつちがそこまで折れたっていうのにさ。なのにあいつらときたら！『あーあ、支援巫女じゃない人があるから、今日はもう臨時PT組めないかもな』だとか、『だから昨日あれだけ言ったんじや

ん』とか、『カード変更するって言ってもさ、使えるようになるまでどうするつもり？もしかして吸い取り？やめてよねー』とか……ずつとよ！ずつと！ネチネチと言われ続けた私の気持ち分かる！？」

「分かる。よく分かるから、とりあえず落ち着け。ほら奢ってやるから、とりあえず飲め」

何故か俺が奢ることになってしまった……腑^ふに落ちないが、昨日今日と一刀流（笑）と断られ続けた俺からすれば、女の気持ちはよく分かる。

「ぶはあ。抜けてほしいなら抜けてほしいって言えばいいのよ！それを煮え切らない態度のままグチグチと嫌味ばかり言ってるさ。あんなの男らしくないわ！だからあんなPTこつちから抜けてやったの！」

こいつがさつき怒鳴りあっていたPTは男2人と女1人だった気がするが、揚げ足なんぞとっても仕方が無いのでスルーしておく。

「でもさ……。私が抜けた途端あいつらのPTはすぐ埋まるし、私を入れてくれるようなPTも見つからないし、やっぱり……薙刀もった巫女なんかじゃダメなのかな……」

「別にダメじゃないだろう？ソロ狩りしながらどこか入れてくれそうなPT探せばいいじゃないか。俺はそうするつもりだぞ？一刀流やめる気なんてまったく無いしな」

「え？あんだ一刀流やめる気ないの？正気？」

この話の流れで、何故そこで驚くんだ。この野郎。

なんだかんだと文句を言い合いつつも、不思議と話が弾んだ。
今はお互いの職業レベルを教えあっているところだ。

「侍Lv38!? 私より職業レベル高いじゃない。ずっとPTで狩ってた私ですらやっと巫女Lv31よ。なんでそんなに高いのよ! トップギルドのユーザーとほとんど変わらないじゃない! ?」

「なんでって言われてもな。ひたすらソロ狩りしてただけだしなあ。俺に聞かれても分からん」

「ソロ狩りでそんなに上がるんなら苦労しないわよ。いったいどこで狩ってたの? ソロで狩れる狩場なんてソロユーザーで混み合っていて、敵のとりあいよ? だから臨時PT組んでソロ狩りじゃ難しい亜人の森の奥や、トカゲ草原にいくつていうのに……もしかして穴場があるの? どこで狩ってるのか教えてよ」

「まあ俺以外のユーザーを見かけたことが無い狩場だな。でも穴場っていつのか? あそこは……」

いいからもったいぶらずに早く教えなさいよと、女が急かしてくる。

飲み物ぐらいゆつくり飲ませてくれよ。せつかちな奴だ。……てか答えたくなー……。あのスレ見てた奴なら『……半漁ZIN?』って絶対言っもんない……。

「海だ」

「は?」

おお! こいつ知らねえ! ……なんで俺。こんなことで感動して

るんだ・・・

「だから海だって。海で泳ぎながら狩るんだよ。鮫とか鯨とか」

「……あんだ。泳ぎレベルいくつよ？」

久しぶりに『ヘキサグラム』を呼び出してカードレベルを確認してみる。待ちきれないのか。一緒に覗き込むために女が体を寄せてきた。女の胸が右ひじにあたる。何この天国。

「うつわ！泳ぎLv59！？どんだけ泳いでるのよ。スロット1つ無駄にして、バカじゃないの!？」

「うるせー……いいだろう別に。泳ぐの好きなんだよ」

「泳ぎ以外もすごい揃ってるわね……ステップとジャンプなんて初めて見たわ。うわぁ……ほんとに一刀流だ。しかも居合い（笑）まである。それに無鬨流柔術？何これ？聞いたことすら無いんだけど……」

「あんまジロジロ見んなよ。てか、おまえのも見せろよな」

「ちょっと待ってね」と言っつて、女の体が離れる。

しまった。もっと堪能すべきだった。もったいないことをした・・・。

そう後悔していると、「はい、これ。見ていいわよ」と声がした。

女の体に触らないように注意しながら体を寄せ、その手前に表示された『ヘキサグラム』を覗き込む。職業カードが『巫女Lv31』で、その周囲には『神道流薙刀術Lv22、演舞Lv18、棒術防御Lv19、祈祷Lv27、詠唱術Lv25、魔力補助』とスキルカードが並んでいる。

『魔力補助』カードはサポートカードと呼ばれており、レベルアップが無いかわりに必ず一定の効果を得られるカードだ。かなり高額だが人気のあるカードで、妹も使っていたはずだ。

「……近接だけど、ちゃんと『祈祷』カードも育ててるんだな。これなら回復支援もできるんじゃないのか？」

「んー。『神楽舞』カードが無いから全体支援ができないのよ。それに『術具』がないからブックスperlも使えないしね。だから支援巫女には劣るわ。っあ！ブックスperlというのは、術具に魔法を一つだけ溜めておくことができるスキルのことよ。詠唱なしで溜めておいた魔法を一発だけ即発動できるから、緊急時に役立つの。だから支援職や魔法職には『術具』カードと『詠唱術』カードがほぼ必須になっているわけ。ちなみに詠唱術は魔法スキル使用後の硬直タイムとかを軽減してくれるカードで……」

後衛職のことまで丁寧に説明してくれる。意外と気配りのきく奴だ。

アルカナ掲示板を使って俺なりに色々和他職のことも調べているが、まだまだ知らないことが多い。勉強になる。

その後もお互いのプレイスタイルやカード・スキルの使用感。どの職がどんな特徴をもっているのかなど、色んな情報を交換しあった。

「……なんかあんたの話を聞いてると、一刀流侍ってかなり強いように思えるんだけど？」

「いや、だから強いんだって。まじで」

「うーん……でもねえ。私がいつらとPTしてた頃に一刀流侍と何度か組んだことがあるんだけど、どいつもこいつも酷かったわよ？とにかくすぐに死んでた。回復が追いつかないのよ。盾騎士や二刀流侍みたいに盾や脇差で防御できないせいで、敵の攻撃に耐え切れず。PTが決壊するのよね」

「そいつら『受け流し』を使いこなせてなかっただろう？」

「……使いこなすどころか『受け流し』なんて使ってた記憶すらないわね。ひたすら『居合い』してた奴ばかりだったわよ。だからアルカナ掲示板で『一刀流（笑）』とか『居合い（笑）』ってバカにされるようになって、いつしか一刀流侍がいなくなったの。きつとみんな二刀侍が槍侍にカード変更したんじゃないかしら？」

つまりなんだ。

偉大な先人達が残した黒歴史のせいで俺は臨時PTを断られ続けたわけか……思わずがつくりとうなだれる。

だが驚くことに……そんな俺に対して

「ねね。もしよかつたらなんだけど、ちょっとだけ一緒に狩りしてみない？」

などと女が提案をしてきた。まさかこの流れで誘ってもらえるとは……正直驚いた。

「いいのか？一刀流だぞ？」

「なんかね。あんたの話を聞いてると、あんただけは違う気がしてきたの。それにお互いハブられたもん同士だし、ちょうどいいで

しょ？」

二人だけとはいえ念願のPTだ。

正直かなりうれしいが・・・恥ずかしいので顔には出さない。

時刻はすでに12時前。

せっかくなので俺のほうからも一つ提案してみる。

「よろしく頼む。でもその前に昼飯食ってからにしないか？正直腹が減ったんだわ」

女が「もちろん！」とうれしそうに頷き、何を注文しようかと悩みはじめる。

本当に表情がころころと変わる奴だ。

結構バカにされたり、笑われたりしたはずなのになんだか憎めない。

こういう奴は嫌いじゃない。そんなことを考えながら俺も昼飯を何にしようかと悩むのだった。

9月2日 昼過ぎ トカゲ草原

「おいハゼ！そのトカゲは俺が相手しとくから、そっちはポット飲んでST回復しとけ。さっきの『演舞』でそろそろ空だろ？」

「ありがとう。助かった……でもジン。ハゼって言うな！」

昼飯をすませた俺達は早速PTを組んで、まずは帝都南東に広がる『初心者草原』でお互いの力量を確かめ合った。

そうしたところ……あれ？結構いけんじゃね？って話になり、今はさらに南東にある『トカゲ草原』で狩りをしているところだ。

『トカゲ草原』は、東の大和の町と南の魔法都市グレイプニルとを結ぶ道『グレイプニル東道』の南側に広がるアルカナ大陸南東の大草原だ。

名前からも分かるように、リザード種（リザードマン、ラミア、大トカゲetc.etc.）ばかりがいる草原で、魔法攻撃してくるモブが少ない反面、近接戦闘に特化したモブが、これでもかと大量に沸き続けるPT狩場として有名だ。

草原のいたるところに腰高程度の”茂み”が生い茂っており、気が付くと茂みからわらわらとモブ達が湧き出てくる。モブの沸きに耐え切れず決壊するPTも続出するため、回転率が早くて今一番人氣のある狩場だと言われている。

「っげ。向こうのPTが決壊したぞ。っちょ……こっちに6匹流れてくる。ハゼ！ST回復したか？」

「大丈夫まかせて！……『演舞』で蹴散らしてやるわ……ハゼって呼ぶバカと一緒に……」

何やら物騒な声が聞こえてきたが、さすがにそれどころじゃない。

リザードマン5匹とラミア1匹が流れてくる。

前に出て、敵を押さえ込むことに集中する。

戦っているうちに俺が前で、ハゼが後ろから追撃するパターンが定番となっていた。

俺が『一刀流』&『居合い』&『無鬨流柔術』で敵を押さえ込み、ハゼの『神道流薙刀』&『演舞』で蹴散らすパターンだ。

尻尾の攻撃がやかいならミアを一ノ太刀『居合い』で吹き飛ばす。

ステップを時折挟みながらリザードマン達のシミターによる斬撃を『受け流し』でかわし、ハゼの方へ流れそうな敵へ下段蹴りを入れながら敵愾心^{ヘイト}を稼ぎつつ、敵の体勢を崩していく。

そこへ『演舞』を発動させたハゼが、流れるような動きで追撃を入れる。

『八方振り』と『打ち返し』　切りつけ、切り上げ、打ち下ろし、間合いをあけて、また打ち下ろす。その単純でいて的確な追撃に、1体また1体と確実にリザードマンがその数を減らしていく。そしてハゼの動きを追うように、羽織千早はおりちはやと緋袴ひばかまが、円を描きながらふわりと舞った。ハゼと巫女装束の綺麗な舞に気をとられないよう、こちらにも必死でリザードマンを押さえ込む。

「ごめん……そろそろ時間切れ。ジン、後はお願い」
「分かった。残りはまかせろ」

ハゼの『演舞』は時間制限のあるスキルだ。
発動中は好きなように薙刀を振り回せ、体捌きも速くなる。薙刀の威力も増すらしい。

かなり強力だが、発動終了後のクールタイム中は、ST消費系スキルが使用不可になるので注意が必要だ。

残りは傷ついたリザードマン1匹とラミア1匹。

ハゼが『祈祷』の”癒し”（MP消費系支援スキル）で俺のHPを回復するのを横目に、俺はもう一度ラミアを吹き飛ばす。まずはリザードマンからだ。

斬りつけてきたシミターを受け流し、二ノ太刀『斬り返し』をその脳天に叩き込む。

クリティカルだ。リザードマンの手からシミターとバックラーが零れ落ち、その体がゆっくりと崩れた。後はラミアだ。

ラミアの尻尾攻撃はやっかいだ。

まるでハゼの薙刀のように、思わぬところから伸びてくる。

さきほど決壊したPTも、きっとラミアが原因だろう。このトカゲ草原では一番の難敵だ。

青くて長い髪で片目を隠した綺麗な女性の上半身に、巨大な蛇の体が繋がっており、その下半身をクネクネとくねらせながら近づいてくる。

俺はステップでラミアの懷に飛び込んだ。

驚いたラミアがこちらを叩き飛ばそうと右手を振り上げてくる。

冷静にその動きを見極める。 体は熱く。頭は冷静に。思考は

平行に ラミアの右腕をとり、くると捻ってその体を地面へと叩きつけた。『無闘流柔術』カードをセットしているからこそできる動きだ。そのまま倒れたラミアに絡みつき、首を締め上げて倒しにかかる。

「ジン……いくら女の子にモテないからって、ヘビ女を押し倒すのは、さすがの私も引くわ」

「うるせーハゼ。茶化すんじゃない」

「うっさい！そっちこそハゼって言うな！」

『ハゼ』というのは、俺がつけた渾名だ。

初めてPTを組んでホログラムの『PTウィンドウ』を表示させた時、ようやくそこでお互いの名前を知らないことに気付いた俺達

は、『PTウィンドウ』に表示された名前を呼び合っただが・・・

「Z・I・Nで……ジン？」

「H・a・z・eで……ハゼ？」

「違うわよ！ヘイズ。『霞』を英語で書くと『H a z e』でヘイズって言うの！分かった？」

「ああ、分かった分かった。俺の名前はジンで合ってるぞ。じゃあよろしく頼むな。ハゼ」

「全然分かってないじゃない！？」

といったやりとりがあった。

本人もなかなか気に入ってくれたようだ。

ほら？嫌よ嫌よも好きのうちって言うだろ？決して一刀流をバカにされたんで、その仕返しで呼んできるとかじゃないんだぜ。マジデマジデ。

回想に浸ってる間にラミアのHPもゼロになった。

ラミアのふくよかな胸に手をあててドロップを回収する。

ラミアの体が光となって砕け散った。リザードマンのドロップを回収していたハゼが、俺をジト目で見ているが気にしない。俺は男として紳士的な対応をしたはずだ。間違いないね。

その後も時間を忘れて狩りまくった。

俺もハゼも、デスゲームのことなんか忘れて本気で楽しんでた。お互いがお互いをフォローしあえている。それが何よりもうれしくて夢中になることができた。

どちらかがポットで回復する間は、どちらかが前に出て敵を抑える。

少数なら俺が、多数ならハゼがメイン火力となる。

俺が前衛をこなし、ハゼが中衛と回復役をこなす。

時には笑い、時には怒り、軽口を叩きあいながら・・・阿吽あうんの呼吸で敵を倒していく。

そして何よりも俺達の功名心を煽ったのが、周りのウイズPT（6人PT）が決壊する中で、俺達はたった2人でこの草原を戦いきっていたことだった

そうして。あつという間に夜になる。

時刻はすでに20時を回っていた。

日が暮れた後も、俺達は腰にランタンをぶら下げながら狩りつづけた。合計するとかれこれ7時間は狩りつづけていることになる。

「あちゃー！重量制限に引っかかったやつだ。もうドロップ拾えないみたい。ジンはどう？」

「こっちはまだ大丈夫だ。でもそろそろ戻って清算しないか？」

「むう……」

「ほら？また明日でいいだろ。もう夜だし、そろそろ戻ろうぜ？」

「また組んでくれるの！？」

「なんだ？また組むつもりじゃなかったのか？」

「いやだって……あんたメチャクチャ上手いじゃない？正直な話……極まった一刀流がここまで凄いとは思ってなかったのよ。トカゲ草原でペア狩りなんてトップギルドの連中でもけっこう難しいはずよ」

「ハゼも充分凄いだろ。俺とハゼだから二人で狩れたんじゃないぞの？他の誰かと二人で狩れるか？って聞かれても正直自信ないぞ。ハゼもそうだろ？」

だから今日は帰るぞと、俺より頭一つ半は低い綺麗なワインレッドの頭をポンポンと軽く叩いてやる。ハゼは俺の言葉にどうやら照れているようだ。珍しい。

「……うん。分かった。じゃあ明日もよろしくね」と俯きながら、はにかんだ返事をかえしてくる姿を見て、『ああ、こいつも女なんだなあ……』としみじみと思ったわけだが、口に出したら怒られそうなので、「明日もよろしくな」とだけ返事をかえした。

9月2日 夜 帝都アスガルド

帝都に戻った俺達は、そのまま二人で露天広場に向かった。トカゲ草原で得たドロップを売り捌くためだ。

ハゼ曰く 『前の固定PTでは清算係をしていたからまかせて！』との事だったので、生産職系ユーザーとの交渉が苦手な俺は全てをハゼにまかせた。

「肉はあそこの料理人が高く買い取ってくれるわ」

「使わない武器・防具はNPCじゃなくて錬金術師に売るの。錬金術師が分解して、スチールやブロンズのインゴットに練成し、それを鍛冶職人が買い付けて新しい武器防具になるのよ」

「あ！これレアドロップじゃない！いつの間に拾ったのよ？これ高く売れるわよ」

「これと……これと、これはNPC売りね。誰も買い取ってくれないわ」

そんな話をしながら二人で人ゴミ溢れる広場を歩く。

そして錬金術師や料理人などとハゼが交渉しているのを横で眺めながら・・・女ってすげえ。なんて思ってしまった。

9月2日 夜 ルイージの酒場

だいたい20分程ですべてのドロップを清算した俺達は、ルイージの酒場のカウンターで晩飯をとりながら今日の感想や今後の予定などを話し合い、今はドロップを売り捌いて得たゴールドを山分け

している最中だ。

「……ええと合計で……30360Gだから、一人当たり15180Gね」

「え？そんなにあるのか？」

「そ！すごいよね！一日で1万G以上稼げたのなんて初めて！」

ハゼがうれしそうな顔で笑いながら俺にトレードウィンドウを出してきた。

うお・・・まじで15180Gある。全力で一日中鮫狩りしてもこんなに稼げないだろうな・・・。すげー、PT狩りすげー。

「金が底をついてたから助かった。ありがとうな」

「ううん。こっちこそありがとう。職業レベルも2あがったし経験値も金銭も最高記録よ！」

心底うれしそうな様子のハゼを見ると、こっちの気分まで良くなってくる。

本当に自分の気持ちに素直な奴だ。なんだか微笑ましい気持ちになった。

正直なところ。まだまだ話していた気分だが・・・もう21時30分だ。22時には吹雪姉の露天も閉まってしまふ。そろそろお開きの時間だ。

「じゃあ、武器修理してもらってる露天が閉まるから、そろそろ行くわ」

「え？もう？」

「ああ。22時までなんだ」

「そっか……なら私も宿に帰ろ……。明日はここに7時よ？」

「おう。分かってる。じゃあまたな」

「うん！おやすみ」

二人揃って席を立ち、ルイージの酒場をでたところで別れる。
ハゼは西の宿屋街へ、俺は東の露天広場へと向かった。

予言の日以降会っていなかったので、吹雪姉と会うのは3日ぶりだ。

いつもの場所へ行くと、侍などの和装姿のユーザーが多数いた。
吹雪姉と何やら交渉している。商売の邪魔にならないよう近くで黙って待つ。吹雪姉も俺に気付いたが、やはり手が離せない。かなり繁盛しているようだ。

しばらくして客足も途切れたので声をかける。

「繁盛してるみたいだね」

「ああ、君のおかげだよ。長蛇の修理でいいのかい？」

「お願い。ここ数日は鮫狩りしていないからゴールドで払うよ」

「おや？珍しいね」

吹雪姉が長蛇を修理している間、俺は今日のできごとを語った。
臨時PTが見つからなかった事。初めてPTを組んだ事。そしてハゼの事。

「巫女で薙刀演舞を使うユーザーは珍しいね」

「やっぱそうなんだ？」

「巫女は司祭と同じで支援タイプになるユーザーが多いからね。薙刀巫女や、鎚司祭などは、私もあまり見かけたことがないね。…

…さて、終わったよ」

「遅い時間なのにわざわざありがとう。吹雪姉」

「気にしないほしい。好きでやっていることさ」

「了解。それで修理代っていくらだっけ？」

「今の相場だと手数料＋材料（１／１０）で、１０００Ｇ＋３０
００Ｇ＝４０００Ｇだね」

トレードウィンドウを出して修理代を支払う。

「それじゃあ何かあれば、いつでもいいから来るんだよ」と声をかけてもらい。感謝と別れの挨拶を告げて宿へと戻った。

時間が経つのが早すぎる。眠気が限界に近い。

そのままベッドに倒れこむ。アラームをセットするために時刻を確認するとすでに２３時を過ぎていた。今日は長い一日だった・・・
疲れた・・・ＺＺＺ

Z I N：侍Lv39

一刀流Lv30 居合いLv28 無鬨流柔術Lv18 ステ

ツプLv39 ジャンプLv6 泳ぎLv59

H a z e：巫女Lv33

神道流薙刀術Lv28 演舞Lv25 棒術防御Lv23 祈

禱Lv29 詠唱術Lv27 魔力補助

9月3日 6:30 ルイージの酒場

翌朝。寝坊することなく待ち合わせ時間前にルイージの酒場へやってくる、

すでにカウンター席にはワインレッドの髪に巫女装束のハゼがいた。

入ってきた俺を見つけたハゼがぶんと手を振っている。朝から元気な奴だ。俺もハゼの隣に腰を下ろして朝飯を注文する。

「ちゃんと待ち合わせ時間前にくるなんて偉いじゃない」

「ついでに朝飯すませようと早く出てきたただけだ」

「ちよつと。私より朝飯なわけ？」

「……寝ぼけてんじゃねえぞ。目の前ですでに朝飯食ってる女が何言ってやがる」

「いい男なら、こういう時は嘘でも女をたてとくもんよ」

「ハゼニアイタクテ、ハヤクキテヤツタゾー」

「気持ちがこもってない！それにハゼって言うな！」

二人して騒ぎながら朝食をすませる。今日も賑やかな一日になりそう。

そして昨日と同じくトカゲ草原で狩ることにした俺達は、STポ

ツトなどの回復系アイテムを露天広場で購入してから出発した。今日も日が暮れるまで狩る予定だ。・・・そうそう、ついでに要石登録を南門に変更した。思わず西門に名残り惜しさを感じてしまった。そついや最近泳いでないな・・・。

このアルカナの世界では”日の出：5時30分”、”日の入り：19時30分”に設定されている。

そのため”19時”までは狩りをして”19時”以降は露天広場を回るとい生活リズムが一般的だ。

そして現実の世界と同様。

”7時～9時”は朝の通勤ラッシュみたいなものだ。

今歩いている初心者草原には、俺達と同じようにトカゲ草原を目指すPTがたくさんいる。

ログアウト不能になってからすでに一ヶ月以上。

もはや帝都南東の初心者の草原で狩りをするユーザーはあまりいない。周りにいるのは南東にあるトカゲ草原を目指すユーザーがほとんどだ。

たまに見かけても野良畑のらはたけに湧く農作物を収穫する農家ユーザーだったりする。

ハゼ曰く。農家は農家で熾烈な農作物の取り合い競争があるらしい。

鎌かまや鋤くわを片手に農作物の収穫ハート争いをし、それらを料理人に売った

ゴールドで、いつか都市周辺にある畑用の土地を買い上げるのが夢なんだとか・・・なんか知らんが農家すげえ。

しばらく歩いてトカゲ草原についた俺達は、

『この辺りが一番湧くはずよ!』というハゼおすすめポイントでモブ狩りを開始した。

結果だけ言えば・・・ハゼおすすめポイントは尋常じゃなかった。回復する余裕がなかなか無く、何度も死にかけるがギリギリのところで粘る状況が続く

が。ちょうど正午になった頃に、周りのウィズPT（6人PT）が3つ決壊した。

数えきれないほどのモブの波に耐え切れず、結局押し潰されて全滅してしまった。

「いたたたたっ……さすがにあの量は無理ね……」

「痛ってえ!? 五感がリアルになったのは分かってたが、なんだこれ……まじ痛てえ……」

全身に強烈なスタンガンを当てられたような衝撃だった。まじシヤレなんねえ……

そうして帝都南門に死に戻った俺達は、激痛に悶え苦しむ重い体を引きずりながらルイージの酒場へ。とりあえず昼食をとりながら休憩しよう・・・ということになった。

9月3日 正午過ぎ ルイージの酒場

「ねね。ずっと気になってることがあるんだけど？聞いてもいい？」
「んー？」

昼食もすませてカウンター席でだらだらしていると、グラスの氷をマドラーでつつきながらハゼが何やら聞いてきた。続きを促す。

「そのさ……ジンの防具^{それ}って一番最初の初期装備よね？」
「……そうだな」
「なんか思い入れでもあるの？」
「まったく無いな」
「だったらなんで変えないのよ？ぶっちゃけ攻撃痛いでしょ？」
「自慢じゃないが金がない」
「昨日15000G以上は入ったじゃない。まだ残ってるでしょ？」
「残っちゃいるが、この長鉈^{メタル}の修理代ですでに4000G消えた」
「ああ……そっか。それ金属系カスタマイズ品だから維持費が高いのか……」

俺が使っている長鉈は、吹雪姉が日本刀をカスタマイズ化した一品モノだ。

こういった一品モノは総じて”カスタマイズ品”と呼ばれている。逆にハゼが使っている薙刀などは、職人がレシピ通りに作製しただけの”量産品”だ。

そして金属系メタルのカスタマイズ品と量産品とは使われ方が大きく異なる。

金属系カスタマイズ品は、

普段の俺の行動からも分かるように、耐久度が減ったら生産職に修理してもらい、ワンランク上の武器にしたい場合はアップグレードしてもらうのが基本だ。たとえ同じ生産者の同じようなカスタマイズ品であっても完全に同じカスタマイズ品ができることはまず無いと言われているためだ。

対して金属系量産品メタルは、

耐久度が残り少なくなったら売却して新しい量産品を買う。つまり使い捨てが基本だという。

なんでもダイヤ製程度までなら錬金術士が良い値段で買取してくれるので、使い捨てにした方が金銭的にお得らしい。

ちなみに織物系ロープや革系レザーは、カスタマイズ品・量産品どちらである

うとも修理・アップグレードの方がコスト的にはお得らしい。

「でも、ずっと初期装備のままだと他のユーザーに舐められるわよ？もしも私がPKユーザーなら真っ先にジンを狙うわね」

言われてみれば確かにそうだ。

というか今になって気付いたが・・・臨時PTを冷たく断られ続けたのもこの服装が原因なんじゃね？・・・というか絶対そうだな。初期装備の一刀流侍をPTに入れる奴の方がどうかしてる。

「ハゼ……こんな防具の一刀流侍と一緒に狩りしようだななんて……おまえってやっぱ変な奴だよな」

「あんたが言うな！っていうかハゼって言うな！」

その後も色々と話し合った結果。

今度一緒にローブ系防具を買いに行くこととなった。

なんでも大和の町にハゼの巫女装束を作製した腕のいい裁縫士がいるらしい。

結局その日は、そのままルイージの酒場でだらと他愛の無い話をし、夕食も一緒にすませてから俺もハゼも早々と宿に戻った。

再びトカゲ草原に行かなかったのは、体の痛みと気だるい感覚が抜けなかったからだ。

アルカナ掲示板にあったとおり、31日の予言の日以降。人としての感覚が現実と等しくなった。

空腹度システムは過去の遺物となり。

ステータスに表示される空腹度など、もはや誰も気にしていない。現実と同じような食生活が必要となったからだ。以前のようにステータスアップ効果のある料理をいくつも食べながら狩りするのは不可能だ。

まあ味覚や空腹がよりリアルになったおかげで、料理を選ぶ喜びが増えたのは不幸中の幸いとも言えるが……。

……また予言の日以降。

戦闘職から生産職へカード変更するユーザーが増え続けているという。

それは リアルになった五感による激痛が原因となり、現実の体がショック死を起こすのでは？と不安にかられた戦闘職ユーザーであったり。

それは 街から一定距離内であればPK不可のため、生産職ユーザーとしてこの仮想世界を生き抜いていこうと思いついた戦闘職

ユーザーであつたりする。

もちろん俺達のように戦闘職を続ける者もいる。

攻略。娯楽。ヒロイズム。理由は人それぞれだが、カード編成をウィズPT向けの手堅いものへと変更するユーザーが多いらしい。

T a n k ・ A t t a c k e r ・ H e a l e r。これら3つに役割分担するのが今の流行だ。

俺やハゼみたいなのは、そのうち珍種扱いされるのかもしれない。
・・・まあ一刀流はすでに絶滅危惧種のようなが・・・。

そして戦闘職も生産職も関係無しに、

意外にも多くのユーザー達が、この仮想世界のシステムに則って理性的に生きていこうとしていた。

アルカナ掲示板では”PKギルドやPKユーザーとは絶対取引しない！攻略ギルドには積極的に支援しよう！”とする生産職ユーザー達の大規模運動が活発化しており、そんな生産職ユーザー達を守ろうとする自警団ギルドまで発足しそうだという。

混乱よりも先に、秩序が生まれようとしている。アルカナ掲示板のおかげだろうか？

これから先・・・いったい何が起きて・・・いったい何起きないのだろう・・・

そんな考えが頭の中に浮かんでは消える。

痛みと気だるさでなかなか寝付けない。

明日もハゼと7時に待ち合わせだ。早く寝なければ・・・ZZZ。

9月4日 16:12 大和の町

「今度のはなかなかいい感じじゃない」

「けっここの肩幅があるから、上はタイトにしてみたんだけど正解だったみたいね」

「……もうこれでいいから、とつとと終わらせようぜ」

俺が疲れた声でそう言うと、

女2人が”何言ってるんだコイツ空気読めよ”的な視線を向けてきた。

2人分のキツイ視線から身の危険を感じとり、思わず体を引いてしまう。女2人はそんな俺をスルーして会話を再開した。ちくしゅう……勝てる気がしねえ。

「でも月見さんつきみ。このTシャツって和服なの？襟元に3つボタン付けたタイトなTシャツにしか見えないんだけど？こいつ侍だから和装じゃなきゃ防具ボーマスつかないし、できれば和服が……」

「心配しなくてもいいわよ。これは鯉口こいくちシャツを今風にカスタマイズしたもんだから和装扱いよ」

「鯉口こいくちって……任侠映画でヤクザ的な人がステテコと合わせて着てる。あれ？」

「っそ。あれ。元々刺青いれずみを模したシャツだから派手な柄モノが多いんだけど、着やすいようにシンプルな単色にして形もちよっと

いじつたのよ。どう？なかなかいいでしょ」

俺が今着せられているシャツは、3つボタン付の白いＴシャツで、背中に刺青のような”のぼり鯉”が描かれている。

確か 刺青は加護やご利益を得るために、神仏や縁起物を彫るようになったと聞いたことがある。

刺青を模した鯉口シャツをカスタマイズしたＴシャツに、”のぼり鯉”が描かれているのはその名残りなのだろう・・・。

「なんか古臭いチンピラが着てるイメージだったけど、こうして見るとなかなか」

「でしょう？ガラの悪い中年男性が着るイメージだけど、これならいけるはずよ」

「でも鯉口って襦袢じゆばんみたいなもんでしょ？私も巫女の白衣の下に半襦袢着てるけど、襦袢一枚だと下着が透けるしさすがに……」

「なあに言ってるの。男なんてこれぐらいが丁度いいのよ。そりゃ霞かすみちゃんみたいな子が半襦袢一枚なんて……そうね。裸にカットーシャツ一枚みたいなもんだから、男共が黙ってないだろうけどっね！」

「きやあ！？ちょっと月見さん！やめて……くだ……っや……あ……ん……さい！もう！」

「ほんとエロイ体してるわよねえ。細身のくせに良い胸と尻してるし。ウエストのくびれも完璧だし。もっと体のライン出せばいいのに。んふふふ」

・・・そして。

いやらしく笑っているこのセクハラ女性^{ハゼ}は、ハゼの巫女装束をオーダーメイドした裁縫士で、その名を『月見^{つきみ}』さんという。

というかマジ疲れた。

最初はセクハラされてるハゼを眺めて喜んでいたが、さすがにそろそろどうでもいい。早く終わってくれ・・・。

昨日トカゲ草原で全滅した俺達は、今日になっても体の痛みや気だるさが消えていなかった。

そのため予定を急遽変更して大和の町に来ている。この月見さんに俺の防具をオーダーメイドしてもらうためだ。

彼女の作る織物系防具はデザインも性能も抜群に良いと評判らしい。

なんでも常にオーダーメイドの予約でいっぱいだという。彼女専用の作業部屋を所有している事を考えれば、あながち大げさな表現では無いのだろう。

専用の作業部屋は 生産職用の共同施設内にある作業部屋を自分専用としてNPCから借り上げることをいう。それなりの財力も必要となるらしい。

間取りは約10畳。

借り上げた時にセットされていた職業カードによって、自動的に作業部屋内の環境が整備されるシステムだ。裁縫士の作業部屋となつたこの部屋には、中央には大きな裁縫作業台があり、部屋のあちこちにロールされた布地が、壁際にはマネキン・試着室・姿見などがある。

布地は月見さんが持ち込んだ素材だろう。

素材倉庫としても活用できるため、生産職の間では『店舗を手に入れる前にまずは自分専用の作業部屋を手に入れる』というのがセオリーらしい。

ちなみに最近やたらと繁盛しだした吹雪姉も、このペースで稼げれば9月中に自分専用の作業部屋を借りれそうだと言っていた。

そんな生産職としては成功している証とも言える彼女専用の作業部屋に、

アポ無しで突然訪れたのが13時頃だったろうか？……そして今はすでに16時を回っている。

かれこれ3時間ぶつ通しで女2人の着せ替え人形をしている。
正直疲れた・・・マジ勘弁してくれ。

防具選び開始早々に 「防具なんて性能さえ良ければデザインなんて適当でいいだろう」と言い放った俺に対して、ハゼがローキ

ツクで俺のバランスを崩し、月見さんがアイアンクローを決めるというコンビネーションをみせて以来、なるべく逆らわないようにしてる。

・・・この女2人組には勝てる気がしねえ。

ちなみにアポ無しにもかかわらず月見さんは大歓迎してくれた。主にハゼに対するセクハラ的なボディランゲージで。

なんでもハゼと月見さんはリアルでもちよつとした知り合いらしい。

何度も言うが。最初は『じろじろ見るな！このスケベ！っていうか助けなさいよ！』とハゼに罵られながら、なにこのセクハラ天国とか思ってたんだよ。最初だけな・・・女の服選び・・・マジ面倒くせえ。ありえねー・・・

あー・・・そうそう。

月見さんの外装はまったくいじってないらしい。ダークブラウンの髪に黒目だ。

年齢は30代半ば。元モデルということもあって背が高くかなりの美人だ。

細目と泣きホクロが艶っぽい。少しウェーブのかかった長い髪を肩口でひとまとめにして胸に垂らしており、青い浴衣の上に割烹着を着ているが、スラリとしたスタイルがまったく隠れていない。これで一児の母だというのだから驚きだ。ちなみに現在はデザイナーをしているらしい。

なんでも中学2年生の娘に頼まれて一緒にオープンに参加した

らログアウトできなくなったという。折角だからとゲーム内でもデザイナーの真似事をしていたら、裁縫士として売れっ子になってしまったとか。

それから・・・おばさんと呼ぶと鉄拳が飛んでくるので要注意な・・・。

なんで素手カード無しであんなに腰の入った左フック打てるんだよ。女のグーパンってレベルじゃねえぞ。あれ・・・。

「ねえねえ。現実世界に戻ったら私んとこのモデルになるのもう一度考えてよ!」

「絶対に嫌!月見さんのとこつて下着専門じゃない!」

「ケチねえ。減るもんじゃないしちよつとぐらいいいじゃない。

あなたもそう思つてしょ?」

「お姉さん。その時はぜひ僕も呼んで下さい。後学のためにも見学しておきたいです」

「ふふふ。お姉さん正直な男の子つて嫌いじゃないわよ」

「うっさい!ジンは黙つてて!ほんと馬鹿でスケベなんだから...

...」

体を隠すように両腕で肩を抱きながらハゼがブツブツと文句を言っている。

そんなハゼを眺めながら月見さんが「でも女子学育ちの霞ちゃんかすみが、突然男の子を連れてくるからビクリしちゃった」などと言っ

た。

「はぁ……。月見さんが何考えてるのかだいたい想像つくけど、違うから」

「あら、そうなの？」

月見さんが頬に手をあてながらこつちを見てきた。
流し目だ。色っばい、すんげー色っばい。

何気無い仕草一つ一つが洗練されていて大人の色気が漂っている。
やっぱ大人の女っていいよなー……思わず見惚れてしまう

と。俺をハゼが睨みつけてきた。

慌ててつい先日知り合ったばかりなことや、お互いPTからハブ
れた者同士でたまたまPTを組んだことなどを簡単に説明して場を
ごまかす。こえー、ハゼこえー……

「そうなんだ。おもしろくない。……まあいいわ。じゃあ私も
今日中に終わらせたい予約が2件残ってるし、彼氏くんの服をそろ
そろ選んじやおっか。この鯉口シヤツとその武者袴でいい？」

「だから違うって……面倒くさいなあ……そういうの。ほんと嫌
になる」

「ああ。ごめんごめん。ちょっとした冗談よ。気にしないの。で、
服のほうはどう？」

「……もういい。ほらジン。とつと決めなさい」

「いや、だから俺はこれでいいときから……」

「何よ？なんか文句あんの？」

文句ナンテ、アルワケナイジャナイデスカ

山猫化したハゼは危険だ。逆らってもろくなことになる。

こういう時は土下座外交に限る。こんなところで『激怒した妹対処方法』が役に立つとは思わなかった。人生何事も経験しておくもんだな……。

「それじゃあ。この鯉口シャツとその武者袴ね？」

「それで」

「防具ボーナスは何付与がいいのかしら？属性防御系を付与する場合は、魔力系の色が属性色になるから色指定できなくなるけど？」

「そういえばハゼ……さっきから何度か話にでてた防具ボーナスってなんだ？」

「……ジン。あんた防具ボーナスも知らないとか。もしかして公式HPすら見たことないとか……チュートリアルすらやってないとか……さすがに無いわよね？」

俺は黙ってハゼから目を逸らした……。

「ほんつと信じらんない！一刀流（笑）だし、居合い（笑）だし、初期装備（笑）だし、馬鹿でアホでスケベだとは思ってたけど、まさか防具ボinasすら知らないなんて思わなかったわよ」

「馬鹿アホスケベは関係ないだろう！？ってか、いいだろう別にだいたいゲームなんて説明書とか読まずにやるのが当たり前なんだよ。習うより慣れるだろ。普通は」

「……はあ。これだから感性だけで生きてる馬鹿は……。いいわ。私が説明してあげる。ごめん月見さん、ちよつとこのチンパンに防具ボinas教えるから少し待っててもらえない？」

「予約分の仕立てやってるから私のことは気にしないでいいわよ」

「じゃあジン。説明するからちゃんと覚えるのよ。いい？1回しか説明しないからね」

「そんなわけで」俺ことチンパンに防具ボinasを教えよう」の間が始まった。

「……ちくしょう。チンパン呼ばわりされても言い返せない自分が憎い。」

「じゃあまず質問するわよ？ジン。私がなんで巫女装束をわざわざ着てると思う？」

「え？そういうのが趣味なんだろう？巫女服に興奮する男もいるしいいんじゃない？俺は競泳水着のほうがいいけ ップホ」

「誰もあんたの性癖なんて聞いてないわよ！っていうか何！？あ

んたは私のことを巫女のコスプレしてチャホヤされて喜ぶ女だと思
つてたわけ！」

「痛つてえな！何も突然グーパンで殴ることないだろう！だいた
いそこまで思つてねえよ！巫女服着るのが好きなんだろうなって思
つてただけだ！」

「ほんとバツカじゃないの！巫女服や魔女服着てるユーザーがこ
んだけいるんだから、趣向の問題じゃなくて別の何かがあるって思
わないの？っていうか思え！」

そついや藍も魔女服着てたな・・・あいつにコスプレ趣味なんて
無かつたはずだし・・・。

「言われてみればそうだな。なんでなんだ？」

「……はあ。あんたつてほんとにチンパンだったのね……」

「やーい。同情されとるー」

おばさん、うるせえ！と、心の中で叫んだはずなのに何故か左フ
ックをもらった。

ちくしょう。なんか色々と理不尽だ。納得いかねえ……。

「いい？まず裁縫士や鍛冶職人が作る防具には意図的に様々な防
具ボーナスを付与できるの。でもその防具ボーナスの恩恵を受ける
には、その防具に適した職業じゃなきゃダメ。

例えば忍者・侍・巫女は和装。騎士・司祭・魔女なんかは西洋の
服装よ。

それから女性ユーザーを優遇するための追加防具ボーナスつてのもあるわ。端的に言えばコスプレよ。巫女なら巫女装束、魔女なら魔女服、忍者ならクノイチ衣装なんかを装備すれば、さらに追加の防具ボーナスを付けられるの。理由はスミイチ社が女性ユーザーにコスプレさせて集客力を上げるためだろうって言われてるけど、まああんたには関係ない話ね。どう？何か質問は？」

「なあ。エロイコスプレもあるのか？」

「……あんたはそれを聞いてどうするつもりよ……」

そんな心の底から哀れんだ声と目で言わないでくれ。俺が悪かった……。

「とにかく分かった？だから巫女装束を着てるの。防具は『頭・腕・胴・腰・足・外着・内着』とあるけど、私の場合は『手甲（腕）・白衣（胴）・緋袴（腰）・草鞋（足）・羽織千早（外着）・半襦袢&足袋（内着）』で6ヶ所よ。合計で12個の防御ボーナスを付与してもらってるわ。」

月見さんは元々の腕が良いせいか、防具ボーナスを付与すると凄くなるの。予約も当分先まで埋まってるし、アポ無しでオーダーメイドなんて本当に特別なんだから感謝しときなさいよ」

思わず月見さんのほうを見ると、「いえーい。すごいでしょー」とピースされた。

「ただのセクハラ好きじゃなかったんだな……」
「セクハラは仕事の活力よ」

やべえ。かけー。断言しやがった。

「と・に・か・く！あんたの場合だと『草履（足）・足袋（内着）
・手甲（腕）・武者袴（腰）・鯉口シャツ（胴）』で5個の防具ボ
ーナスを付与してもらえるわ」

「外着余ってるけど、男用の羽織はないのか？それに頭は？」

「……羽織はあるけど、さすがに私のお金を足しても足りないだ
ろうから今日は諦めなさい。それと頭装備は実質的にはアクセサリ
みたいなものよ。だから錬金術士ね。ピアスとかイヤリングとか色々
あるみたい。これもスミイチ社が、なるべくユーザーの顔を晒させ
て集客力を上げようとした名残りで ……」

「……説明にも飽きてきたな。改めてハゼの巫女装束を眺めてみ
る。」

羽織ってどんな感じなんだ？ ふとそんな事を思ったので、そ
の羽織千早を捲り上げてみたのだが、「きゃあ！？」とかわい
い悲鳴を上げながらハゼが座り込んでしまった。

「いきなり何すんのよ！このスケベ！」

「いやスケベっておまえ……羽織ってるもん捲っただけだろ。緋
袴捲ったんならともかく羽織千早捲ったぐらいで」

「うっさい！女が着てるものを断りもなしにめくるんじゃないの
！次やったらぶん殴るわよ！分かった！？」

「っち」

「月見さんも舌打ちしない！」

妹なら溜息1つで済ましそうだが……。

まあ確かに女の服を勝手に捲るのは良くなかったな。素直に謝っ

ておこう。

「わるい。本当に他意は無かったんだ。二度としないから許してくれ」と謝罪しながら手を差し出すと、ハゼは顔を赤くしながらも俺の手をとって立ち上がってくれた。そこまで怒ってなさそうだ。

「それじゃあ2人の話もまとまったみたいだし、そろそろ決めてもらってもいいかしら？」

「そうじゃあ」

VR空間には”外装ステータス”というものがある。現実世界において個々の身体能力に差があるように、仮想世界においても個々の外装能力に差がでる。

具体的な例を挙げると、月見さんのように現実世界でデザイナーをしていたユーザーが、

この仮想世界でも裁縫士として優れた成果を上げれるのは、この外装ステータスのおかげだ。

他にも走る・跳ぶ・食う・寝るなどといった様々な基本行動に、現実世界と同じような差が生まれる。

これはVR機の起源が軍事シミュレーターというのが原因らしい。脳に蓄積された現実世界の固体情報を元に、仮想世界の”外装ステータス”が生み出されるという。俺も詳しいことは知らないが・・。

そして、これがVRゲームの場合。

この外装ステータスの一部を数値化するのが一般的だ。

これを”外装ステータス固定値”という。

AOでは『STR（筋力）/VIT（体力）/DEX（器用）/INT（知力）/MND（精神力）』などがあり、防具ボーナスもここに加算される。

この外装ステータス固定値はレベルアップなどは無く、あくまでも個人個人がもつ固定値だ。

また極端な差がつかないように、きちんとバランス調整もされている。

それでも月見さんのようなイレギュラーな存在が生まれてしまう。数値化できるのは、あくまでも外装ステータスの”一部”だからだ。

外装ステータスはブラックボックスであり、未だに米国の軍事機密とされている。

そのため数値化できなかった外装ステータスにより、稀にイレギュラーが生まれてしまう。

そしてハゼ曰く

「『STR（筋力）/VIT（体力）/DEX（器用）/INT（知力）/MND（精神力）』と『各カードレベル/職業基本値/

職業補正值／装備基本値／装備補正值／カード基本値／カード補正值』などで作られた複雑な計算式を経て、最終的な『物理攻撃力、魔法攻撃力、生産力、創造力、HP、俊敏性、命中率、クリティカル率、その他色々』が決定されるのがAOの基本システムらしいわ。私もよく知らないけどね」

との事だ。途中から何を言っているのかさっぱり分からなかったが、まあどうでもいいわな。

大事なのは、俺が付与してもらった防具ボーナスは『DEXUP』だったことだ。

ハゼ情報によると、侍はDEXに依存する部分が大きいらしい。侍はDEXで命中率、クリティカル率、物理攻撃力、俊敏性などが うんちゃらかんちゃらで 底上げになるという。そんな感じらしい。正直まったく理解できなかった。細けえこたあいんだよ。

でも1つだけ自分なりの理由がある。
それは『受け流し』などの刀技系スキルはDEX依存かもしれないという噂を、以前アルカナ掲示板で見かけたからだ。

・・・亜人の森でオークキングと打ち合った時、『受け流し』のタイミングは完璧だったと思う。

だが実際はダメージを食らってしまった。
レベル不足だったのか。DEX不足だったのか。それともPS不
足だったのか。それとも他の何かだったのか。今となっては分から

プレイヤースキル

ない　が、もしもまた打ち合つてのならば、その時までにはできる事をしておきたい。そう思ったので『DEXUP』にしておいた。

「さてと。じゃあ付与も決まったことだし……ジン。お金だしなさい」

「そういや値段聞いてなかったな。いくらなんだ？」

「月見さんいくら？」

「親友割引で5万ゴールドでいいわよ。そして今ならモデル割引でさらにお得！」

「ジン。5万ゴールドだって」

「はやっ！？決断はやっ！ちょっとは悩んでくれないと……お姉さんさすがにショックなんだけど……」

「……え？5万……あれ？全然足りなくなっ？ってか桁おかしくね？」

「そうだ。もう全裸でよくね？」

どうせ新しい防具も定期的に修理しないと壊れるわけだし、これ名案じゃね？」

「そういうことだから早くお金だしなさい」

「……ハゼ……お前……俺の所持金知ってるだろ」

「大丈夫よ。足りない分は私が貸してあげるから、あんたは黙って有り金全部出せばいいの」

「……まじで言ってる？」

「まじで言ってる」

「いやいやいや、全部無くなったら宿にも泊まれなくなるじゃないですかー。やだなあ、もう」

「ふふふ……私ね……今日1日で色々気付いたのよ。あんたはいい加減で馬鹿でスケベだって。感覚だけで生きてるあんたにお金を持たせると、何も考えずに思うがままにすぐ使っちゃうって。……本当は私が立替えて後日返してもらうつもりだったのよ？でもね。直感で生きるあんたから貸したお金が返ってくる頃には、きつこのゲーム終わってると思うの。……だからね。誰かが金銭管理しないと、いつか絶対にやっていけなくなると思ったわけ？どう？」

「……やべえ。否定できる要素が何1つもねえ。心当たりが多すぎる。」

『居合い』カードだとか『ジャンプ』カードだとか、長銃とアップグレもほぼ即決だった気がする。

そういや。ハゼは何も言わないが、陸狩りでも金欠のせいで泳ぎカードのままなんだよな……

「だからね。とりあえず私に有り金全部出して借金しときなさい。悪いようにしないわ。それでPT収入やりくりして当面の資金確保は私がやる。そこからお小遣いもちゃんと出したげる。でないとおんた、いつまで経っても防具買う資金貯めれないだろうし、防具修理するのが面倒だとか言って全裸になりそうだし……まあ、さすがにそこまで馬鹿じゃないか」

「うわあ。言えねー……今まさに全裸で戦おうと思ってましたとか、言えねー……」

「ほら？分かったでしょ？だからね……
全部出せ」
いいから、とつと

やだなにそれ怖い。ハゼさんまじ怖い。

Z I N：侍Lv39

一刀流Lv31 居合いLv29 無鬪流柔術Lv19 ステ

ツプLv39 ジャンプLv6 泳ぎLv59

【装備】

武器：長鉈（スティール・桜吹雪）

頭：なし

腕：手甲（黒）

胴：鯉口シャツ（白）

腰：武者袴（紺）

足：草鞋

外着：なし

内着：足袋、ボクサーパンツ下着

アクセ：なし

（ALL防具：鉄の魔力系・月見）

（防具ボーナス：DEXUP*5）

H a z e：巫女Lv33

神道流薙刀術Lv29 演舞Lv27 棒術防御Lv24 祈

祷Lv30 詠唱術Lv28 魔力補助

【装備】

武器：薙刀（ステイル・汎用）

頭：なし

腕：手甲（黒）

胴：白衣

腰：緋袴

足：草鞋

外着：羽織千早

内着：半襦袢、足袋、スポーツタイフ下着

アクセ：なし

（ALL防具：鋼の魔力系・月見）

（防具ボーナス：STRUP*6、DEXUP*6）

「それじゃあ月見さん、突然の訪問だったのにわざわざありがとうございます。うございました。またこの馬鹿の羽織をお願いしにいくと思うんで、その時はよろしく願います」

「いいのよ。気にしないで。私と霞ちゃんの仲じゃない」

「……ああ……俺の全財産が……」

「ほらジン！あんたもちゃんとお礼言いなさい」

「ありがとう……そしてさようなら俺の全財産」

「ふふふ。お礼なんていいのよ。今日はすごく楽しかったから、それで充分よ。あ！忘れるところだった。今度来るときは連絡してね。予約オーダーの予定なんて別にどうでもいいんだけど、次

は娘も呼んであげたいから」

「つげ。灯^{あかり}ちゃん……」

「まあまあ、そう言わないで。じゃあまたね2人共」

そうして月見さんの作業部屋を後にした俺達は、大和の町の南西エリアに向かった。

月見さんが俺の防具を仕上げてくれるのを待っていたので、時刻はすでに20時過ぎだ。

今日は大和の町で一泊し、明日はそのままトカゲ草原に直行しようという話になっている。

問題は……

「……なあ、俺は今晚どこで寝ればいいんだ……」
「ん？宿代ぐらい出すわよ。ってか経費扱いにするつもりだし」
「もしかして当分このまま？」
「少なくとも借金返済と羽織資金貯まるまではね。大丈夫よ。ちやんとお小遣い渡しし、武器防具の修理代、宿代、P o t代、飲食代なんかは全部経費にしとくから、むしろ無駄遣いできなくてあんたにはプラスになるはずよ」

なんか昔のトラウマ思い出しちゃった。
言えねー……小学生の頃、ゲームソフト買ったために妹が俺の小遣いを管理してくれてたとか、絶対に言えねー……

昨日大和の町で一泊した俺達は、朝食をすませてトカゲ草原に向かった。

狩りポイントは”ハゼおすすめ激湧きポイント”にする予定だ。
要は、リベンジ&新装備のテストだ。

体を蝕んでいた痛みも今朝になってようやく消え去った。体が軽い。

俺もハゼもやる気だ。ハゼが気前よく大量のポットを買い込んでいる。

赤字狩りにならぬように頑張らんな……借金もあるしな……。

9月5日 朝 トカゲ草原

すでに湧きポイントを確認している他のウイズPTと同様に、俺達2人も適当な湧きポイントに腰を落ち着ける。

すると隣で狩りをしていたウイズPTの1つが、
『なんでこいつら2人なんだよ。お前らが決壊して迷惑するのはこっちなんだよ』とでも言いたげな顔を向けてきた。

・・・スルーだ。面倒くせえ。
ここら一帯の湧きは尋常じゃないしな。ぶっちゃけ隣PTのことなど構ってる余裕なんぞない。

早速。リザードマン8・ラミア2・大トカゲ1が湧き出てくる。

そうそう少しだけ時間を戻すが。

この激湧きポイントに着くまでに、トカゲ共とは何度か遭遇してるわけだが、

はつきり言ってかなりの手ごたえを感じている。外装ステータス

固定値の1つであるDEXが底上げされただけだというのに、体と技のキレがかなり違った。正直驚いた。

また防御面でも、被ダメが約1割ぐらい減った気がする。

これで支援役もこなすハゼの負担も少しは減るだろう。

・・・というか初期装備に文句も言わずに、PT組んでくれてたハゼにはマジ頭が上がらねえ・・・

それと侍カードがLv40に上がった。

そのおかげで新しいST消費系スキルを使えるように

『かつげき
活櫓』

声を発して、一定範囲内にいるモブの敵愾心ヘイトを集めるスキルだ。

職業カードとのレベル差に応じて一定確率で気絶効果スタンも付与する。

アルカナ掲示板情報によれば、似たような騎士の『口笛』にはスタン効果が無いので、かなりの良スキルらしい。

ちなみにハゼを驚かせるため、まだ使っていない。
というか覚えたことすら言っていない。

「ッ破ハ!!!」

腹の底から力強い声が発せられ、前方にいたモブの敵愾心ヘイトが俺に

集まる。

そのうち数匹は一瞬だがその動きを止めた。ついでにハゼも一瞬だけ止まった。

「ッ！？この馬鹿！私まで驚かせてどうすんのよ！」

うまくいったと心で笑い。俺はモブPTへと飛び込む。

まずはラミア1匹を『居合い』で吹き飛ばす。

リザードマン達のシミターは『峰弾き』や『受け流し』で・・・すると残っていたもう1匹のラミアの尻尾攻撃が頭上から突然迫ってきた。

それを長鉈で受け流し、ラミアの尻尾を滑らせていく。

ラミアの尻尾攻撃は鞭のように、巻きつくかのようにになる。

そのせいで一昨日までは受け流しても少なからずダメージを食らっていた。

だが装備ボースにより大幅にDEXが上がったおかげだろうか？尻尾が巻きついてこず、ピーンと伸びたまま綺麗に長鉈を滑っていく。完全に受け流せるようだ。この瞬間がたまらない、気持ちがいい。

そして次々と体勢を崩していくモブに、ハゼが『演舞』で薙刀を

叩き込んでいく。

完全に2人のパターンだ。

あっさりと敵PTを片付けたが、またあれよあれよと似たような敵PTが湧き出てくる。

しかしながら一昨日と違ってかなり余裕があった。

これも新スキルと新防具のおかげだ。とにかくひたすら狩りまくる。

「相変わらずあんた極まってるわね……それでどう？借金したけど良かったでしょ？」

「マジで月見さん装備のおかげだわ。めちゃくちゃ身軽になった」「ふふん、そうでしょう。それに私と月見さんで選んであげたから似合ってるわよ」

「……いやあれはもう勘弁……」

「なにおう。せつかく少しはかつこよくなつたって言ってあげてるのに」

「まじで？モテ期到来？」

「……侍フェチの女の子がいたら……来るんじゃないかな……」

「そんなフェチ女どこにいるんだよ！？ぜんぜんフォローになってねえよ！てかむしろ無理にフォローしなくいいから！悲しくなるから！」

いつものように軽口を叩き合いないが、2人のアイテムインベントリーが重量制限いっぱいになるまで狩り続けた。そういえば昼過ぎだったか？隣のウィズPTがフラグ通りに決壊してくれたのは・
・まあどうでもいいいな。問題無く対処できたし。

とりあえず当分の間は、この激湧きポイントでレベル上げしつつ金策できそうだ。

そんな浮かれた気分で帝都アスガルドへと戻った。

しかしその晩

そんな浮かれ気味の俺達の心に、忘れていた焦りを生む出来事イベントが起った。

残り時間は確実に減っていつている。ここにある平穩は束の間でしかない。そう思い知らされる出来事イベントだった。

それはルイージの酒場で狩りの大成功を喜んでいる時のことだ。

ゲーム内アナウンスが流れる。

アルカナクエスト『月』が達成されました。

9月6日 朝 帝都アスガルド ルイージの酒場

「なあ。俺達も”南砂漠の塔”のアルカナクエストに一度挑戦してみないか？死んでも大丈夫な今のうちに」

「んー……それは私も考えたんだけど、さすがに私達だけじゃ無理」

「なんでだ？噂じゃ低階層ならLv25以上PTでいけるって話だろ？」

「強さ的には問題ないんだけどね。それだけじゃあそこは無理よ。私も前のPT時代に何度かあそこで狩りしたけど、フィールドとは勝手が違うのよ。罾解除技能もってる人がいないと厳しいわね。つまり義賊・狩人・忍者よ」

「……そういえば、ルイージの酒場でも義賊・狩人・忍者ってあんま見かけないけど、人気ないのか？」

「逆よ逆。人気があるから酒場で臨時PT探さなくてもいいのよ。南砂漠の塔のおかげでどこからも引っぱりだこよ。もしも臨時募集かけるにしても、きっと砂漠近くの『魔法都市グレイプニル』を拠点にしてるだろうから、帝都じゃ時間の無駄よ」

それでも募集をかけてみないか？と提案したが、

『そもそも一刀流侍と薙刀巫女のPTに入ってくれる人なんてそうそういないわよ。あんたも分かっているでしょ』と言われたので諦めた。確かにその通りだ。時間の無駄だわ……。

「うーむ……でもずっとトカゲ草原じゃ出会いがなくなね？」

「何よ？ラミアがいるじゃない」

「……おまえは俺をなんだと思ってるんだ……」

「馬鹿でスケベ」

いや、間違っちゃいないんだけどよ。そうはつきり言われると・・・。

「別に女と出会いたいわけじゃねえよ。いや出会いたいけど……
ってかその出会いじゃねえから」

「はいはい。……まあ、あんたの言いたいことは分かるけどね」

そう言ってお互いに食後の飲み物を口にする。

カランと涼しげな氷の音が鳴った。

「そうねえ……1つだけないことはないわよ。かなりやつかいらしいけど」

「ん？アルカナクエスト？」

「そそ。聞いたことない？」

『嘆きのローレライ』

歌の好きな少女がいた。彼女は歌うことが本当に好きだった。

少女はいつしか大人となり、一人の男と恋をする。

彼女は歌と同じぐらい、その男を愛したという。

やがて彼女の体には、男との愛の結晶が生まれた。

彼女は喜び、誓った。

歌も男も、そして産まれくる我が子も、ずっとずっと愛して
いこうと。

だが男は違った。

歌も我が子も、そして身籠った女さえも、愛してなどいなか
った。

男は去った、船に乗り遠い国へと逃げ去った。

彼女は嘆き悲しんだ。

そして男を待つために、毎日毎日岬で歌い、そして最後に身
を投げた。

船よ、船よ、愛する男よ

遠い国には行かないで

船よ、船よ、愛する男よ

私はこの岬にいるわ

船よ、船よ、愛する男よ

私の歌が聞こえてるでしょう？

船よ、船よ、愛する男よ

歌と私と眠りましょう。我が子と一緒に眠りましょう。

……海の底で眠りましょう……。

） 港街スキーズの語りベNPCより 童話『嘆きのローレ
ライ』 ）

アルカナ大陸最西端に港町スキーズという町がある。

その町のNPCらの話をまとめると 『この港町は外海との入り口となっているため交易都市として栄えていたが、ローレライの呪いで船が沈むために寂れてしまった』 というストーリーになるらしい。まあありがちな話だ。

よって、このローレライを倒せばアルカナクエストを達成できるのではないか？

と考えられており、何度か討伐隊も組まれたようだが倒せずにいる。

最近では”南砂漠の塔”のアルカナクエスト攻略のほうที่盛んなために放置されたままらしい。

「どう？やってみる？西の岬でいつも歌っているらしいわよ。近づくと水属性魔法や魅了^{チャーム}を食らうらしいけど」

「ローレライだけか？他のモブは？」

「いないらしいわ」

「それなのにまだ倒されていないってことは、それだけ強いってことだろ？無理じゃね？」

「……それが、あんた次第で倒せるんじゃないかと思うのよね」
「根拠は？ちなみにオークキングと戦ったことあるけど、5発で死んだぞ」

「……あんたのその間違った方向への行動力だけは尊敬するわ……
……なんであんなのと戦ってるのよ……まあ私が色々聞いた話や掲示板情報からして、オークキングよりも弱いと思うわよ。少なくともLv35PTが一振りで消し飛んだなんて噂はないわね」

「どのB O S Sもオークキング級の強さだったら、南砂漠の塔攻略なんて無理だろうしな……」

「そういうこと。恐らくローレライはそんなに強くないはずよ」

「ならなんで誰も倒せてないんだ？」

「それはね」

その後色々議論を交わして、ローレライ討伐作戦をたてた。

本当は試しに戦ってみるのが一番手っ取り早いのだろうが、五感がリアルになったせいか死ぬと2日前後の休養が必要となる。今は時間が惜しい。せめて判明している情報から最低限の準備をしてからでないは無駄死になる。

そして話し合った結果、金策が終わるまでは結局トカゲ草原で狩り続けることになった。

ローレライと戦うために必要なものがいくつかあり、予算がまったく足りないのだ。

- ・各種ポット
- ・水属性防御を付与した羽織装備
- ・魅了耐性アクセサリ

最低でもこれらを用意してから戦おうという話でまとまった。

また編成は、俺が前衛で火力役、ハゼが後衛で回復役に徹する予定だ。

『敵が1匹だけ。こちらは2人PT。前衛がローレライと互角以上によりあえるなら、後衛は回復に徹するべき』　ハゼから出された意見だった。

『いいのか？』　そんな俺の問いかけに。

『PTなんだから当たり前でしょ。状況に応じて使い分けるだけよ。ちゃんと私のスタイルに合った戦い方だしね。あいつらみたいカード編成をテンプレ通りに変えるなんて言われたら……さすがに私も怒るけど』　ハゼは笑いながらそう言ってくれた。

ここ数日は、金策のためにトカゲ草原でとにかく狩り続けた。ローレライ討伐という明確な目的ができたせいか、俺もハゼもやる気が俄然違っていた。

そして

9月13日 夜 ルーイジの酒場

今日は狩りを昼過ぎで切り上げて、夕方から露天広場を練り歩いた。

魅了耐性アクセサリを探し出して値切り交渉などするためだ。（主にハゼが）

そして、ようやく目的のアイテムを入手した頃には日が沈んでしまっていた。

今は夕食をとるために酒場にやってきたところで・・・

酒場のカウンター席についた途端。
隣に座るハゼが俺のほうに顔だけを向けて、その上半身をぐったりとカウンターに貼り付けた。

「づがれたー……ようやく全部揃ったー……もう露天巡りは当分なし。ジン肩揉んでー」

「ハゼにまかせつきりだったしな……仕方ねえ。今日だけだぞ」

「ひう！？……ん……や……す、ストップ！ストップ
！」

「ん？痛かったか？」

「……なんか手つきエロイ」
「……」

この野郎。人の善意をなんだと思ってやがる。

「……いい度胸だ。痛いぐらいに揉めばエロイとかそんなん無くなるだろう。おら肩かせや」

「待った！ちよつとたんま、ごめつ！悪かった！今のは悪かったから！っきゃ！？ちよつと変なところ触ら　ッ！？」

肩を揉むために背後に立っていた俺は、
こちらを見上げながら両肩を抱いていたハゼを、カウンターに押し付けて無理矢理肩を揉んでやった。

「いたたたた……もう信じらんない。かわいい女の子になんてこすんのよ。あー……でも軽くなった。ジンありがとね」

疲れていたのはきつとメンタル的な部分なんだろうが、
とにかくハゼも復活したので夕飯を注文して2人で食べる。

最近ハゼがどんな味を好むのか何となく分かってきた。
間違いなく俺と同じで濃い味は苦手だ。お互い出汁のきいたしつかりとした薄味が好みのようなのだ

それにしてもだ。

少しずつだがルイージの酒場で料理を売るユーザーのレベルも上がってきている。

明らかに味が良くなった。まだ試したことは無いがアルコール系飲料の種類も増えているようだ

他にも多数の”料理人”が集まって店舗ショップを共同購入して食堂を営んでいたり、

”建築士”がその内装を作ったり、

”錬金術士”が調味料を開発したり、

料理道具を専門に作る”鍛冶職人”がいたり、

”農家”が帝都近辺の草原で農作物を収穫したり、

街近辺ならばPK範囲外だからだろうか？

・・・なんとかというか生産職系ユーザー達が一番この仮想世界に順応し、不安を隠しながらも楽しんでいる気がする。

料理だけでなく他分野でも着々と生活基盤が作られていっており、アルカナ掲示板には『馬車を作るための情報交換スレ 5』などの各種様々なスレッドが立てられ、日夜検証にちやや研究が繰り返されているようだ。

生活基盤にかかわる生産系の自由度が凄まじく高い。
それに宿屋・アルカナクエスト・他にも不自然な点はたくさんある。

今回の大事件は間違いなく開発スタッフ達が関与している・・・
いったい何を考えてこんなゲームを作ったんだろうか？

夕飯を食べながら・・・ふと、そんな事を考えてしまった。

- ・回復系ポット 多数
- ・リジエネレーションPOT（30分） 2個
- ・魅惑殺しのイヤークラス 2個
- ・羽織千早（水の魔力糸・月見） 1個
- ・羽織（水の魔力糸・月見） 1個

以上がローレライ討伐用に用意したアイテムだ。
詳しい値段は分からないが、約1週間毎日のようにトカゲ草原に通い、ようやく揃った。

ハゼがいなかったら絶対に無理だったな まずい。妹が管理していた頃とまったく同じだ。

あの頃も『藍がいなかったらゲームソフト買えなかったな』など
と思った記憶があるぞ・・・まじやべえ。当分俺の財布は帰ってこないかもしれない。どうしてこうなった。

・・・話を戻そう。

ちなみにハゼは『水属性防御の羽織は、前衛役の俺の分だけでい

い』と言ったが、

念のためハゼの分も月見さんに作ってもらった。

そうそう。羽織作成を月見さんに頼みにいった際、ハゼが月見さんに事前連絡を入れてなかったせいで月見さんが拗ねた。

そりやもう盛大に拗ねた。”精神年齢何歳だよ。このおばさん”と言いたくなるぐらい拗ねた。まあ俺がハゼを捕まえて、月見さんに差し出し、思う存分セクハラして下さいと申し出ること事で事無きを得たが・・・。

どうもハゼは月見さんの娘が苦手らしい。聞いても言葉を濁すので詳細は謎だ。

まあどうでもいいな。

そんなことよりも赤禪^{あかふん}だ。

ハゼにバレると妹同様に説教されそうだったので今まで黙っていたが、羽織のために月見さんのところへ訪れた際、ハゼに見つからないように、こっそり月見さんに聞くことができた。

『時間はかかりそうだけどカスタマイズで作れるかも？』

『もしかすると装備ボーナスもつけれるかも？』

『とりあえず時間がある時に試してみるわ・・・霞ちゃんには絶対に極秘よ。ふふふ』

DEXUPの禪とかすごくない？

つまりテクニシャンになれる禪だ。禪・・・テクニシャン・・・やだ・・・かっこいい。

「……………でいくわよ。分かった？あんた聞いている？」
「ん？ああ、大丈夫だ。聞いている聞いている」

食後に”ローレイ討伐作戦”の再確認をしていたのだが、ちょっとトリップしていたようだ。

危ねえ・・・妹もハゼも勘がいいからな。バレたら俺の”脱・半漁ZIN計画”が破綻してしまう。注意せねば・・・。

まずはローレイだ。

きつとローレイを討伐する頃には、月見さんに極秘オーダーした『禪（炎の魔力系・月見）』にも何らかの経過報告があるだろう。ハゼに見つかからないように月見さんとはフレンド登録も完了している。何かあれば個別回線で月見さんからも連絡がくる予定だ・・・。

さあ。いよいよだ！脱・半漁ZIN計画！……………なんとしても成功させるぞ！

「いよいよね！ローレイ討伐作戦！……………なんとしても成功させるわよ！」

Z I N : 侍 L v 4 2

一刀流 L v 3 5 居合い L v 3 3 無鬪流柔術 L v 3 1 ステ

ップ L v 4 0 ジャンプ L v 1 3 泳ぎ L v 5 9

【装備】

武器：長鉈（ステイル・桜吹雪）

頭：魅惑殺しのイヤークラス

腕：手甲（黒）

胴：鯉口シャツ（白）

腰：武者袴（紺）

足：草鞋

外着：羽織（水色）

内着：足袋、ボクサーパンツ下着

アクセ：なし

（外着：水の魔力糸・月見）

（他防具：鉄の魔力糸・月見）

（防具ボーナス：DEXUP*6）

H a z e : 巫女 L v 3 8

神道流薙刀術 L v 3 4 演舞 L v 3 6 棒術防御 L v 2 7 祈

禱 L v 3 3 詠唱術 L v 3 0 魔力補助

【装備】

武器：薙刀（ステイル・汎用）

頭：魅惑殺しのイヤークラス

腕：手甲（黒）

胴：白衣

腰：緋袴

足：草鞋

外着：羽織千早（水色）

内着：半襦袢、スポーツタイフ足袋、下着

アクセ：なし

（外着：水の魔力系・月見）

（他防具：鋼の魔力系・月見）

（防具ボーナス：STRUP*6、DEXUP*6）

9月14日 昼 港町スキーズ

「この北門の先に、灯台の立つ岬があるらしいわ。ローレライはそこよ」

早朝に帝都を出発した俺達は、急ぎ足で大陸最西端の港町スキーズへ向かった。

帝都西門から内海に沿うようにして弧を描く『西街道』の先に、ようやく港町スキーズの町並みが見えてきた頃、すでに太陽は空高くにまで昇っていた。

汗1つかかぬ仮想空間にすっかり慣れてしまったが。

もしもこれが現実世界であったならば、ジリジリとした熱い日差しで間違いなく熱中症を起こしていただろう。そして熱中症にはならないが、五感が鋭くなったせいかずっと歩いていると思った以上に疲れる・・・。

そうして港町スキーズの東門から町中へ入った俺達は、

閑散とした商業広場を目の前に無言になった 『町についたら、まずは屋台で冷たいモノとおいしいモノを買って休憩ね！』 道中それだけを楽しみにしていたハゼの絶望っぷりが半端ない。餌を

取り上げられた飼い猫のようだ。やべー……その顔笑える。笑ったら怒られるから堪えるけどな。

アルカナ掲示板情報によれば

まず港町スキーズには3つの門がある。北門、東門、東南門
北門は、ローレライのいる『灯台岬』へ続いている
東門は、帝都アスガルドと港町スキーズを結ぶ『西街道』の出入り口

東南門は、魔法都市グレイプニルと港町スキーズを結ぶ『グレイプニル西道』の出入り口

そして港町スキーズのエリアは2つしかない。東エリアと西エリアだ

東エリアが、商業広場

西エリアが、家屋エリア。ここには『義賊の酒場』があるらしい

だいたいこんな感じだ。

ちなみに内海に面する帝都アスガルドと港町スキーズには、
”交易所”^{ショップ}というNPC店舗がある。

今はローレライのせいで外海を利用した交易路が封鎖されており、まったく機能していないが、

『ローレライを倒せば交易品として新しいアイテムが売りに出されるのでは?』という説がもっぱらだ。なので以前は頻繁にローレライ討伐隊が組まれていたというが……。

・・・きつとローレイ討伐が盛んだった頃は、
この商業広場も賑わっていたのだろうが、残念ながら今の流行
は”南砂漠の塔”つまり”魔法都市グレイプニル”だ。ここで商売
していた生産者達も、攻略組と一緒に南の魔法都市に移ったのだろ
う。

「……ジン……とつとローレイ倒して帰るわよ。分かってる
わよね……」

ハゼが底冷える声でそう言った。
怖い。ハゼさんマジ怖い。

… 船よ 船よ 愛する男よ…

北門から灯台岬へと歩いていけると、
歌声が聞こえてきた。遠目にローレイも見えている。
歩みをとめて隣を見ると、ハゼが目で『そろそろね』と言っ
てきた。俺も黙って頷きかえす。

続けてアイテムインベントリーからPOTを取り出した。

どのようなPOTも、容器はガラス製の薬剤容器だ。^{アンブル}

片手で握ったアンブルの先端を親指で折ると、パキンと軽い音をたてて先端が地面へと落下し・・・消滅した。開封したアンブルを飲み干す。体が一瞬だけ熱くなった。

アンブルに貼られたラベルには 『効果は30分間。HP&STのリジエネレーション回復。飲みすぎ注意』とだけ書かれていた。空になったそれを足元へ放り捨てると、消えた先端と同じように消滅する。

最近になり錬金術士らが錬成に成功したリジエネレーションPOT（通称：リジエポ）は、POTとしては異常に高額だが効果は抜群だ。BOS S戦などでは必須と言われており、減ったHP&ST、HP&MPを緩やかに回復し続ける。

MMORPGなら戦闘しながらでもPOTを使えるのだろうが、VRMMORPGでは無理だ。

武器をもって動き回り、戦闘しながらPOTを飲むなど不可能だ。戦闘中にPOTを使う場合には、PTメンバーの誰かに壁をしてもらうしかない。二人PTの俺達にとっては常に頭を悩ます問題だ。

「っ」

横に立つハゼが、体を少し震わせつつ可愛らしい小さな吐息を漏らした。

俺と同じように”HP&MPリジエポ”を飲み干したのだろう。

ハゼはPOTを飲んだ直後に一瞬だけ体が熱くなるのが苦手だ。
POTを飲み干すと、何やら可愛らしい小声を漏らすクセがある。
ついでに反応してしまつて声を我慢できないと言つていた。

『……エロイ体だな』

そう言つた俺が、顔を赤くしたハゼに怒られたのは、確かPTを
組んだばかりの頃だつたらうか？

あの頃は、こいつと一緒にBOSS狩りするなど考えもしなかつ
た。

・・・さあ、いよいよだ。

ハゼの支援範囲^{レンジ}は約10m。

念のため俺とハゼは約5mほどの距離をとり、慎重に足を踏み出
した。

岬の先　灯台の麓^{ふもと}に転がる石の1つに腰かけて、
海に向かつて歌い続ける美しい女がいた。

歌い続ける悲しい女は、俺達が近づいてきたのに気付くと、こち
らを向いてゆつくりと立ち上がり・・・歌うのをやめた。距離は約
30m。確か魔法スキルの最大攻撃範囲^{レンジ}がそれぐらいだつたはずだ。

ローレライの歌声がとまった瞬間　細かな波を描くようなクセのある長い金髪が逆立ち、青白くて美しい泣き顔が憤怒に歪んだ。青いレースのようなワンピースを、豊満な胸から足首まで隠すように着ていたが、今はその裾が膝までめくれ上がり激しく波打っている。

・・・西洋の鬼女とでもいうべきだろうか・・・
その血のように赤く染まった目　と目が合った。

ズキンと頭に痛みが走る・・・が特に大丈夫だった。
恐らく魅了^{チャーム}を食らったんだろぅが、『魅惑殺しのイヤーカーフス^{レスト}』のおかげで抵抗できたようだ。

それを見て取ったローレライが手の甲をだらりと垂らしながら、その右手を俺のほうへと向けた　　ッ!?

ローレライの周囲に生まれた7つの水球^{ウォーター・ボール}が一斉に俺へと飛来してきた。

最初の頃は、ステップの跳躍範囲も”2m～2m半”しか無かった。

けれどカードが成長した今では、最大4m近くまで跳べる。消費STもかなり減った。動きもより速くなってきている。

俺は直線的に飛来する水球を小刻みなステップでジグザグにかわしながら、地を這うようにローレライへと加速した。

長鉈は鞘にしまったままだ。鞘の先が地面とぶつかりガツガツと音を立てている。

・・・今回は無闘流柔術で倒す。それが俺達二人の出した結論だった。

ウォーター・ボール
水球をかわし、ステップと駆け足で近づく俺に対して

ローレライが右手をくるりと返した。

だらりと垂らされていた手の甲が返る。

こちらに手のひらを向けたと思った刹那　その指先が空へと突き立った。

一瞬にして俺の足元に大きな水溜りができ、ウォーター・ヒラー
水柱が跳ね上がる。

「ジンツ!？」

咄嗟に右ステップで回避行動をとったが、かわしきれなかった。

直撃は免れたがHPバーは3/5に減っている。
まぬか

・・・水属性防御のついた羽織があっても、かすめただけでこれかよ!？直撃したら即死だな。

減ったHPがリジェポ効果で緩やかに回復していくが、途端に全快近くまで回復した。

ハゼが俺に『癒し』を発動させたようだ。ウォーター・ヒラー
水柱さえ直撃しなければいけそうだな。

そう考えた直後。

まだ15mほど先にいるローレイが、俺の左後方へと視線を移した。

ハゼは魔法スキル使用後の硬直タイムにより、その場から動けずにいる　まずい！

左ステップでローレイとハゼの射線に割り込む。

ローレイが右手で弧を描くように横薙ぎにし、
ウォーター・エッジ

水刃が迫ってきた。長鉈を抜いてそれを峰弾く。俺のHPが2/3になった。

エッジ系魔法は高威力だが、魔法判定と物理判定が混在している珍しい魔法攻撃だ。

今の俺は、峰弾きで物理判定分のダメージを軽減し、残った魔法判定などのダメージを食らった状態だ。ミスリル、アダマントイト、オリハルコン、ヒイロカネなどの希少金属レアメタルならば魔法判定にも強いと噂されているが・・・。

「ごめん！ジン！」

「大丈夫だ。今のは敵愾心ヘイトを集めなかった俺のミスだ。すまん。
ッ破！」

そう答えて活櫛を入れる。

ローレイの手の甲が俺へと向けられる。

ハゼが俺のHPを回復し、俺が再び接近する。

再び飛来する水球。
ウォーター・ボール

それらをステップで避けながらローレライとの距離を詰めていく。
あの右手がひっくり返り、手のひらをこちらに向けて
こ
ねえ！？

ローレライが右手を上段に振り上げて、思い切り俺へと振り下ろ
してきた。

ウォーター・エッジ
水刃が迫ってくる。

ステップで横に跳べば避けれるが・・・嫌な予感しかしない。
オークキングと戦った時と同じだ。本能が危険をつけている。

受け流そう。

長鉈を抜いて受け流し、ウォーター・エッジ 水刃の魔法判定分のダメージのみを食ら
う。

ウォーター・エッジ
そして水刃を食らう俺の視線の先で、ローレライが手のひらをこ
ちらに向けるのが見えた。

すぐさまステップで前に跳ぶ。

ウォーター・ビラー
背後で大きな水柱が跳ね上がった。

ウォーター・エッジ
きつと水刃をステップで避けていたら、着地と同時に水柱を食ら
ったはずだ。くそ・・・思ってた以上にやっかいだ。
ウォーター・ビラー

ハゼが俺のHPを回復する。

ヘイト
敵愾心が流れないように活櫓を入れながらローレライへと近づく。
一歩・・・さらにもう一歩。もうすぐだ。その化物面・・・ぶん

殴ってやるよ。

ローレイが右手を横薙ぎにした。
ウォーター・エッジ
水刃が迫るがジャンプで飛び越え　思い切りローレイを殴りつけた。

ふと後方のハゼは大丈夫か？と思ったが、
どうやら射線から外れるように立ち回っているようだ・・・頼りになる奴だ。

と。ローレイが体勢を崩しながら、左手の爪を鋭く伸ばして俺を斬りつけてきた。

咄嗟に俺はローレイの左手をとり、地面へと叩きつけ、さらに脇腹へ蹴りを一発。

顔を歪めたローレイが口をパカリと開いた　！？
ウォーター・ショット
その口から水散弾が放たれる。

咄嗟にステップで後方に飛んだが避けきれなかった。
範囲が広い。けれど1つ1つの威力は強くない。至近距離だと何発ももらってしまうが、リジェポでどうにかなる。許容範囲だ。

ローレイとの間合いは4、5mほど。俺の数m背後にはハゼが。
この距離感でミスさえしなければ何とかなる。
なんだか気分が高揚していた　必ず倒す。

そんな一進一退の攻防が始まった。

・・・かなり長い時間戦っていた気もするし、
まだまだ数分しか経っていないような気もする。

時間の感覚が掴めない。集中している。

このまま作戦通りにいけばいいのだが・・・

ローレライのHPは残り1/10近くになっていた。

俺が魔法をかくぐり、無鬨流柔術で攻撃しては離れる。

これを繰り返した結果だ。

ヒット&アウェイで削る。長鉈は極力使わない。一ノ太刀から二ノ太刀へと繋げる刀技は強力だが、それだとSTがきつくなる。

ST回復はリジエポまかせだ。

ステップのカードレベルが上がっているおかげで、
ステップを連発する程度ならリジエポで充分^{まかな}賄える。

HP回復はハゼの『癒し』まかせだ。

俺さえローレライを抑えできれば、後衛のハゼにはMPポットを飲む余裕ができる。

これが今回のローレライ討伐作戦の1つだった。紙一重だが上手くいっている。

そして、残りのもう1つを成功させれば

！？

「ジン！」

「後はまかせろ！」

『なんでローレライを倒せないかっていうとね。危なくなったら逃げるのよ』

『追えばいいだろ？』

『逃げる場所が問題なの……海底よ』

『今までローレライに挑戦した連中は、誰も彼も”泳ぎカードなんて育てたくない” 下手に泳ぎ持ちをPTに入れてBOSSドロップを持ち逃げされたくない” 取り分を減らしたくない” そんな理由のせいで、いかにしてローレライを海に逃がさずに倒しきるか。そこに固執していたようなの。だからあんたなら倒せるかもしれない。その馬鹿みたいな『泳ぎ』のおかげでね』

ハゼの言葉が頭をよぎる。

残りHPが1/10以下になったローレライが、岬の先から海へと飛び下りた。

俺もその後を追う。ハゼが最後の『癒し』を俺にかけた。

HPは全快。STもまだ半分ある。リジェポの効果も消えていない。

・・・これで倒せなきゃ土下座だな。

きつと倒せなくても、なんだかんだと面倒見のいいハゼなら絶対に怒らないだろうが、何故かそんなことを思ってしまった。

ローレライに続いて岬を飛び下りる っちょ！？ブルーホール！？聞いてねえぞ！

岬の下は、美しいサンゴ礁が広がる浅瀬だった。

そして、そのサンゴ礁に囲まれるようにして、丸くて暗い穴がぽっかりと空いていた。

ブルーホール。

確か現実世界では鍾乳洞や洞窟などが長い年月を経て水没し、その天井が崩落してできる海の穴だったはず・・・。

その海の穴に大きな水飛沫みずしぶきが2つ上がった。

・・・くそ。

落下ダメージなんて食らうのかよ。HPが1/2になってしまったが、

とりあえずHPのことは無視する。今はとにかく潜り続けよう。

俺の視線の先には、

人魚のように両足で海を蹴りながら底へ底へと泳いでいくローレイがいる。

何故かローレイは落下ダメージを食らわなかったようだ。きたない、さすがローレイきたない。

俺もステップを使いながら必死にローレイの後を追う。

さきほどから魚1匹見あたらない。

そしてすぐに日が差し込まなくなり、あたりは暗い海と化した。

鍾乳洞の名残りだろうか？この海の穴はゴツゴツとした岩壁できていた。

暗い海では、それも見えなくなってしまったが。

だが。

同様に見えなくなったローレイが底に向かって潜り続けているのは明らかだった。

泡だ。穴の底から泡が立ち上ってくる。とにかくこの泡を追うしかない。潜り続けよう・・・

・・・どれくらい潜り続けただろうか？20分？いや30分だろうか？

ようやく暗い海の底へとたどり着く。ランタンを点けよう。
灯したランタンを片手に、その右手を正面へと掲げる。

すると僅かな灯の先に”青白い女”の足が見えた。

いた・・・ローレイだ。

ランタンの灯を広げるように、右手にもったそれを大きく頭上へと掲げる。

だんだんとローレイの全貌が見えてくる。

ローレイは小さな岩の上で、

聖母のように優しい顔をしながら赤子を愛しそくに抱いていた・
・赤子はミイラだった。

257

言葉がでない。

仮想現実のNPCだというのは頭では分かっている。

だが、あまりにもリアルすぎる。

その異常な光景に失ってしまった母の絆を感じてしまう。

愛しい男よ……やっとなてくれたのね！

海中だというのにローレイの美声が響いた。

本当に幸せに満ちた顔をしている。俺が誰なのかすら分かっていない。

きつと男が一人でここにたどり着けば・・・ただそれだけで良かったのかもしれない。

ローレライが赤子をすぐ側に横たえて立ち上がった。
その両手を大きく広げながら、ゆっくりと俺に近づいてくる。

待っていたわ……さあ！

この哀れなNPCはいつたい何を待ち続けたのだろうか？

もしもこの暗い海の底に、俺以外にも誰かがいたら・・・？

もしもこの暗い海の底に、女性ユーザーがたどり着いていたら・・・

・？

俺が・・・男がここにたった一人で立っていなかったら？いったい何が起きたのだろうか？

・・・考えても仕方のないことだった。

とにかく、こんな虚しい物語はもう終わらせるべきだ。

たとえこれが作られた母子の哀れな物語なんだとしても・・・俺には耐えられない。

ここに妹がいなくて本当に良かった・・・心の底からそう思った。

ああ！愛しい男よ！

ローレイが俺の胸に縋りつき、

両手を俺の背中に回しながらがっちりと抱きついてきた。

もう……絶対に離さない

俺は哀れな女の頭を抱きこんでやる。

そして……そのまま抱き”絞め”てやった……。

……どれくらいそうしていただろうか？

不意にローレイの体が輝き、光となって砕け散った。
暗い海の底にキラキラと光の粒が舞う。

それと同時にゲーム内アナウンスが流れる。

アルカナクエスト『恋人』が達成されました。

「ふーん……で？ドロップはどうだったの？」

「……お前な。同じ女としてもっと何か言うことがあるだろ？こ
う『かわいいそう……』とか」

「そりゃ私もかわいそうとは思うけど、そもそも作り話よ？最後
は勘違いして幸せそうに死んでいったんなら、それでいいじゃない
？ローレライもきつと救われたはずよ。そもそも相手はNPC。気
にするだけ無駄よ無駄。だからあんたもほら。いつまでも落ち込ん
でないの。今回あんたはがんばった。それでいいじゃない」

そう言つて酒場のカウンターにへたり込んでいる俺の頭を、
わしゃわしゃと撫でてくれた。

9月14日 夕方 港町スキーズ 義賊の酒場

ローレライ戦後、俺達二人は港町スキーズの”義賊の酒場”に來
ていた。

この”義賊の酒場”はルイージの酒場と同じ機能を持っており、
それ以外にも義賊系カードを変化してくれるNPCがいる。

しかしながら、寂れてしまったこの酒場には俺達二人だけしかい

ない。

酒場のNPCに混ざって料理アイテムを売る料理人ユーザーもないので、

仕方なくアイテムインベントリーから冷めた弁当や温い飲み物などを取り出し、なんとも佻しいローレライ戦の打ち上げをやっているところだ。

そしてカウンターに置かれた佻しい飲食物と同様に、俺のテンションも低い。

いくらNPCとはいえ、あまりにリアルすぎて感傷的になってしまった。

ローレライを倒して暗い海の穴を抜け出してから、海岸までゆつくりと泳ぎ、そこからとぼと歩いてスキーズの町に戻ってきた頃には、時刻はすでに16時を過ぎていた。

東門で俺の到着を待っていたハゼは、俺の様子を見ただけで何かを察してくれたらしい。

「とりあえず酒場にいきましょう」とだけ言って、俺をこの酒場につれてきた。

そして「最後はどんな戦いだっただの？」と聞いてきたハゼに、俺は吐き出すようにローレライの最後を語った。

「つま、こつというのは男のほうが精神的ダメージ食らいそうよね。

儂げな凄い美人だったし」

「せめて最後まで化け物面してくれればなー……」

「あー……確かにそれはあるわね……」

「何にせよ。ハゼの言うとおり落ち込んでても仕方ねえよな」

「そうよ。あんたは馬鹿でスケベぐらいがちょうどいいんだから」

「……お前は俺を何だと思ってるんだ」

「馬鹿でスケベ」

いや、間違っちゃいないんだけどよ。

「それよりもほら！ドロップが何だったのか教えてよ？」

「そういや俺もまだ見てないんだわ」

アイテムインベントリーを開くと、見慣れないアイテムが4種あった。

262

・ミスリリンゴット（大）×6

・ギルドストーン ×1

・ローレライの感涙 ×1

・知恵のかけら（1）×1

【ミスリリンゴット（大）】

『魔力を湛えし聖なる銀。』

それは羽よりも軽く。鋼よりも強い』

UNIQUE ITEM

取引可能／破棄可能
素材アイテム

【ギルドストーン】

『絆きずなよ！何よりも偉大なる力となれ！』

RARE ITEM
取引可能／破棄可能
消費アイテム
ギルド創設可能

【ローレライの感涙】

『悲哀の美しき女は。最後にその願いを叶えた。
・・・それが偽りであつたとしても・・・
朽ち果てし赤子は。その感涙となりて想ひを継ぐ』

LEGENDARY ITEM
取引不可／破棄可能
防具アイテム（指輪／男性専用）
特殊シンクロニシティアイテム：（未設定）
海よりも深く美しき宝玉は、その恩を決して忘れない。
そなたが宝玉に願うとき・・・

う。
深き水に愛されし稚児^{ちご}は、その身をもって助けとなるであろ

【知恵のかから（１）】

『１３の知恵を集めし者のみ。主の資格を得るであろ』
かから（１）：Big Moon Shadow
かから（１）：クルセイダース
かから（１）：ギルドなし（ZIN）

QUEST ITEM

取引可能／破棄可能

クエストアイテム

かからを破棄した場合、他のかから所有者へ転移します
PKされた場合、PKしたユーザーへ転移します
PK以外で死亡した場合、破棄と同じ扱いとなります

「何よ……これ……」

俺達二人以外誰もいない酒場に、ハゼの呟きが静かに響き渡った。

アイテムの等級は様々だ。

”NORMAL<RARE<UNIQUE<EPIC<LEGENDARY”

ユニーク6個、レア1個、レジェンダリ1個。・・・そしてクエスト1個。

強さ的には”最弱のBOSS”と評されたローレライだったが、かなりのボスドロップだ。

いや・・・今回のボスドロップはやべえな。色々な意味で。

もしかしたら”EPIC級”が出るかもしれないと淡い期待をもっていたが、

まさか”LEGENDARY級”が出るとは・・・。

- ・LEGENDARY級だけは絶対に手に入らない。
- ・本当にあるのかすら怪しいレベル
- ・ゲーム内にも数個しかないはず
- ・LEGENDARY級手に入れたら・・・俺結婚するんだ・・・

アルカナ掲示板ではそんな風に言われてたはずだ。

ちなみに女性ユーザーが男性ユーザーの告白を断るときに、

『LEGENDARY級持ってきたら考えてあげてもいい』などという断り文句があったりする。

それよりもだ。いま問題なのは”知恵のかけら”だ。

林檎をスライスしたような姿形をしている。

とりあえず説明文からして碌なもんじゃない。

いかにも奪い合って下さいと言わんばかりのアイテムだ。

特に、他の所持者情報が出るのが最悪だ。

見たところギルドに所属していればギルド名しかでないようだが・

・

『恋人』クリアのアナウンスが響き渡ったばかりだ。他の所持者達は、すでに俺が手に入れたことを知ったことになる。まじで最悪だ。

「よし。捨てよう」

「……せめてデスゲーム始まるまで持つところとか思わないわけ
……あんたは」

「だってどう見てもやばいぞ。これ？」

「……はあ。しょうがないわね。じゃあとりあえず私が持つとく
から、それ渡しなさい」

「……まじで言ってる？」

「まじで言ってる」

「いやいやいや、これ持ってたらハゼさんが狙われるじゃないで
すかー。やだなあ、もう」

「大丈夫よ。まだどんな意味があるのかも分かってないわけだし、
もしも脱出に関わるアイテムだったら必要になるし、とにかく捨てる
のはまだ早いわ。危なそうならデスゲーム開始直前に捨てればい
いのよ」

ハゼが言っていることはよく分かる。正論だ。
だが、このアイテムはどうもよくない。嫌な予感しかない。
自慢じゃないがこの手の勘だけは外したことがない。

ハゼを必死に説得するが

『今はまだ捨てる時期じゃない。嫌なら私が持つておく』の一点張りだ。

この野郎。どっちが馬鹿なんだか・・・。

「仕方ねえ……ハゼに持たせるぐらいなら俺が持つとく」

「つそ。ならあんたがギルド作りなさい」

「はい???」

「だってギルド無かったら、ずっと名前がだたままよ?もう”BMS”と”クルセイダーズ”にはバレてるだろうけど、無いよりマシだから作りなさい。ちゃんと私も入るから」

「え?はい?ってかハゼも入るのか?危ねえだろ。それだとハゼも狙われるかもしれないし、何のために俺が持つとくことに」

「うるさい。だまれ。私は仲間が危なくなったら見捨てて逃げるようなクズじゃないの。ここまで来たら一蓮托生よ。もう腐れ縁なの。あんたは馬鹿でスケベだけど……誰よりも信賴してる。それに薙刀巫女の私がPTに入れてもらえるなんて甘い考えは、もうとつくの昔に捨ててるの。今更生産職に転職なんて考えたくもないし……そもそも借金もまだ残ってる。嫌なら全部返しなさい。今回ローレライ討伐の準備を優先したから、あんたの借金少し増えてるわよ」

真剣な眼差しで俺をじつと睨みつけてくる。

これは・・・引いてくれそうにないな。

今更ハゼ以外と組もうだなんて気は、俺もまったく起きないし・・・仕方ない。腹くくるか。

信頼できそうな奴を見つけて、あわよくばギルドに入ろうと思っていたのに、まさかギルドを作ることになるとは・・・。

カウンターに置かれたギルドストーンを手にとる。

こぶし大のそれはプリズムになっており、まるで虹を湛えているかのように見える。

俺はそれを正面に掲げて呟いた

「make guild」

目の前にホログラムウィンドウが浮かびあがる。

『絆を求めし人の子よ。その絆の名を決めよ。』

ギルド名を入力しOKを押して下さい。(OK/CANC

EL)』

「じゃあ作るぞ？本当にいいんだな？」

「いいからとつと作りなさい　　っあ！……一応言っておくけど変な名前にしたら怒るわよ？」

「いくら俺でもそれはねえよ。ちょうどいい名前を思いついたんだ。映画の名前を改変したかつこいいのが。ハブれた男と女が逃避

行する映画なんだけど、どうよ？」

「へえ。あんたにしちゃ珍しくまともそうじゃない。いいわ！後ろ向いててあげるからギルドがきたら声かけて！」

ハゼが喜びながら背中を向けてきた。

うれしそうだ。すんげーうれしそうだ。

・・・期待していいぞ。

あの映画は実にいい邦画だった。ちょうど今の俺達にはぴったりだ。

俺がハゼと出会うまでにしてきたこと。

俺がハゼを初めて見たときに感じたこと。

俺とハゼがこれから争いに巻き込まれるかもしれないこと。

そんな様々な思いを込めて、俺はギルド名を入力した

『鯨狩男と巫女尻女』

(サメガリオトコト ミコジリオンナ)

完璧だ。あまりにパーフェクトすぎて思わず濡れそうになった。

ハゼもきつと大喜びするだろう。いい映画だし、いい尻だしな。

肩を叩いてハゼを振り向かせる。

ギルド名を見たハゼが、ニツコリと満面の笑みを浮かべてこう言った。

「……とりあえず。正座しようか？」

え？あれ？

酒場の床に正座させられて、夜まで説教された。

・・・何故だ。どうしてこうなった・・・本当にいい映画なのに。

納得いかねえ。

9月14日 夜 港町スキーズ 義賊の酒場

「あんたを少しでも信用した私が馬鹿だったわ。ほんと『OK』を押す前で良かった」

「……すみませんでした。……でもすごくいい映画なんだ。本当だぞ？」

「それは認める。私もリマスター版を観たことあるし、すごく好きな映画よ。あんたが一応真面目に考えてくれたんだってのもよく分かる」

「じゃあ、やつぱこれぞ？」

「……はあ。これだから感性だけで生きてる馬鹿は……。いい？ ジン。あんな大昔の映画を知ってる方がおかしいの。知らない人が見たら『尻女』しか伝わらないわよ」

「そうか？ 名作だし結構知ってる奴が多い」

「……わけないでしょ。……でも。あんたが言っとおり、あの映画のタイトルを使っつてのは悪くないわね。……そうね。ジンが『泳ぎ』に拘ったように、私にも拘ったモノがある。だからこれでどう？ 『鯨狩男と』」

そうしてギルド名を2人で話し合って決定し、

ようやく宿屋に入った頃には、時刻は20時になろうとしていた。

9月14日 夜 港町スキーズ 宿屋

今日は色々とありすぎて疲れた。早く寝よう とした時だった。

個別回線が着信をつけている。

誰だ？・・・おお妹。あの日話して以来だったもんな。きつと兄さんとなかなか会えなくて寂しいんだろ。仕方のないやつだ。

『どうした？藍』

『兄さん。今時間は大丈夫でしょうか？』

『大丈夫だぞ』

『それでは、聞きたいことがあるのですが……ローレライを倒したのは兄さんですか？それで”恋人”が達成されたのでしょうか？』

『ああ、そうだ。俺がローレライを 』

『すみません兄さん。もうすぐギルド会議があるもので詳しい話は結構です。そうでしたか……やはり兄さんで間違いなかったんですね……』

え？あれ？なんかおかしくね？

今から俺の武勇伝が始まって『兄さんすごいです』ってなる場面じゃないの？

『えつと、藍？』

『あ、失礼しました。ごめんなさい。少し考えことを……それで

1つお願いがあるのですが？」

なんだろう？

もしかして『やっぱり強い兄さんと一緒にいたいです』って話か？
まったくしょうがない奴だ。さすがに今度は兄さんも断れないな。
なんせかわいい妹からの二度目のお願いだしな！

『ああ、いいぞ。何でも言ってみろ』

『それでは。しばらくの間は、町中ですれ違ったり、人前で会っても、私とは他人のふりをしてほしいんです。分かりましたか？兄さん。お願いしますね』

え？あれ？・・・ え？あれ？・・・

『…………え？』

『どうもその反応ですと、兄さんはまだ見ていないようですね…
… あ！はい。すぐ行きます！すみませんヴィヴィさん！ そ
れじゃ兄さんお願いしましたよ。絶対ですからね。…………まあ、兄さ
んがどうしても私と一緒に居たいと言っのなら考えますが…………。と
にかく。詳しくは”アルカナクエスト情報交換スレ”を見ておいて
下さい。いくら兄さんでもそこを見れば分かりますと思いますので、そ
れでは』

啞然としたまま妹との通話を終わる。

いったい何が起きている。
とりあえずアルカナ掲示板を見るしかないが・・・やばい。嫌な
予感しかない。

アルカナクエスト情報交換スレ 108

1：アカシック

アルカナクエスト情報を交換するスレッドです。
皆で積極的に情報交換し、この状況を打開しましょう！

109：ボルザック

ローレライは危なくなるとブルーホールに逃げるだろ
どうやって逃さずに倒したんだよ？誰か知ってる奴いねえ
の？

110：八宝菜

こっそり上げてた泳ぎカードどうすりゃいいんだよ

111：Zeeta

逃げたローレライを追いかけて海で倒したらしいぞ

112：ダムド

は？嘘だろ？ギルメンに泳ぎを結構上げさせたけど深すぎ
て溺死したぞ

113: ボルザック
<<111 ソースは？

114: Zeeta
<<113

ローレライたんのおっぱいを遠くから愛でるスレ 3 の

目撃情報

115: 八宝菜
なんだそのスレwww

116: Mailpro
>俺達のローレライたんを倒したのは泳ぐ侍だ！
これ誰？

117: 巴御前
うち一人だけ思い浮かんだw

118: ピョートル
偶然だな。俺もだ

119: レモン一刻
泳ぐ侍って半漁ZIN以外にいろの？

120: 咲夜
逆に半漁ZIN以外に誰がいるんだよwww

121: LiliLi
半漁ZINって誰？

122：ピョートル

過去ログ倉庫でモブ情報交換スレ 2 見てこい

123：ハットリ海峡

つまりどういうことだってばよ！

124：狂人ジャグ

半漁ZINが ローレイたんを 海でやった

125：ラブピー

魔物プレイですね。分かります。

126：見抜きの魔眼

ローレイたんが海で魔物にやられるとか・・・ふう。

127：蛙風船

おいばかやめろwww

128：独眼竜

半漁ZINのほうが魔物扱いでワロタwww

129：ハットリ海峡

すげえな半漁ZIN！ローレイ逝かせるほどのテクニシ

ヤンだっ たんだな！

130：アフロ教祖

くつそ！半漁ZINくつそ！

131：タルタル

半漁ZINさんすごいなー あこがれちゃうなー かつこ
いいたるゝ^^

132:United
なにこの流れw

いいぞ。もつとやれ

133:バッファロー
もしかして半漁ZINって、最近トカゲ草原で目立ってる
一刀流侍？

134:PIX
俺ら『南の塔』箆ってるからフィールドしらねー

135:バッファロー
<<134
攻略組乙。

ここ数日、異様に上手い一刀流侍&薙刀巫女ペアがトカゲ
狩りしてるんだよ

136:Malipro
<<114の目撃情報に
>しかも奴は薙刀巫女たんとペアだった。絶対に許せねえ！
って書いてるけど？

137:バッファロー
たぶんそれだと思うw

138：巴御前

うち実際に会ったことあるけど、半漁ZINは一刀流やで

139：咲夜

会ったことあるのかよwwww

てか半漁ZINって一刀流だったのかwwww

140：見抜きの魔眼

半漁ZINの一刀流でローレライたんは突かれまくったわけか・・・ふう。

141：石榴法師

だからやめろwwww

142：スクール

下ネタですね。分かります。

143：オレノ・コカン・ガットウーゾ

半漁ZINがローレライとギシアンしてるというのに、南の塔のお前らときたら・・・

144：PIX

ざけんなwwww

・・・俺はそつと掲示板を閉じた。
さてと寝るか。特に何も無かったしな。きつと何かの間違いだ。

翌朝。

「聞いてないわよ！半漁ZINってどういうことよ！？」

「いや聞かれなかったし」

「あなたは掲示板で何て呼ばれてますか？なんて聞くわけないでしょう！この馬鹿！」

「仕方ないだろう。俺だって好きで半漁人呼ばわりされてねえよ」

「うっさい！あんたのせいでね！あんたのせいで……私は『半漁神の巫女』って渾名つけられたのよ……どうしてくれんのよ！」

「うまいこと言っな」

「やかましい！」

さあ、今日も賑やかな一日になりそうだ。

サメガリオトコ ナギナタオンナ
鯨狩男と薙刀女

【マスター】ZIN：侍Lv44

一刀流Lv36 居合いLv33 無鬪流柔術Lv37 ステ

ツブLv44 ジャンプLv15 泳ぎLv60

【装備】

武器：長鉞（スティール・桜吹雪）
頭：魅惑殺しのイヤーカーフス
腕：手甲（黒）
胴：鯉口シャツ（白）
腰：武者袴（紺）
足：草鞋
外着：羽織（水色）
内着：足袋、下着
ボクサーパンツ
アクセ：ローレライの感涙（指輪）
（外着：水の魔力系・月見）
（他防具：鉄の魔力系・月見）
（防具ボーナス：DEXUP*6）

【サブマスター】H a z e：巫女Lv41

神道流薙刀術Lv34 演舞Lv36 棒術防御Lv27 祈
禱Lv36 詠唱術Lv34 魔力補助

【装備】

武器：薙刀（スティール・汎用）
頭：魅惑殺しのイヤーカーフス
腕：手甲（黒）
胴：白衣
腰：緋袴
足：草鞋
外着：羽織千早
内着：半襦袢、足袋、下着
スポーツタイフ
アクセ：なし
（ALL防具：鋼の魔力系・月見）
（防具ボーナス：STRUP*6、DEXUP*6）

- 13 - (後書き)

以上で第3章は終了となります。

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます。

第3章の詳細なあとがきは長くなりそうなので活動報告(10/10)に載せる予定です。

そして第4章については、この第3章と同様に充電期間を頂きます。年内を目標に頑張りたいと思いますので、今後ともよろしく願います。

最後に、今回もたくさんの”感想・お気に入り・評価・メール”ありがとうございます。

さらに先日は、素敵なイラストを描いて下さった方までいて凄く励みになりました。

今後と同じようなお声を頂けるよう頑張っていきたいと思います。

/ 2011・10・10 十三

- - -

ギルド名アンケートにご協力ありがとうございました。

3章12話・13話を若干改訂しました。

またギルド名も上記に修正しました。

/ 2011・10・11 十三(114'920)

- 1 - (前書き)

第4章開始となります。どうぞよろしくお願いします。

『この風、この肌触りこそ^{さんばし}棧橋よ』

昔のエライ人はそんな名言を残したらしい。

9月16日 朝10時頃 帝都アスガルド 棧橋

・・・そう。俺はいま棧橋にいる。

腰に巻かれた剣帯には長銃と皮袋だけで、もちろんパンイチだ。

棧橋の先で、そんな出で立ちのまま仁王立ちになり、両腕をしっ
かりと組みながら大海原を眺める。

俺の灰髪が潮風に揺られ、日焼けすることのない白い肌が輝く。

我ながら見事な男っぷり。

もしもこれが現実世界であつたならば、俺のフェロモンに誘われ
た女性達とひと夏の思い出を量産していたに違いない。

きつと昔のエライ人も驚愕したのであろう。

『気に入ったぞ、小僧。それだけはつきりと服を脱ぐとはな』と。

今朝、ようやく”半漁神の巫女”という現実を受け入れたハゼが

『ミスリルのこともあるし、私は交易所NPCや露天広場の動向を調べておきたいの。だからあんたは今日1日自由にしていいわちゃんと夜には帰ってきなさいよ？ 明日以降のことを話し合おうんだから。それと……はい、これお小遣い。あんまり無駄遣いしちゃ駄目だからね？ いい？ 分かった？』

などと言い出したので、今日は別行動だ。

ちなみにルイージの酒場で別れたわけだが、ハゼは最後まで心配そうだった。

まるで初めてのお使いに行く幼稚園児を見送るかのようだった。いったい俺のどこに不安があるというのか？ 酷い話だ。

まあいい……それよりもだ。

最近ハゼとずっと一緒だったため、1人で過ごすのは本当に久しぶりだ。

こうなるとやる事は1つしかない 海だ！

だから俺は栈橋でパンイチになっているわけで、今日は泳ぎまくるというわけだ。

すでに泳ぐコースも決まっている。

8月31日の予言の日以降、アルカナ大陸の北側へ渡れるようになった。

ということは、それ以前は透明な何かに阻まれて泳げなかったラグロア川も、今なら泳げるということだ。

よって泳ぐコースは帝都の棧橋から海岸沿いを北上し、ラグロア川の河口から上流へ、つまり北東にラグロア川を遡上^{そじょう}してラグロア湖を目指すコースだ。

本当ならば赤禪で泳ぎたかったのだが、個別回線で見えさんに確認してみたところ下着からのカスタマイズで赤禪を作るのは厳しいらしい。

『ブリーフ、トランクス、ボクサー、ビキニ……色んなタイプの男性用下着をカスタマイズしてみたんだけど全部失敗。ごめんね。下着からじゃ無理みたいなの。何でもいいから禪っぽい形の布装備とかないかしら？』

そんな風に言っていた。

残念ながら赤禪への道のりは……深く、遠く、険しい道のりのようだ。

9月16日 午前中 内海

ドルフィンキックとステップを交えながら海中を突き進む。

この美しい海を上空から見下ろせば、澄みきった青い海を泳ぐイルカのような縦長の黒いシルエットが見えただろう。

頭上で手を交差させて二の腕で耳の上あたりを挟み込む。

両足を揃えて全身で泳ぐ。指先からつま先までを優雅に波打たせながら滑らかに突き進んでいく。

さらには、時折ステップで海中を蹴りつけて加速する。

まるで放たれた矢のように海岸線を北上していった。

現実世界では絶対に不可能な泳ぎだ。本当にたまらなくなる。気持ちがいい。

そして泳ぎ続ける俺の視界の端で、たくさんの魚影や美しいサンゴ礁が通り過ぎていく。

なんとなく体をくるりと返して海中から空を見上げてみた。

日の光を反射してキラキラと輝く海面が見える。何とも言えない神秘的な景色に浸る。

光揺らめく海面を見ながら穏やかな気分には浸っていると、ついデスゲームのことなど忘れてしまいたくなった。

俺はその本能に逆らわず、だんだんと無駄な思考も捨て去っていき、最後は無心のままにクルクルとドリルのように回転しながら泳ぎ続けた……。

……やべえ。回りすぎて気分が悪い。

現実なら海中ゲロしてたな。これは駄目だ。普通に泳ごう。

再び、魚影やサンゴ礁へと視線を戻して泳ぎ続ける。

ちなみにこの仮想世界の魚達は、泳ぐ速度を現実世界よりも遅く設定されている。

泳ぎ続けなければ死んでしまうマグロも、この海ではゆっくりと漂っていた。

また姿形もいろいろとデフォルメされており、泳ぐ”シャケの切り身”などはその代表格だ。

そんな美しくも不思議な景色を眺めているうちに、ラグロア川と内海の境目に到達した。

川幅は800mはあるだろうか？ ラグロア川の巨大な河口へと視線を向けると、何やら多くの魚影がラグロア川の河口へと入っていくのが見えた。・・・なんだあれ？

頭に浮かんだ疑問の答えを得ようと、平泳ぎでゆっくりと河口に近づいてみる。

どうやら河口へと入っていく魚影は鮭シヤケのようだ。

サンゴ礁の影から湧き出てくる鮭達が、一心不乱にラグロア川の河口から上流へと遡そじょう上していた。

俺も、遡上する鮭達に混ざるように河口からラグロア川へと入っていく

と、いきなり景色が一変した。

砂とサンゴ礁の景色から、丸い石と苔こけの景色へ

南国の海から、日本の清流へ

そんな一変した景色に戸惑う俺を無視するかのように、鮭達がラグロア川を遡上していく。

・・・何故だか負けた気分になる。ちくしょう。鮭ごときに負けてらんねえ。

俺は遡上する鮭達と競うかのように、ラグロア川の上流を目指した。

ラグロア川は広大だ。

河口付近の川幅は約800mあり、水深は中央付近で4、5mもある。

そして、その広大な川を鮭達と泳ぎ続けていると、激しくぶつかり合う水音が響いてきた。

凄まじい轟音だ。腹に響く。思わず立ち泳ぎになり、川面かわもから顔を出して前方を確認してみる。 おお、滝だ・・・でけえ・・・。

ラグロア川の川幅は上流に近づくほど狭くなっていく。

そして目の前に出現した巨大な滝は、川幅600mで高さ3、4m前後という横長に巨大な滝だった。

そんな巨大な滝と川面が激しくぶつかり合う震動で、俺の五臓六腑も震えている。

さらに滝つぼから発生した真っ白な靄^{もや}があたりに漂い、荘厳な雰囲気^{かも}を醸^{かも}しだしていた。

ふと、何気なしに滝つぼ付近を注視すると。

鮭達が滝つぼに深く潜り　その反動を利用して思いきり跳ね飛んでいた。

あちらこちらで同じような光景が繰り返されており、鮭達の不屈さが伝わってくる。

何度も何度も繰り返し挑戦し、滝を登ろうとしている。必死だ、すんげー必死だ。

そついや鮭どもは何故上流に遡上するんだっけか？　・・・よく思い出せ。

・・・そうだ。・・・産卵だ。上流で産卵するために鮭どもは必死になるのだ。

つまりは雄と雌が、きゃっきゃうふふ、ギシギシアンアンするためだ。

ふと　俺の脇を通り過ぎていく鮭達と目が合う。

『俺、これから上流で童貞捨てるんだ』

『え？ おまえ童貞？』

『くやしいのう、くやしいのう』

e t c . e t c .

改めて必死な鮭どもを見てみると、そんな風に見えてくる。

なんか知らんが許せねえ。こいつら絶対許せねえ。

被害妄想だとか、嫉妬だとか、そんなチャチなもんじゃ断じてねえ。

鮭は魚類だとかも関係ねえ。こいつは男のプライドをかけた勝負だ。こんな下心満載の鮭どもに、泳ぎだけは負けるわけにいかねえ・・・。

エロ鮭どものせいで、俺のピュアな心がそんな闘争心に染まる。全力でいく。

まずは川面から水中へと潜る。次にステップを使いながらひたすら加速。　目指すは滝つぼだ。

滝つぼに近づいてくるにつれて流れが激しくなってくる。

また滝つぼ付近の水深は6 m以上ありそうだ。川底には大小様々な丸い石ころが転がっている。そんな川底を這うように泳ぎ、さらに加速していく。

やがて視界が滝つぼの水泡でいっぱいになり、滝の轟音が頭上から聞こえてきた刹那　俺はステップで川底を思いきり蹴り込み、川面へと一気に加速した。ありえない加速のせいで体が引き千切れそうだ。

その弾丸のような加速のまま、川面から俺の上半身が跳び出す。滝がばちばちと激しくぶつかってくる最中、体は熱く。頭は冷静に。思考は平行に。瞬時に俺は膝を曲げ・・・ジャンプで川面を蹴り飛んだ。

凄まじい勢いで俺の体が滝を引き裂いていく。

そして3、4 m前後あった滝を切り裂いても俺の勢いは衰えず、そのまま空へと飛び上がった。滝の上の川面もみるみるうちに遠ざかっていき、最終的に15 m以上も飛び上がってしまった。

地上であれば、ジャンプカードは2 m前後しか飛び上がれない。ステップや駆け足で助走をつけたとしても3 m近く飛び上がるのがやっとだ。

カードレベルが上がっても飛び上がる高さはほとんど伸びず、『消費STが減り、ジャンプする際の予備動作が軽くなった』ぐらいにしか実感が湧かなかったのだが・・・。

水中であれば、泳ぎとステップを使って加速しまくることでエライことになるようだ。

水面ジャンプとでも呼ぶべきだろうか？

というか、なにこの高さ。飛び上がりすぎだろう！？

そう焦った直後、俺の体が仮想の重力に引きずられて放物線を描くように落下しはじめた。

いくら川面とはいえ、この高さから変な体勢のまま打ちつけられ

れば間違いなく落下ダメージを食らうだろう。

俺は僅かに残る勢いを利用して、頭から 指先から飛び込めるように咄嗟に姿勢を入れ替えて、迫りくる川面へと飛び込んだ。

ッ。

泳ぎカードのレベルが高いせいだろうか？

まるで飛び込みの五輪選手かのように綺麗に飛び込めた。おかげで水しぶきがほとんど上がらず、落下ダメージも食らわなかった。

そういえば先日 of ローレイ討伐戦では、何十メートルもある岬から飛び込んだわけだが、あの時は俺だけが落下ダメージを食らい、俺よりも速く泳げたローレイは落下ダメージを食らわなかった。もしかすると水面への落下ダメージは、泳ぎカードが関係しているのかもしれない。

そんな事を考えながらも、高さ15m以上から飛び込んだ俺が、川底を舐めるようにぐるりと泳いで回る。そうして上手く勢いを殺しながら川面へと顔を出した。

・・・やべえ。全力すぎた。

まさかこんなにも飛び上がるとは、滝を越えるだけでよかったのに。

にしても、なにこの水面ジャンプ？ さすがにビビった。

とりあえず頭を振って気持ちを入れ替える。
浮き足立った心を抑えようと周辺を見回すことにした。

今まさに飛び越えた滝の方には、鮭どもが必死に跳び上がってくるのが見える。

逆に上流側へと視線を返すと、そんな鮭どもをあざ笑うかのような無数の滝が待ち構えているのが見えた。

上流はまだ遙か先だというのに、景色はすでに強大な峡谷と化していた。

その兩岸には7、8mはある高い岩壁が続いており、極稀に川へ下りてこれそうな低く凹んだ岩壁がある程度だ。

さらに岩壁の上を見上げてみる。そこは北岸と南岸で大きく異なっていた。

北岸はごつごつとした山岳地帯で、南岸は鬱蒼とした森林地帯だ。山岳地帯はラグロア火山で、森林地帯は亜人の森だろう。

ちなみにラグロア川の遙か下流には、小さくなってしまった帝都の城壁と橋。その対岸には王家の墓と竜の草原が見てとれた。

そして・・・そんな仮想世界の自然風景に圧倒されている俺が、川面にぽつんと浮かんでいる。

あたりには整然とした山特有の静けさが広がっており、滝の轟音がどこか遠くから聞こえてくるような錯覚を与えていた。

さてと。 鮭どもに負けないように、俺も上流を目指すか。

俺は1つ大きな溜め息をついてから、泳ぐのを再開したのだった。

最大で約800mもの川幅をもつラグロア川は、上流に進むにしたがつて川幅をじよじよに狭めていく。

そして狭まった分だけ、その流れは激しさを増す。

まるで『ラグロア山の麓にあるラグロア湖には行かせない』と言わんばかりの激流と化していく。

そういえばアルカナ掲示板では

『ラグロア川を遡上してラグロア湖に向かうのは、どう考えても不可能』

『NPC情報によると竜の草原の先にラグロア山道があるらしい』

『ラグロア山道には三叉路があり、ラグロア火山とラグロア湖に繋がっているらしい』

などと言われていたはずだ。

こうして実際に泳いでみるとよく分かる。まず間違はなくラグロア川を泳いでラグロア湖に行くのは正規ルートじゃない。

まあ、どうでもいいんだけどな。

とにかく俺は上流を目指す。鮭ごときに負けてらんねえ。これは男のプライドを賭けた勝負だ。

だが、ただ単に鮭と泳ぐだけってのも面白くない。

これが競泳水着のお姉さんと一緒に泳ぐとかなら話は別なんだが・
・・。

そうだな。せっかくだ。ついでに水面ジャンプの加減も調整できるように練習するか？

さっきはどう考えても飛びすぎだったし、どうせこの先にも腐るほど滝があるだろうしな・・・うむ、そうしよう。

なんだか鮫狩りや海籠りをしていた頃を思い出す。

あの頃はあの頃で実に楽しかった。

・・・やべえな。こういう高揚感は久しぶりだ。

かなり楽しくなってきた。よし、絶対に水面ジャンプをモノにしてやろう！

そうして鮭どもと一緒に上流を目指し、いくつかの滝を越えた頃、
兩岸の岩壁が低くなっている滝に出くわした。

そこは川幅が約300mほどの地点だ。

これまでと同じような横長い滝があり、ちょうど滝の上の岩壁が
低くなっているところだった。

また飛び石のような丸くて大きな岩が川面から顔を覗かせている。
その岩を上手く使えば兩岸を行き来できそうな場所だった。

そして、恐らくその低い岩壁を下りてきたのだろう。

遠目なのではつきりとは見えないが、何やら岩の上で漁をしているユーザーが滝の上に1人いる。

どうやら鮭の生け捕りが目的のようだ。

確かイクラは高級食材アイテムだったはずだ。

『イクラは鮭を網で生け捕りにし、料理人がさばいてようやく手に入る』

などと聞いたことがある。

残念ながら俺には『捕獲』カードが無いので鮭の生け捕りは不可能だ。

泳いで鮭を狩ることはできるが、それではイクラが手に入らない。ドロップしないのだ。

ちなみに釣り糸を垂らしても鮭はなかなか食いついてこないらしい。

きつと産卵のことで頭がいっぱいなんだろう。食欲よりも性欲とか・・・けしからん。本当に鮭はエロイ奴だ。とにかくそんなエロ鮭の生け捕りには『捕獲』カードが必須と言われている。

だが『捕獲』カードは、馬を捕獲したり、魚を生け捕りにしたり、様々なゴールド稼ぎに使えるためか非常に高額だ。

俺もかなり欲しいカードなのだが、恐らく一生縁の無いカードで終わりそうだ。

なぜなら今一番必要としているのは長蛇のアップグレ費用だからだ。もしも『捕獲』カードを買うゴールドがあるならば、間違いなくアップグレ費用に回すだろう。というかハゼがそうする。

ローレライから得たミスリルインゴット。

俺達2人の武器をミスリル製にする場合、

ハゼの薙刀は量産品なのでミスリルインゴットで作ってもらえば、それで終わる。

しかし俺の長鉈はカスタマイズ品だ。この長鉈をミスリル製にするには、”ステイル>シルバー>プラチナ>ダイヤ>ウーツ鋼>ダマスカス鋼>ミスリル”の順番で合計6回のアップグレードが必要となる。

そんなわけでアップグレード費用がシャレにならない。

特にウーツ鋼とダマスカス鋼の値段がやばい。

ドワーフ鉱山から『採掘』カードで獲得できるのはダイヤまでだ。ウーツ鋼とダマスカス鋼は合金レシピが判明しておらず、今のところ”南砂漠の塔”のレアドロップでしか手に入らないという。

またアルカナ掲示板には”錬金術士のための合金情報交換スレ”というスレッドがあるのだが、

『もしもウーツ鋼やダマスカス鋼の合金レシピを見つけても、それらを秘匿できれば一攫千金の夢が実現する』などと言われているため、錬金術士同士の情報交換はあまり上手くいっていないようだ。

そんなわけで俺の長鉈をミスリル製にするには莫大なゴールドが必要なのでは・・・。

ハゼが露天広場や交易NPCを調べておきたいと言いだしたのも、俺の長鉈が一因となっているはずだ。ほんとハゼには世話になってばかりいる。

だからこそ少しでも手伝いたいと思ったのだが

『着いていく』俺がハゼにそう伝えた時、

『ジンが1人で前衛をこなしてくれるから2人で戦えるの。だからせめて戦闘以外のことは私にやらせて？ おねがい。いいでしょ？』ハゼはちよつと困ったような顔で返答してきた。

相変わらず義理堅くて面倒見のいいやつだ。そもそも借りを作ってるのは俺のほうだろうに……。

とにかく。ハゼが俺を信頼してくれるように、俺もハゼを信頼している。

だから今日は徹底的に羽を伸ばす。ハゼに全てを任せて俺は泳ぎまくる。

遠慮していたら、それこそハゼが嫌がるだろう。こういう日は『今日1日、思い切り遊んだ』と報告できるように全力で楽しむのが礼儀のはずだ。

そんな回想に浸りながら川面から顔だけをだし、流されないように気をつけつつ遠目から滝の上にいるユーザーを眺めていると……。北岸の岩壁から下りてくる真っ赤な巨体が見えた。

あれは確か ラグロア・ファイアグリズリー（通称：赤毛熊）
モブ情報交換スレで報告されていた特徴とよく似ている。間違いないだろう。

遠目からでもよく目立つ燃え上がるような赤毛。

その巨体は2mを越えている。戦闘力はハイオークを優に上回る。
『赤毛熊2体と戦うぐらいならオークヒーローの方がマシ』そう
言われるほどのモブだ。

本来はラグロア火山に出没するモブだと言われているが、ラグロ
ア川で鮭漁をするユーザーを見つけると容赦なく襲ってくるらしい。

そんな赤毛熊が、滝の上の飛び石を渡って鮭漁をしているユーザ
ーへと近づいていく。

しかしながらその当人は鮭漁に夢中で気付いていないようだ。南
岸の亜人の森に逃げ込めば、赤毛熊は追ってこないらしいが・・・
まずいな、あれは。

料理人専用日記スレッド 15

1：アカシック

ここは料理人ユーザー専用の日記スレッドです。

日記スレッドのため、レスは禁止です。

日々起きた個人的なイベントを適当に書き連ねて下さい。

769：月影十夜

いつもうちの屋台で買ってくれる人がある。

ぶつちゃけると、その人に惚れてしまった。
誰か俺の背中を押してくれ・・・

770：ミスター鰻っ子

念願のダマスカス鋼製・出刃包丁を手に入れたぞー！

771：うまい象・コンソメ味

あ、ありのまま今日起ったことを話すぜ！

ラグロア川で鮭漁をしていたら、

目の前に赤毛熊が立っていたんだ。

俺は死を覚悟した・・・だが、その時だった。

鮭と一緒にヤツが現れたのは・・・

ほぼ全裸で変な刀を腰に差したヤツが、

いきなり滝から飛び出してきて、

赤毛熊に絡みつき、絞め殺したんだ。

そして何事も無かったかのように、

ヤツは鮭と一緒に上流へと飛び跳ねていった。

何を言っているのかわからねーと思うが、

俺も何が起きたのか分からなかった・・・

頭がどうにかなりそうだ・・・

魚類だとか人類だとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・

772:TomYumGoong

専用の作業部屋をレンタルする資金がようやく貯まった。
次の目標は店舗だ。がんばろう！

赤毛熊に襲われそうなユーザーを華麗に助けた俺は、泳ぎを止めることなく上流を目指していた。

そして上流に近づけば近づくほど、赤毛熊と遭遇する機会も増えてきていた。

どうやら赤毛熊も鮭を獲るためにラグロア川へと下りてくるようだ。色々ところで鮭を啜えている赤毛熊を見かける。

赤毛熊に狩られる鮭。

赤毛熊を狩る俺。

もはや俺と鮭、どちらが格上なのかは明白だった。
所詮、鮭など下心満載の下半身直結野郎なのだ。
清廉潔白な俺に敵うはずがない。

きっと昔のエライ人ならば

『鮭とは違ふのだよ、鮭とは!』

こゝろ叫んだであらう。間違いない。

そうして鮭との男の勝負を制した俺は、最後に高さ10m以上の大きな滝を水面ジャンプで飛び越えて、ついにラグロア湖へと到達していた。

ラグロア湖は静寂に包まれていた。

湖の北側にはラグロア火山が聳え立ち、その周辺は赤茶けた大地に囲まれている。

そして、ラグロア湖には生命の息吹がまったく無かった。

モブどころか魚1匹見当たらない。不気味な静寂に包まれている。

この雰囲気は知っている。つい先日味わったばかりだ。

完全に同じだ。そう・・・ローレライが逃げ込んだブルーホールの雰囲気と。

背中がぞくぞくしてくる。

『やばい、ここは本当にやばい』俺の本能が狂ったように警告を発していた。

ラグロア湖の隅に浮かびながら落ち着くように何度も深呼吸を繰り返して、冷静にメリットとデメリットを計算する。

今なら死ぬる。まだデスゲームは始まっていない。2日ほど寝込むだけで済む。

”知恵のかけら”を失うことも怖くはない。

むしろ、いつか”この湖に住まうモノ”と戦う日がくるのならば、”知恵のかけら”を失ってでもその強さを確かめておくべきだ。デスゲームが始まる前に……。恐らくハゼもそう考えるだろう。

よし。

気持ちを奮い立たせるように気合を入れ、俺はラグロア湖の底へとダイブした。

ラグロア湖はすり鉢状の湖だった。

いや、むしろ傾斜が凄まじくきついので、巨大なタンブラーのような湖と言った方が適当かもしれない。

広さは野球場5、6個分といったところだが、水深が半端ない。とにかく深い。

ローレライのブルーホールと同様に岩壁でできており、深すぎて湖底まで日が射し込まない。そのため岩壁がどこまで続いているのかすら分からない状況だった。

俺は途中からランタンを腰にぶら下げて、底へ底へと泳ぎ続けている。

ローレライを追いかけた時はステップを交えながら2、30分ほど潜ったが、今回はステップを使わずに泳ぎだけで潜り続けていた。

そして潜り始めて20分ほど経過した頃、暗闇に包まれていた俺の視界に小さくて淡い光が入ってきた。湖底に近づくにつれて塵ちりのように小さかった淡い光が、だんだんと大きくなっていく。

あれは・・・？

だんだんと大きくなる光の中に”何か”がいる。

その”何か”は青磁色だ。淡い光はその”何か”が発する光だ。

そして、泳ぎを止めない俺の瞳に映る”何か”がより明確になっていき　　龍！

”何か”は青磁に輝く水龍だった。

その長い体をとぐろにして湖底に横たわっており、鱗の一枚一枚が陶磁器のように青く輝いている。顔付きは見えない。とぐろの中心に顔を埋めているからだ。

そのとぐろの中心にある水龍の頭部からは、美しい白角が2本突き出ていた。

また髭ひげも2本あり、とぐろの中心でゆらゆらと揺れている。その色は背中たてがみの鬣うげと同じく群青色だった。

水龍の優美な姿に、恐怖よりも綺麗だと思っ心が先行する。いつしか俺は泳ぎを止めて見惚れてしまっていた。目を離せなくなっていた。

ゆっくり、ゆっくりと・・・自分の体が湖底へと落ちていく

事すら忘れてしまっていた。

人の子よ。何ゆえ我が域を侵す。答えよ

厳かな水龍おじでの声が湖底に響き渡った。我を忘れていた俺の体がびくりと震える。

そういえば・・・”ローレライの感涙”は装備したままだが、”魅惑殺しのイヤーカーフス”は外していたのだった。『指輪はともかく耳カフスとか、なんか男らしく無くな？』そんな気がしたからなのだが・・・不味ったな。

おかげで魅了チャームのステータス異常を食らっていたようだ。とにかく水龍が近い、すんげー近い。というかこの距離はやばい。

俺のすぐ下、30m程先に水龍がいる。

そして俺が魅了チャームされている間に、水龍はとぐろの渦に埋めていた顔を俺の方へともたげていた。

美しき東洋龍。その姿に再び我を忘れかけてしまう。本当に綺麗だ。

その美声。その綺麗な顔付き。雌であるのは明らかだ・・・美しい・・・。

・・・やべえ!?

俺は慌ててアイテムインベントリーを開き、魅惑殺しのイヤーカーフス^{カフス}を装備した。

ずきんと頭に痛みが走る。上手く魅了^{チャーム}を抵抗^{レジスト}できたようだ。まじシヤレになんねえ・・・、今後はもう外さないようにしよう。

ことわり よし
理なる由を答えよ

正気を取り戻した俺は、尋ねを繰り返す水龍を改めて眺めた。長大な体だ。俗っぽく例えるならば、ちょうど16両編成の新幹線程度の大きさと言ったところだろうか・・・。

答えよ！ 人の子よ！

ジロジロと眺めていた俺を叱りつけるかのように、水龍の美声が大きく響き渡った。

ここに来てしまった理由を述べれば良いのだろうか？
だがいったい何と答えればいいのだろうか？

『鮭と男の勝負しました』

『鮭のせいです』

鮭、サケ、シヤケ。

そついやサケとシヤケってどっちが正しい呼び名なんだろう？

答えを出せないまま、しばらく悩んでいると・・・。

ことわり
理を持たぬ人の子よ。断り無き人の子よ。その過ちを悔いる
がよい！

別のことを考え始めてしまった俺を見限るように、水龍がそう吐き捨てた。

絶望的な恐怖で俺の体がぞくりと震える。

どうでもいいが、DMだったらきつと違う意味でゾクゾクしてい
ただろう。

ほんとどうでもいいな・・・よし、逃げよう。

俺はじつと見つめ合っていた水龍から視線を外し、ステップで水中を蹴り上げて頭上へと跳ね上がった。そしてステップを繰り返しながら、とにかく湖面を目指して全力で泳いだ。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

直後、水龍の咆哮が上がる。

俺はその咆哮をもろに受けてしまい、数瞬だけすべての動きが停止してしまった。

スタン
気絶！？

戦慄した体からステップで練り上げた勢いが失われていく。不味い。これでは逃げ切れない。

そして 『絶対に振り返ってはいけない』 そう分かっていたはずのに、思わず水龍の方へと、湖底の方へと、俺は振り返ってしまった。

そこにはとぐろを巻いたまま口を大きく開き、俺へと狙いを定めている水龍がいた。

直感する。ブレスがくる。無理だ。死ぬ。

その時だった。俺の頭に儚くも美しい声が鳴り響いたのは。

愛しい人。どうかわらわの名を呼びたもう

ローレライ!? そう思った刹那、頭の中にシステムボイスが鳴り響く。

『Named...ローレライ...complete.

あなたと”ローレライの感涙”との契約が完了しました。

ローレライの感涙は呪われたアイテムです。あなたは呪われませんでした。

解説されるまでこのアイテムは外せません。

以後、”ローレライのヒメゴ”はあなたの契約召喚モブとなります。』

え？ 呪い？ 呪われましたってどういうこと？

混乱する俺をよそに、事態はさらに加速していく。

まず装備していた指輪 ”ローレライの感涙” からぬるりと、

青いゼリーのように液化化したソレが飛び出した。

続いてその青いソレが俺の目の前でグニャグニャと動き、人型を為す。

そして最後に 青いソレに人の色が灯った。

【ローレライの感涙】

『悲哀の美しき女は。最後にその願いを叶えた。

・・・それが偽りであつたとしても・・・

朽ち果てし赤子は。その感涙となりて想ひを継ぐ』

LEGENDARY ITEM

取引不可／破棄可能

防具アイテム（指輪／男性専用）

呪われていました

特殊シンクロシティアイテム：設定済み

（モブ名：ローレライのヒメゴ、Named：ローレライ）

海よりも深く美しき宝玉は、その恩を決して忘れない。

そなたが宝玉に願うとき・・・

深き水に愛されし稚児^{ちい}は、その身をもって助けとなるであろう。

ローレイの名を受け継いだソレは、俺の目の前で”幼い少女”をかたどった。

背を向けているのではつきりとは分らないが、背丈は俺の脇腹程度までしか無いので、恐らく10歳程度だろう。白金糸のような綺麗な髪をしている。

しかしながら細かく波打っていたローレイの髪質とは異なり、少女の髪にはクセが無く、真っ直ぐ腰まで伸びていた。

逆に服装は、ローレイが着ていたのと同じような薄手の青いワンピースだった。丈は少女の脛^{すね}あたり。細い肩紐が華奢な肩にかかっており、肩甲骨を隠すように背中側の布地と結ばれている。きつと正面から見れば、鎖骨から肩までが剥きだしになっているだろう。薄着すぎる……。

不意に、俺に背を向けるように水龍と対峙していた少女が、首だけを回して、その横顔を俺へと向けてきた。深く、澄みきったエメラルドの瞳だった。

現実離れた美しい顔立ちをしている。

冷めた表情と白磁のように白い肌が相まって美しい彫刻のようだった。

だが、彫刻と見紛うことは無さそうだ。

まるで幼さを否定するかのような大人びた雰囲気^{かも}が漂っているからだ。幼さと妖しさが混在し、それが妙な人間味を醸^{かも}しだしていた。危うげなアンバランスを持った少女。その妖艶さこそがローレイの名残りなのかもしれない。

はつきり言つて、まったく展開についていけない。
その少女を見てまず思ったことは、『開発スタッフはロリコンだ
っただな……』という的外れな感想だった。

そして水龍がそんな隙を許すはずもなく、
その大きな口から魚雷のような水塊ウォーター・プレスを射出した。

正面へと、水龍の方へと、少女がその横顔を戻す。
それにつられて白金系がふわりと舞った。

俺がその光景に目を奪われていると、
少女はその細い両腕を真正面へと掲げた。

ドンツウォーター・プレス という鈍い音が響き、湖底に衝撃が走る。
水龍の水塊が、俺の目の前に漂う少女へと着弾した。

しかし少女は何事も無かったかのように、か細い両腕で水塊ウォーター・プレスを防
いでいた。

割れるかのように、傘が開くかのように、少女を中心にして俺達
の後方へと水塊が霧散していく。

すげえ・・・完全に受け流している。

そう思った直後、湖底に水龍の美声が響き渡った。

水のヒメゴか。水に縁^{えにし}ある人の子か

かすかに驚きを含んだその美声を聞いて、俺はようやく逃げねばならない事を思い出す。

水龍の水塊^{ウォーター・プレス}を防ぎきった少女は、ただゆっくりと両腕を下ろしていた。

俺はそんな少女の腰に背後から右手を回して、小脇に抱きかかえる。

そして再びステップを交えながら頭上の湖面を目指して加速した。

状況整理は後でいい。今はとにかく逃げねばならない。

俺はただそれだけを考えて泳ぎ続けた。

そして最後に、加速していく俺の背中へ水龍が穏やかな美声を投げかけてきた。

去^いね。今はまだその刻では無い

水の秘め子に愛されし、人の子よ

水の姫子に愛されし、人の子よ

汝が『世界』を求めるならば

汝が水を求めるならば

いずれ、その刻が訪れようぞ

我、『女帝』なり

ローレライのおかげで水龍から逃げきれた俺は、
ラグロア湖から滝を1つ下りて、近くの岩場で休憩をとることに
した。

そして。

『ハゼ、今大丈夫か？』

『大丈夫だけど？』

『ちよっと不味いことになった。悪いんだが帝都西門近くの栈橋

で会えないか？』

『棧橋？　っていうか何したのよ？　怒らないから言いなさい』

『とにかく会えばすぐ分かる。口で説明するのが面倒だ。たぶん20時頃には棧橋に着けるから、マジ頼むわ』

『ちよつと！？　20時頃って4時間後じゃない。あんたいったいどこにいるのよ！？』

『それも含めて後で話す。じゃあ頼んだからな。俺は今から全力で帰る。それから子供用の外套がითも一枚買っておいてくれ。じゃあな』

『あ、こら！　ちよつと待ちな　』

ハゼとの個別回線を一方的に切断する。

相談や報告は合流してからでいいだろう。とにかくやつかいな事になった。

そのやつかい事の原因を探すと、近くの岩に腰かけていた。

白磁のような足先で川面をばちゃばちゃと叩いて遊ぶ少女　口

ーレライだ。

「ローレライ」

そう名前を呼んでやると、川面を叩く白い足先を眺めていた少女がこちらへと視線を向けてきた。

軽く首をかしげている。相変わらず冷めた顔をしていて無表情で無言だが、『なに？』と問いかけてきているのは不思議とよく分かった。

「頼むからそろそろ指輪に戻ってくれよ」

俺がそう言つと、少しだけ眉間にしわを寄せた少女がぷいっと横を向いてしまう。

ちくしょう。全然言つこと聞いてくれねえぞ。どうなってんだ。アルカナ掲示板の情報とまったく違うじゃねえか。

水龍に襲われた時に、頭の中に鳴り響いたシステムボイスが正しいならば、

この少女 『モブ名：ローレイのヒメゴ、Named：ローレイ』は、俺の契約召喚モブとなつたわけだ。

そしてラグロア湖から滝を下りて休憩をとつた俺が、まず最初にした行動はアルカナ掲示板を開くことだった。召喚士情報交換スレなどで召喚モブについて調べるためだ。

だが、『召喚士は地雷職ナンバー1』と言われているせいだろうか。

掲示板ではそれほど多くの情報は得られなかった。ひとまず分かつたこととしては

・召喚モブは、『一時召喚モブ』と『契約召喚モブ』の2つに分かれる。

・一時召喚モブは、召喚・使役・戦闘・帰還の流れで、使い捨てとなる

・契約召喚モブは、召喚・使役・契約・保有の流れで、自身の

駒にできる

- ・ 契約に成功すると、名付けの権利を得る
- ・ 保有には、シンクロニシティアイテムが必要
- ・ シンクロニシティアイテム無しで契約すると、保有失敗でモブが消える

・ シンクロニシティアイテムのアイテム等級が足りないと、保有失敗でモブが消える

- ・ 召喚、使役、契約に失敗すると、逆にモブが襲ってくるので

注意

といった感じだ。

アルカナ掲示板の情報通りならば、俺は少女に『ローレライ』という名を与えたわけだから、少女は俺の契約召喚モブとなったわけだ。

つまり召喚・使役・契約の全てに成功したはずで、俺が少女の召喚主なわけで、言うことをきくのが当たり前のはずなのだ。

そのはずなのだが・・・。

「なあ、ローレライ。お願いだから指輪に戻ってくれないか？」

もう一度だけ、俺は丁重に頼み込んでみたが無駄だった。

少女は何事も無かったかのように、相変わらず川面を白い足先でぱちゅぱちゅと叩いて遊んでいる。

ちくしょう。無視かよ。

なかなか言うことを聞いてくれないぞ。
いったいどうしてこうなった……。

……とにかくハゼと合流してから考えよう。

問題はこの少女を棧橋までどうやって連れて行くかなんだが、かなり気紛れっぽいしな。

ほつとくとふらふらとどこかに行ってしまういそうで怖い。

仕方ない。また小脇に抱えて俺が泳ぐか。帰りは川の流れに乗ればいいだけだから、それほど大変じゃないだろう。

そう結論を出して、少女が腰かけている岩へと移動する。

すぐ側に立った俺を、少女が『なに？』と見上げてきた。

俺は無言で少女の腰に腕を回して、ひょいと小脇に抱え上げた。

特に抵抗するわけでもなく、ローレライはされるがままになっている。

こういうのは拒否しないんだよな。

確かモブ名は『ローレライのヒメゴ』だったか。言িয়েて妙だな。ぴったりだ。

ほんと気紛れなお姫様だわ。

そんな事を考えながら、俺は少女を小脇に抱えてラグロア川へと飛び込んだ。

9月16日 夜 帝都・棧橋

「あ、やっと帰ってきた。あんたいたいどこに行っ
た？」
！

棧橋に腰かけながら待ちくたびれていたハゼが、海から上がって
くる音に振り向き 次の瞬間には驚愕で目を見開いていた。

「すまん、遅くなった」
「……馬鹿でスケベだとは分かっていたけど、まさかここまでだ
ったとは……」

そして、ようやく棧橋に降り立った俺を睨みながら、ハゼが物騒
な呟きを漏らした。

何故だか分からないが、とにかくハゼが激怒している。
というか怒りを通り越して冷たくなっている。

なにこの空気。ハゼさん怖い、まじ怖い。水龍よりも超怖い。

「いやいやいや。なんでそんなに怒ってるんだよ。少し遅れたけ

どまだ20時過ぎだろ」

「そんなこと関係ないわよ！……あんたね。自分が今どんな格好してるのか分かってないの？自分の姿をよく見なさい！」

今の俺の姿は　パンイチ。

そして小脇には、薄手のワンピースを身に着けただけの少女を抱きかかえている。

海から上がった直後のために俺も少女も濡れそぼっており、肌に張り付く髪やら服やらが無駄にエロティックだ。

冷めた表情をした少女と目が合う。

『ここはどこ？』少女が俺を見上げながら首を傾げて、目をしばたたかせていた。

・・・。

「ハゼ、とりあえず落ち着け。おまえは大きな誤解をしている」

「へえ………いったいどんな誤解なのかしら……。あんたがそんな格好で女の子に何をすれば不味いことになるのか？洗いざらい吐いてもらおうじゃないの。とにかく。あんたはその攫ってきた子からとつと手を離しなさい！」

「違うんだ！俺は何もしてないぞ！この子は突然湧き出てきたんだ！」

「『画面から二次元キャラが出てきた』みたいな馬鹿な言い訳しないの！」

ちくしょう。本当なのに。誤解だというのに。いっただいどうしてこうなった。

その後、まずは服を着るように命じられ、俺はいつかと同じように正座をさせられた。

そして怒れるハゼに、今日起きた出来事を細かに説明しようやく誤解が解けた後も、『服を着てなかったあんたが悪い』と言われ、さらに説教が続いたのだった。

全裸ならまだしもパンイチの何がいけないと言っのか。男のロマンが分からん奴め。

「つまりこの子がローレライの赤子ってことよね？」

「恐らく」

「言われてみれば確かにローレライの面影が……」

栈橋に腰かけた少女は、白磁のような足先を海面に伸ばしてぶらぶらと遊ばせている。

潮風に吹かれた薄手のワンピースが静かに揺れていた。

そしてハゼが、その少女の背後で膝立ちになっている。

ハゼはアイテムインベントリーから取り出した櫛^{クシ}で、月明かりに照らされた少女の髪を梳^すいていた。

時折、「よろしくね。私の名前はヘイズよ？　ハゼじゃないからね」などと話かけている。

少女のほうは興味無さそうにしながらも、されるがままになっていた。

ときどき気持ち良さそうに目を細めているので嫌がってはいないようだ。

ちなみに俺は、正座のせいで凝り固まった体を伸ばすために、棧橋の上で大の字になって寝転がっていた。

空には落ちてきそうな巨大な月。夜の海が奏でる波の音が心地いい。

襲いくる眠気に思わずウトウトとしてしまう。まったりとした時間が流れていく。

棧橋の先には 横たわる俺。置かれたランタン。少女の髪を梳くハゼ。夜の海を眺める少女。

たったそれだけで、何も無い、何気ない時間だった。

穏やかな空気に、俺はだんだんと夢の中へと引きずり込まれていく。

その最中、少女が鼻歌を口ずさみはじめた。

「ホルスト？」

ハゼがそう聞くと、少女は肯定するかのように鼻歌のテンポを少しだけ上げた。

ホルスト・・・クラシックだったか・・・。

少女の鼻歌を子守唄にして、俺はゆっくりと眠りに落ちていった。

「……こら、ジン。こんなとこで寝ないの」

「ん……ハゼ？」

「そうよ。ってかハゼじゃなくてヘイズ。まあ、もうどうでもいいけど。とにかく早く起きなさい。夕食もまだだし、話し合いたいこともあるから酒場に行くわよ」

ハゼに急かされて目を覚ます。

すると寝転がる俺の顔を覗き込むために、膝に手をおいてしゃがみ込んでいる少女と目が合った。

そのすぐ側には腕を組んだハゼが立っており、同じように俺の顔を見下ろしている。

俺は目をこすりながら体を起して胡坐あぐらをかいた。そのまま欠伸をしながら両腕を大きく伸ばして首をかくかくとほぐす。

そして、こちらを見つめているハゼと少女を交互に見やった。

なんだろう？ 何か違和感があるな……。

「……っお。頼んでた外套がいのとうか。ちゃんと買っててくれたんだな」

「一応ね。あんたにはいい判断だったわ。ほんとに買っておいて良かった。さすがにあのワンピースだけじゃ薄着すぎるわね」

俺が寝ている間にハゼが着せてやったのだらう。

少女は、少し大きめの白い外套をワンピースの上から身に着けて

いた。

フードをすぐ被れるようにするためか白金系の髪も外套の中に入れている。また長い裾のおかげで足首は隠れ、ぶかぶかの袖は手のひらを隠し、ちょこんと白磁のような素足と指先だけが出ていた。

「……後は、靴が必要だな」

「そうなんだけど、私の予備の草鞋わらじを履かせようとしたら顔を背けて嫌がるのよ。だからあんたから履くように言ってくれない？」

たぶん無理だと思うが・・・駄目もとで少女に草鞋を履くように言ってみる。

案の定、ぷいっと横を向かれてしまった。駄目だ。まじで勝手気ままな姫様だ。

「ほら、言った通りだろ？」

「ねえ、ほんとにこの子は契約召喚モブなの？ 召喚主の言うことと聞かないなんて異常よ。今ならまだ許してあげるから正直に言いなさい」

この野郎。あれだけ説明したというのにまだ疑ってやがるのか。そもそもどうして俺が誘拐してきたことが前提なんだ。

「おまえな……、俺を信賴してるんじゃないのかよ」

「もちろん信賴はしてるわよ。でも信用はできないわね。まさか忘れたとは言わせないわよ。誰のせいで”半漁神の巫女”呼ばわりされてるのか。今日なんて露天広場を回ってたら私のギルド腕章を

見たユーザーに『そのギルド名、もしかして半漁神の巫女ですか？』
って聞かれたんだから。

だいたいあんたの行動は斜め上すぎるのよ。今日だって下着1枚
で泳ぎ回ってたし、馬鹿だし、スケベだし、いったいどこをどう信
用しろって言うのよ」

ギルド腕章とは、8月31日の『審判』の日以降に実装された機
能だ。

ギルドに所属するとホログラム製の腕章が左腕の二の腕あたりに
自動生成される。

この腕章は常に手前表示だ。パンイチだろうが重装備だろうが、
常に他ユーザーから見えるようになってる。

またギルドマスターのギルド腕章はゴールド。サブギルドマスタ
ーの腕章はシルバー。ギルドメンバーの腕章はブロンズだ。つまり
俺のギルド腕章はゴールドで、ハゼのはシルバーだ。

まあ、そんな事よりもだ・・・。

「確かに俺も男だ。エロイのは認める。もしかすると平均よりも
ちよつとだけエロイかもしれん。でもな。見知らぬ女の子を攫うよ
うなクズじゃねえよ」

「平均よりもちよつと？ もしかすると？」

「引つかかるとこはソコじゃないだろ！？」

「はいはい、分かってるわよ。半分冗談で言っただけだから
気にしないで。それよりも立ちなさい。そろそろ酒場に行くわよ」

「半分冗談で……残り半分は何なんだよ？」

「聞きたい？ 下着1枚で泳ぎ回るようなあんたにも分かるよう
に、隠さず言っただろうかい？」

「……酒場に行こうか」

旗色が悪い。ごまかそう。

ハゼにジト目で睨まれながら立ち上がると、俺とハゼのやり取りをしゃがみ込んだまま眺めていた少女もゆっくりと立ち上がった。

「指輪に戻る気になったか？」

もう一度聞いてみたが、首を横に振られてしまった。

「じゃあ、ちゃんとして来いよ？」

そう声をかけておく。少女は軽く頷いていた。

そして俺が酒場へと歩き出すと、そのすぐ後ろを裸足でぺたぺたとついて来る。

「なんかカルガモの親子みたいね。あんたとこの子って」

少女の手をとりながら、ハゼが楽しげに笑った。

9月16日 21時30分 帝都・宿屋 ダブルルーム

棧橋から酒場へと向かった俺達だったが、結局は宿屋の一室に集まっていた。

理由はただ1つ、予想以上に少女 ローレライが目立ちすぎるのだ。

一応、道中はフードを被せて連れ歩いたのだが、そもそも10歳前後の小さなユーザー自体が稀有なため、その小さな背丈はとにかく目立つ。

人通りの少ない帝都西エリアという事もあってか、すれ違うユーザーにジロジロと見られる事が多かった。

よって俺達は酒場へと向かう予定を急遽変更し、宿屋に料理アイテムを持ち込んで今後の話し合いをする事にした。

そしてハゼが宿屋NPCからレンタルした部屋は、ダブルルーム1つとシングルルーム1つ。

今日はダブルにハゼと少女が、シングルには俺が泊まる予定だ。

『ツインにしないのか？』俺が聞くと、

『この子と一緒に寝たいからツインなんてありえないわ。ダブルよ、ダブル！』ハゼはそう断言し、少女を後ろからぎゅっと抱きしめていた。

なんか知らんが、ハゼは少女のことをかなり気に入ったようだ。

少女のほうは相変わらず冷めた表情で興味無さそうにしていたが・
・。

そんな感じで部屋の宿泊手続きを済ませた後、俺達はダブルルームに集合していた。

いつもはお互いシングルルームに泊まっているので、俺もハゼもダブルルームに入るのは初めてだったりする。

部屋内にはベッドメイキングされた白いダブルベッドが中央に大きく1つ。

床はフローリングで、天井と壁は白塗りだ。

そして天井には”プロペラがくるくると廻るヤツ”がついている。正式名称は『照明付シーリングファン』というらしい。ハゼがそう言っていた。本当かどうかは分からない。まあそういう名称なんだろう。

またダブルルームの広さは16畳ほど、部屋に入ってすぐ右手にはバスルームと手洗いがある。

汚れることも無いし、排泄することもないので本来ならばバスルームなどには必要ないのだが、どの宿にも必ずついていた。

『ゲーム開発にあたり、宣伝目的でスミイチ社のホテルを忠実に再現したからついている』アルカナ掲示板ではそう言われている。

8月31日の予言の日以降、つまり五感などが現実世界に近づいて以来、シャワーや入浴を求めるユーザーは多い。俺もその1人だ。なぜならあの予言の日以降、何となくだが疲労が溜まるようになったためだ。

アルカナクエスト『審判』クリアを契機に、何らかのシステム変更が入ったと言われている。詳細は判明していない。ただ分かって

いる事としては、食事・睡眠・入浴などの重要性が増したという事だ。

恐らくハゼもバスルームを使っているだろう。
直接聞いたわけでは無いのだが、朝会うと風呂上りの匂いを必ず漂わせている。まあ女つてのは元々風呂が大好きな生き物だしな。
妹もそうだし・・・。

そして最後に、部屋奥の窓際には小さな四角いテーブルが1脚と、同じく四角いワンチェアの椅子が2脚あった。

ちょうど今、俺とハゼが向かい合うようにしてそのワンチェアに座り、少女はすぐ側のダブルベッドに腰かけているところだった。

「だからそろそろトカゲ草原も卒業する時期なのよ」

「トカゲ草原の適正上限Lv7までいくつだ？」

「だいたいLv45前後だって言われているわ。というか、これぐらいは知っておきなさい」

「細かいことは苦手なんだよ。効率考えたりとか」

「まあ、あんたはそういうタイプよね」

持ち込んだ料理アイテムで夕食をすませた俺達は、すでに今後のことを話し合っている。

ちなみに少女も料理アイテムを食べた。

食べたと言っても林檎だけだが・・・。

他の料理アイテムにはまったく興味を示さなかったくせに、俺がデザート用を買っておいた林檎にだけ、少女の視線が釘付けになった。

試しに与えてみたところ、リスみたいに両手で持って、しゃりしゃりと小さな口で林檎を食べていた。

それを見たハゼが『これからは私も林檎にしよ』などと言っていた。餌付けする気だ。ちよつと前に『林檎よりも梨のほうが絶対がいい』と言っていたくせに、なんて野郎だ。

「そっぴや内海の適正上限Lvっていくつなんだ？」

「それはあんたが知らないなら、きつと誰も知らないわよ……」

適正上限Lvとは、スキルカードLvの上昇率制限のことだ。

要は、狩場の適正上限Lvを超えてしまったスキルカードは、そのLv上昇率が鈍くなる。

単純に言ってしまうば、難易度の低い狩場でスキルカードを使い続けるのと、難易度の高い狩場でスキルカードを使い続けるのとは、使用カードのLv上昇率に違いが生じるのだ。

ややこしい話になるが、例えばオークを狩り続けた場合、初心者草原にいるオークと亜人の森にいるオークとでは、ある一定を境にしてスキルカードLvの上昇率に明らかな差が生まれるという。もちろんモブの強さによってカードLvの上昇率が異なるのは当

たり前なのだが、それ以外にも狩場によってスキルカードLvの上昇率に上限が生じてしまうのだ。ただしBOS属性モブだけは例外らしい。

これはクローズド 時に、ゲーム内システムの解析を目的とする有志ユーザー達が集まり、何万匹ものオークを狩ることで判明したシステムだとか・・・。

そしてアルカナ掲示板ではトカゲ草原の適正上限はLv45前後と言われており、そろそろ俺もハゼも次の狩場を探さねばならない時期を迎えていた。

「亜人の森はどうだ？」

「森の深部付近なら適正上限がLv50近いらしいけど、あそこはウィズPTでないと厳しいわね。あんたも行ったことあるなら分かるでしょ？ 深部までけっこう歩くし、魔法と矢なんかのモブの遠距離攻撃がきついのは、亜人の森は。」

それからどつかの馬鹿が下着一枚で泳いでたラグロア川も亜人の森の深部と同じような適正上限らしいわよ。だから川で赤毛熊狩るのも微妙だって言われてるわ」

お互いに深く沈むワンチエアにゆったりと腰を下ろして話し合っている。

ハゼがワンチエアの肘掛ひしかけに肘をついて、『だから無理よ』と言わんばかりに顔の横で軽く手を振った。

そしてその直後の事だった。

ハゼが肘掛の先端をそれぞれ両手で掴んで、座ったまま前屈まえかがみになったのは。

身を持ち出すようにして俺を見上げてくる。

何やら重大な用件を切り出すつもりのようなのだ。

だが、そんな事よりもだ。

羽織千早の隙間から巫女服の白衣と半襦袢はんじゅばんが覗き、さらにその中身まで見えそうになっている。今日1日露天広場を歩き回っていたせいで、少し緩んでいるようだ。

おお・・・もうちょいだ。もうちょつとだけ前屈みになるんだ。

「でね。活動拠点アスガルドを帝都から魔法都市グレイブニルに変更しようと思うの」
「……南砂漠の塔か？」

「うん。どうかしら？」ハゼが首をかしげた。
綺麗なワインレッドの髪が形の良い顎に流れる。その姿勢は前屈みのままだ。

どうでもいい事だが、南砂漠の塔は、『月』・『太陽』・『星』の適正上限がLv50前後、『力』・『魔術師』・『吊られた男』がLv55前後だろうと予想されている。

そして現時点でLvの高いユーザーやネットゲームに慣れ親しんだユーザー、廃人と呼ばれるユーザーなどのコアゲーマー達はそのほとんどが南砂漠の塔へと集結していた。

最近では彼らのような上位層のことを”攻略組”と呼び、俺達のような中堅層を”フィールド組”と呼ぶのが通例となっている。

本当にどうでもいい。

そんなことよりも・・・後少しで胸の谷間が見えそうだ。

がんばれ。誰が何をどうがんばるのか知らんが、とにかくがんばれ。

「だから罨解除技能持ちユーザーを募集するのよ、魔法都市で」
「……一刀流侍と薙刀巫女でか？」

ぶっちゃけ話が左から右だ。

聴覚よりも視覚に全力で集中している。

とりあえず不審に思われぬよう話半分に聞きながら、答えを返しておく。

「確かにそこは評価を下げるポイントよ。でも募集するなら今しかないと思うの。今ならローレライ討伐を評価してくれるユーザーがきつというはずよ。だからフィールド組を卒業して攻略組になるためにも、トカゲ草原から南砂漠の塔へ狩場変更するためにも、魔法都市でギルメン募集をしてみない？」

「……いい……んじゃないか」

背もたれに深く沈んだ体をさらにずらしながら、俺は少しずつ視線を下げていき、そんな返事をした気がする。

いい。……本当にいい……実にいい。なにこの天国。

羽織千早の隙間には緩んだ白衣と半襦袢。

さらにその奥に、紺色のスポーツタイプの下着が見えていた。

大き過ぎない充分な膨らみが2つ、下着にしっかりと包まれながらも、その谷間を見せている。

「それじゃあ明日朝に帝都を出て、魔法都市に向かうわよ？　つて。あんた聞ってる？」

「……ああ。聞ってる聞いて　！？」

相変わらず前屈みのままで首をかしげたハゼに対して、そう答えようとした時だった。

突然白磁のような小さな手が、ハゼの胸元を押さえつけた。

なん・・・だと・・・！？

いつの間にか少女がハゼのすぐ脇に立っており、ハゼの胸元を隠している。

ハゼが「え？」と不思議そうな顔で少女を見上げた。

「おまえ、俺の契約召喚モブだろう！？　なんで隠しちまうんだよー！」

俺は思わずそう叫んでしまった。

俺を睨むように見ていた少女が、不機嫌そうにぷいっと顔を横に向いてしまう。

そして、少しだけ気まずい時間が流れ・・・。

「……へえ、この子はいったい何を隠したのかしら？」
「さ、さあ？　何を隠したんだろうな……」

目を細めながら俺を眺め、胸元を押さえて体を起こしたハゼがそう言った。

目を細めてハゼの胸元を眺めていた俺は、目をそらしながらそう返答した。

駄目だ。これは逃げきれねえ。完全にバレている。

あれは捕食するモノを見つけた強者の目だ。

ハゼさん怖い、マジ怖い。

「……ジン」

「……はい」

「分かってる、わよね？」

ハゼの恐ろしいほど静かな声を聞いてから、俺は黙って椅子から立ち上がり、一步横へと移動した。

そしてハゼと視線を合わせないようにしながら、本日2度目の正座をした。

「復活した交易NPCのおかげで、新アイテムのレシピもかなり見つかりそうなの。だからミスリルインゴットはしばらく手元に残しておかない？　もしもウーツ鋼やダマスカス鋼のレシピが見つかれば、相対的にミスリルの価値が上がるはずよ。上手くいけばミスリルインゴット1個の売値で長蛇のアップグレード費用をまかなえるかもしれないし……どう？」

少女の左肩に乗せた顔を傾けながら、ハゼが俺に問いかけた。

ハゼはワンチエアの上で胡坐あぐらになり、その上に少女を座らせて、か細い腰に両腕を回して少女を抱きかかえていた。さらに少女の左肩に顎を乗せて、愛でるように少女の頬と自分の頬とをくっつけて合っている。

しかし少女は相変わらずどうでもよさそうで、右手の甲で眠たそうな目をこすっている。

そして俺はというと……正座のままだった。

「そのあたりは全部ハゼにまかせるわ」

俺はそう告げて、何気なしに正座を崩そうとするが……。

「正座」ハゼがぴしゃりと言いつつ放った。

普段なら何事も無かったかのようにそろそろ許してくれる頃合なのだが、まだ駄目らしい。

すでに怒りはおさまっているようだが、何やら犬の躰しっけをしている

飼い主のような厳しい態度を崩さない。

・・・これじゃまるで俺が駄目犬みたいじゃねえか。
まあでも今回は、俺が全面的に悪いしな・・・。

「それとね、他にも馬車とか小型帆船ヨットなどのレシピも見つかりそうだったわ。材料となる車輪や帆のレシピなんかが販売されていて、生産職ユーザー達が喜んでいたから……そういえば、その時に『巫女様じゃ、巫女様のおかげじゃ』って拝まれたわね……。ねえ、これっていったい誰のせいだと思う？」

ハゼさん怖い。ちょっと怖い。

とりあえず思い出し怒りはやめてほしい。

しかし突然、そんな空気を吹き飛ばすかのように、少女が大きな欠伸あくびをした。

「ん？ レライはもう眠い？」ハゼがやさしい声でささやく。
いつの間にかハゼによって渾名を”レライ”とされた少女が頭を撫でられながら、それを肯定するかのように目を閉じて、ハゼにその小さな体を預けた。

「それじゃあ、もう遅いし寝よっか」ハゼが微笑みを浮かべながら少女に言う。

「それじゃあ、俺もそろそろ部屋に戻るわ」俺が愛想笑いを浮かべながらハゼに言う。

ハゼがジト目で睨んできた。

正座はまだ崩せない。とりあえず忠犬の目でハゼを見上げておく。

「次はないわよ。いい？」

「……すみませんでした」

「本当に分かった？ もう一度言うけど、そのどうしようもない馬鹿とスケベを治せとまでは言わない。絶対に無理だから。そもそも私はね、胸元を覗かれたことをここまで怒ってるんじゃないの。あんたも男だし、あれは私の不注意もあったと思うてる。でもね、せめて私と真面目な話をしている時ぐらいはもう少しちゃんとして」

「……悪い。本当にすまなかった」

ハゼの真剣な言葉に、俺は真摯な思いを込めて繰り返すように謝罪した。

「うん。じゃあ明日から魔法都市よ。これからよろしくね」

「ああ、よろしく頼む」

ハゼが恥らうように笑った。少しだけ照れくさそうだ。

お互いの間に穏やかな空気が流れる。

その空気の中で、少女はすでに深い眠りに落ちていた。

何となく2人して少女を幾ばくか眺める。

そして俺は痺れた足で慎重に立ち上がると、ハゼに寄りかかって熟睡している少女の両脇に、両手を差し込んで抱き上げてやった。よく眠っている。

椅子から立ち上がったハゼがダブルベッドの掛け布団をめくり上げている。

少女を起こさないように気をつけながら、そこへゆっくりと下ろしたが、少女の目が薄っすらと開いてしまった。夢うつつな少女にハゼが掛け布団をかけ、やさしく寝かしつける。

「ありがとう」

「俺のほうこそ時間をとらせて悪かったな」

「ううん。私も怒りすぎよね、ごめん。……それじゃあ、その…
…おやすみ」

「気にすんな。だいたい俺が悪いんだから。じゃあ明日な。おやすみ」

照れくさそうにしているハゼと、今日最後の挨拶を交わしてから部屋を出た。

そして 「いい奴だよな」

自分の部屋へと戻る途中、気が付くとそんな独り言を漏らしていた。

9月16日 23時15分 帝都・宿屋 シングルルーム

宿屋の自室へと戻った俺は、シャワーを浴びてからシングルベッドに寝転がった。

天井にはダブルルームと同じようなシーリングファンが廻っている。

ダブルルームと違う点といえば、窓際に机と椅子が置かれておらず、その分だけ狭いというぐらいだ。1人で過ごすには充分すぎるほど快適な部屋だった。

現実世界で宿泊していたホテルとは大違いだ。

ゲーム内の宿泊施設がこんなに豪華なのは、ホテルの宣伝目的が理由だろう。

恐らくスミイチ社が実際に経営しているホテルの中でも、指折りのホテルをサンプルにしたに違いない。

そんな事を考えながら廻り続けるシーリングファンを眺めていると強烈な眠気が襲ってきた。

今日1日は久しぶりの休日だったのに、色んな出来事がありすぎた。 鮭・水面ジャンプ・水龍・少女・怒ったハゼ。 いや怒ったハゼはいつもの事だ・・・。

そついやハゼに何かお願いされてた気がする。 何だっけか・・・
やばい、眠い・・・。

『ギルメン募集のためにも、ローレイのことをアルカナ掲示板に書き込んだほうがいいと思うの。 どうせもう私達が倒したのはバレバレなわけだし。』

……そうね。 モブ情報交換スレにしましょう。 あそこにローレイの強さがどの程度だったのか？ 書き込みをお願い。 ついでにラグロア湖の水龍情報もね。 さすがにローレイ以外にも水中BOS Sがいたとなれば、泳ぎカード持ちユーザーの価値も上がるはずよ。

あんたの話を聞く限りじゃ私達だけで水龍を討伐するのは無理そうだし、いずれ発見されるだろうし、一緒に情報公開してアピールしておきましょう。

但し、私達のカード編成やローレライのドロップ、水龍は『女帝』などの詳細情報は隠すこと。それじゃまかせたわよ　え？
私？　嫌よ。だって『半漁神の巫女乙』とかレスされるのよ。絶対に嫌。だからあんたが書き込みなさい』

そうだ。思い出した。アルカナ掲示板だ。

つい先程ハゼに言われた事を思い出した俺は、強烈な眠気を我慢しながら体を起こし、ベッドの上で胡坐をかく。続けてシステムメニューを呼び出してそのままホログラム製のアルカナ掲示板を目の前に表示した。

そっぴや何て書き込めばいいんだ？　特に指定されてないから俺流でいいよな？

顎に手を当て、改めて書き込む文面を熟考する。

やはり情報は分かりやすくしてシンプルなのが一番だ。

よし。さすがにスレ住民達もそろそろ理解できるだろう。やはりアレでいこう。アレが一番分かりやすいはずだ。

そんな感じで文面がまとまったので早速書き込む。書き込みボタンはまだ押さない。

念のために何度も読み直す。そうしてたっぷりと時間をかけてから、俺は書き込みボタンを押した。

・・・完璧だ。パーフェクト過ぎる。自画自賛してアルカナ揭示板を閉じた。

明日はハゼ達が泊まっているダブルルームに朝8時集合だ。システムメニューを開いてアラームをセットする。よし、これでようやく寝れる・・・zzz。

その直後、ゲーム内アナウンスが流れた。

翌朝ハゼに教えられるまで、俺はそれを夢の中で起きた出来事だと勘違いしていた。

アルカナクエスト『星』が達成されました。

【知恵のかけら(1)】

『13の知恵を集めし者のみ。主の資格を得るであろう』

かけら(2) ∴ クルセイダース

かけら(1) ∴ Big Moon Shadow

かけら（１）： 鮫狩男と薙刀女

QUEST ITEM

取引可能／破棄可能

クエストアイテム

かけらを破棄した場合、他のかけら所有者へ轉移します

PKされた場合、PKしたユーザーへ轉移します

PK以外で死亡した場合、破棄と同じ扱いとなります

サメガリオトコ ナギナタオンナ
鮫狩男と薙刀女

【マスター】ZIN：侍Lv44

一刀流Lv36 居合いLv33 無鬨流柔術Lv38 ステ

ツプLv45 ジャンプLv22 泳ぎLv61

【装備】

武器：長鉈（ステイル・桜吹雪）

頭：魅惑殺しのイヤークラス

腕：手甲（黒）

胴：鯉口シャツ（白）

腰：武者袴（紺）

足：草鞋

外着：羽織（水色）

内着：ボクサーパンツ足袋、下着

アクセ：ローレライの感涙（指輪）

（外着：水の魔力系・月見）

（他防具：鉄の魔力系・月見）

（防具ボーナス：DEXUP*6）

【サブマスター】H a z e：巫女Lv41

神道流薙刀術Lv34 演舞Lv36 棒術防御Lv27 祈

祷Lv36 詠唱術Lv34 魔力補助

【装備】

武器：薙刀（ステイル・汎用）

頭：魅惑殺しのイヤークラス

腕：手甲（黒）

胴：白衣

腰：緋袴

足：草鞋

外着：羽織千早

内着：半襦袢、足袋、スポーツタイフ下着

アクセ：なし

（ALL防具：鋼の魔力系・月見）

（防具ボーナス：STRUP*6、DEXUP*6）

アルカナクエスト情報交換スレ 110

1：アカシック

アルカナクエスト情報を交換するスレッドです。

皆で積極的に情報交換し、この状況を打開しましょう！

44：J E T S E T

> 『星』はクルセが攻略中だった

> 円卓は『吊られた男』攻略中

> 戦国絵巻は『力』攻略中

> 魔女巫女同盟は『魔術師』攻略中

> 沈黙は北側開拓中

> 漆黒とBMSはまだ揉めてるらしい

もうクルセ確定でよくね？

45：エジオラ

だな。

46：Holy

ok

47：ビスマルク

にしても『恋人』『星』と立て続けにきたな

<<50 テンプレ更新よろ

48：漆黒の衝撃クロス

ちよい待ち。スレイプニル討伐されたって本当？

49：ビスマルク

情報おせえよ。前スレぐらい見ろ

50：Mailpro

<<48

本当。生産職連中が有志募って討伐した

51：ギャオス

馬の安定供給くるな

52：Mailpro

<<47

くそwww安価近すぎだろwww

ちよつと待ってる

53：Zeeta

でも参加した連中で揉めてるらしいぜ

54：長門

何を？

55：Zeeta

スレイプニルのドロップルートしたのが誰か分からないら

しい

56：長門

うわぁ・・・

57：PIX

案の定ボスドロップで揉めたかwwwwww

58：パストーレ

やだねえ。こわいこわい

59：漆黒の衝撃クロス

<<50

それじゃスレイプニルはアルカナクエストのボスじゃなかったって事？

60：ビスマルク

だから前スレ見る

61：Eliza

<<59

アナウンス流れなかったんだから当たり前でしょ？

62：ミルキイなパパの味

<<59

半年ROMれ

63：Mailpro

確定

『愚者』・・・たぶんユーザーのこと

『世界』・・・たぶん現実世界のこと

『運命の輪』・・・8月1日の予言イベントでクリア済み

『審判』・・・8月31日の予言イベントでクリア済み

『太陽』・・・南砂漠の塔ノ《BMS》がクリア済み

『月』・・・南砂漠の塔／《クルセ》がクリア済み
『星』・・・南砂漠の塔／《クルセ》がクリア済み
『力』・・・南砂漠の塔／未クリア

『魔術師』・・・南砂漠の塔／未クリア

『吊られた男』・・・南砂漠の塔／未クリア

『恋人』・・・ローレライ／《鯨ナタ》がクリア済み

未確定

『女教皇』 『女帝』 『皇帝』 『法王』 『戦車』

『隠者』 『正義』 『死神』 『節制』 『悪魔』 『塔』

未討伐B O S S 情報

亜人の森：オークキング

ラグロア湖：水龍

64：ハブーン

おつ

65：旋風

乙

66：ビスマルク

>ラグロア湖：水龍

これなんぞ？

67：Mailpro

<<66 ヒント：モブ情報交換スレ 53

68：Iro

やっぱいたか、水中ボス

69：天水

内海北側も怪しくなってきたな

70：マリアンヌ

泳ぎカード上げようかな

71：巴御前

うちは陸攻略優先

72：G L A X Y

ラグロア湖にボスいるなら

ラグロア火山にも間違いない何かいるな・・・

73：ビスマルク

<<67 サンクス。見てくる

モンスター情報交換報告スレ 53

1：アカシック

モブの強さ、戦い方、倒し方などを情報交換するスレッドです。

また新しいモブを発見した場合は、できるかぎり報告をお願いします。

皆で積極的に情報交換し、この状況を打開しましょう！

162：ZIN

【報告内容】 新BOSS情報

【モブ場所】 ラグロア湖の湖底

【戦闘報告】

・ローレイ:

討伐済み。最後はブルーホールの底で倒した
参考までに、鮫とローレイを比較すると、

鮫の強さはチワワぐらいになる

・水龍:

ラグロア湖の湖底までは泳いで20分ちよい

ローレイのブルーホールよりは浅い

魅了攻撃(常時)/全体スタン攻撃/ウォーター・ブ

レス、他不明

鮫と水龍を比較すると、鮫の強さはミジンコぐらい
とにかく強い。即行で逃げた

【カード編成】 ひ・み・つ

【備考】

ローレイドroppも、ひ・み・つ

163：ドボルザーク

またお前か

164：mao

鮫基準やめてw

165：咲夜

だから誰も分かんねーからwwwwwwww

166：甲斐

ここまでくると逆にすがすがしいな

167：ボルザック

ローレライのドロップ情報も教えろよ

168：タランティーノ

> ひ・み・つ

うぜえwwwwwwww

169：PIX

水龍とかマジ？どうやって倒すんだよ。

泳ぎカードとか上げたくねえぞ

170：未来

釣り上げて陸で倒すとか？

171：チロル

釣れるの？w

172：ボルザック

そもそもどうやってラグロア湖まで行ったんだよ？

173：未来

ラグロア川を泳いだんじゃないの？

174：雁ノ助

泳げても滝は越えられないだろ

175：マルファイ

クライミングカードで岩壁登ったんじゃないね

176:BackTo

料理人日記スレ 15の771 見て来い

177:鹿煎餅

鮭ふいたwwwwww

178:アロワナ

クソワロタwwwwww

179:エスプレッソ

<<176

ちよつと待て、まじでどうやって滝を飛び越えたw

180:Coco

ジャンプカード？

190:花巻

わたし戦闘型忍者だけどジャンプじゃ3mぐらいが限界だよ？

191:カサディアン

クノイチきたこれ！太もも！太もも！

192:我狼

<<190

戦国絵巻のクノイチさん、チヨリーツス

193:見抜きの魔眼

<<190

とりあえずパンツ脱いだ

194：花巻

やめてー！！！！

195：アフロ教祖

<<193

やるなよ！絶対にやるなよ！

196：ぴっぺん

ナイスネタ振りw

197：見抜きの魔眼

<<194 ふう・・・。

198：五郎丸

見抜きの先生。お勤め、ご苦労さんです。

199：マクレガー

早すぎワロタwwww

200：ぴっぺん

おつw

201：花巻

いやああああああああああああああああああ

202：グレイヤズ・シンセ

夜中なのになんでこんなに元気なんだよw

9月17日 早朝 帝都・宿屋

セットしていたアラームが鳴り響く音で目を覚ます。

ベッドから下りて体を伸ばし、バスルームで簡単に身支度を整える。

最近では寝巻き代わりにしている初期装備から、月見さんが仕立ててくれた和装へと着替えた。

そして変わることの無い仮想の外見を、無意識の内に鏡で確かめている自分に気付く。現実世界の習慣がまだ残っている証拠だ。

俺は小さな苦笑いを鏡に一度だけ映し、バスルームを出た。

ベッドの脇に移動する。チェストの上に置いてあった皮袋と長鉈を剣帯へ装着した。

これで準備完了だ。

シングルルームを出てダブルルームへ。待ち合わせ時間の5分前までにはつけそうだ。

歩きながら長鉈の柄を撫でる。

ザラザラとしたサメ皮の感触がそこにあつた。

いつからだろうか？ 腰の長鉈を左手で触っていないと落ち着かなくなつたのは？

これは仮想世界で身についた新たな習慣だった。

きつと現実世界に戻れた後もこのクセは残るだろう。完全に染み付いてしまった。

普段メガネをかけている人がコンタクトレンズに変えた後も、気

が付くとメガネのズレを直そうとしてしまつ、そんなクセだった。

待ち合わせ時間のちょうど5分前に、ハゼの泊まる部屋前に到着した。

実のところ、こうしてハゼの部屋に朝早く訪れるのは、これが初めてだったりする。

いつもは酒場で待ち合わせているため、なんだか妙な気分だ。

この部屋で合つてた・・・よな？

よく分からない不安を抱えながら、マホガニー調の純木のドアをノックした。

乾いた音が2回鳴り響く。

「ジン？ 開いてるから入っていいわよ」

はつきりとしたハゼの声を聞いてホツとする。

まるで友人宅のチャイムを初めて鳴らす時のような、妙な緊張感だった。

そんな自分を軽く笑いながらダブルルームへと入る。

部屋に入ると、すでに身支度をすませていたハゼが中腰になり、ベッドの横に立っていた。

中腰のせいで形の良い尻が突き出されている。

清く正しい本能に従ってガン見しそうになるが、昨晚のこともあ

るので理性で押し殺した。

「どうしたんだ？」

「レイがなかなか起きてくれないのよ」

中腰のまま首を回し、俺の方へと振り返ったハゼが困り果てた声でそう言った。

尻の いやいや。ハゼの向こう側を見やると、ダブルベッドの上にぺたんと座り込んだ少女がいた。すでに白い外套を着せられており、身支度もすんでいるようなのだが……。眠たげな眼を手の甲でこすり、小さな欠伸あくびを漏らしていた。

眠たげな少女を、ハゼが目線を合わせて説きふせようとしているが、なかなかベッドから立ち上がってくれないようだ。

「朝起きてからずっとこうなの」

今度は背筋を伸ばしてから、ハゼが俺の方へと振り向いた。さらに軽く首を傾げて、「どうする？」と目で問いかけてくる。

昨晚話し合った結果、今日はルイージの酒場で朝食をすませ、すぐに魔法都市グレイプニルに向かう予定だ。そして魔法都市に到着したら、まずは酒場でギルドメンバー募集登録を行うつもりだった。少女の我儘でこの予定を遅らせるわけにはいかない。デスゲームまでの時間は限られている。

「レイ、ベッドから下りろ。ここを出るぞ」

俺はハゼの隣に移動して、ベッドにへたり込む少女に厳しく声をかけた。

しかし少女は気だるそうに首を振るだけで、まったく動こうとしない。

相変わらず我侭な契約召喚モブだ。

だが今回ばかりは妥協するわけにはいかない。

こういうのは最初が肝心だ。ここで少女の我侭を許してしまえば、今後も朝の時間を無駄にする事になる。

そう一考してから、俺は少女の両脇に両手を差し込み、そのままひよいと小さな体を持ち上げた。だらりと少女の体が垂れ下がる。

『……なに？』眠たげな少女がやる気の無さそうな目を返してきた。

俺はそれを無視して少女を床へと下す。

すると、無理矢理立たされる形となった少女が俺の腰にしがみついていた。

「こら。ちゃんと1人で立て」

腰に抱きついて俺の脇腹あたりに顔うずめる少女が、注意する俺を恨みがましそうに見上げてくる。不機嫌な顔を隠そうともしない。

『まだ寝ていたいから寝かせろ』と目で訴えかけてくる。

「駄目だ。時間がもつたない。ちゃんと起きてついてこい。それが嫌なら指輪に戻るんだ」

厳しい声でもう一度強く言う。

今回ばかりは引くつもりが無いという明確な意思を込め、不機嫌そうな少女と視線をぶつけ合った。

少しして少女が顔を背けた。俺にしがみついたまま、横に立つハゼを仰ぎ見ている。どうやら俺が引かないと悟ったようだ。

「起きないならここに置いていく。レイを残して俺もハゼも魔法都市に向かう。それでいいんだな？」

隙を与えるわけにはいかない。

さらなる言葉に、少女の顔が『……むう』とかわいらしく歪んだ。眉間に皺を寄せて、少しだけ頬を膨らませている。

そんなダダをこねる子供に成り果てた契約召喚モブが、俺の左手中指にはめられた指輪　ローレイの感涙と、俺の顔とを何度も見比べた。迷っているようだ。

我尽を貰くのか？　起きてついてくるのか？　それとも　。

そう思った瞬間だった。

突然。少女が青い霧となり、指輪へと吸い込まれていった。

「うつわ、ほんとに契約召喚モブだったんだ！？」

その光景に、黙って様子を見ていたハゼが心底驚いた声をあげる。この野郎。昨日あれだけ説明したというのに、まだ疑ってやがったのか。

9月17日 早朝 南街道

「ちょっと可哀想なことをしたわね」

「いいんだよ、あれで。目立つ前に指輪に戻ってくれて助かったじゃねえか」

「そうなんだけどね。今朝は林檎を食べさせてあげようと思ってたから、少し残念」

「……相変わらず面倒見のいい奴だな」

「昔からよく言われるわ……。実はさ、私の家って道場なのよ。それでけっこう小さな子供も通ってて、面倒をみる人が多いの。だからつい世話を焼いちゃうのよね……。ほら？ 子供って危なかしくてなんだか放っておけないじゃない？」

俺達は視線を前に向けたまま、なんとなく今朝のことを話題にしていた。

2人並んで歩いている。今は魔法都市グレイプニルに向かう道中だ。

つまりは、帝都の南門から魔法都市を目指して南街道を下っている最中だった。

この南街道を行き交うユーザーは多い。

ざっと見た感じだと生産職ユーザーが大半だ。風呂敷やリュックを背負っているユーザーとよくすれ違う。帝都と魔法都市を行き来して、少しでも多くの利益を上げようというユーザー達だ。

風呂敷やリュックは、腰の小さな皮袋と同じでインベントリー効果があり、皮袋よりも多くのアイテムを収納できる。但し、動作に制限を受けてしまうので注意が必要だ。素早い動作ができないのだ。要は重装備と同じ扱いとなる。

ちなみに、こういったインベントリー効果のある収納系アイテムは1人1つしか装着できない。また耐久度がゼロになると、その中身が散らばる仕様だ。散らばったアイテムは他ユーザーにルートされてしまう。だからアイテムインベントリーは、戦闘職ならば初期の皮袋を使い続けるのが一般的だ。初期配布されたアイテム類は壊れないからだ。

そうして、すれ違うユーザーを眺めながら何気ない会話を交えていると、ある事に気付いた。どうも俺達のギルド腕章に気付いたユーザーが、チラチラと視線を投げかけてくるのだ。それもかなりの頻度で。

やはりローレライを討伐したという事実が大きいようだ。アルカナ掲示板のせいで情報はすぐ行き渡る。俺達のギルド名も同様だ。おかげで知名度が上がっている。なかなか有名になったもんだ。

さらには、グズった少女のせいでまだ確認できてないが、昨晚のアルカナ掲示板への書き込みも我ながら完璧だった。

あの書き込みを目にしたユーザーならば、きっと俺を賞賛し、知的なイメージをもったに違いない。

これでは赤禪さえあれば、さらにワイルドなイメージまでアピールできる。

知的とワイルドを併せ持った男・・・なんというパーフェクト。自分で自分が恐ろしくなる。このままいつてしまうと、間違いなく

婦女子にキヤアキヤアと騒がれる罪深い男になってしまつたろう。
今は思春期特有の照れくささのせいで少しばかり素っ気無いが、
きつとブラコン気味な妹も心配するであらう。

『兄さん、あまり遠くにいかないで下さいね』そう言うに違いない。
間違いないね。

・・・だが、仕方のないことなのだ。すまぬ、妹よ。
モテる男というのは、いつの時代も罪深いものなのだ。

出会った瞬間にモテる男の3段活用　ドキ・好き・抱いて
が起きてしまい、多くの女性と一夜を共にせざるをえない状況が生
まれるものなのだ。

「……ねえ。なんだかさつきから私達のことをチラチラ見てくる
ユーザーが多くない？」

「ローレライ討伐から2日経ってるしな。俺達の評判も定着して
きたんだらう。それに昨晚、ローレライ討伐や水龍情報も書き込ん
でおいたしな」

「へえ、ちゃんと覚えててくれたんだ。昨日は夜も遅かったから
まだ書き込んでないと思ってた。わざわざありがと」

礼を述べるハゼに対して、

「気にすんな。当たり前のことをしただけだ」と謙遜けんそんしておく。
いずれにせよ。これでギルドメンバー募集も上手くいくはずだ。

昼前には魔法都市に着ける。

アルカナ大陸は楕円形の大陸のため、帝都から東西の町（大和の
町と港町スキーズ）へは徒歩で5、6時間ほどかかるが、南にある
魔法都市ならば2時間ほどで到着する。

よって昼頃からギルドメンバー募集をかけて、早ければ今晚にでも新しいギルドメンバーが見つかるはずだ。美人でスタイルのいいお姉さんが、俺の評判を聞きつけて新しくギルドメンバーになってくれるはずなのだ。予定調和というやつだ。

「すぐ見つかるかな？ 新しいギルドメンバー」

「安心しろ。大丈夫だ」

「うん、そうよね」

確かな自信をもって断言する俺の声を聞いて、隣を歩いていたハゼがうれしそうな声を上げた。

目指すは魔法都市。

目的は、畏解除技能持ちユーザーを迎え入れて南砂漠の塔を攻略する事。

デスゲーム開始までは遅くとも約一ヶ月。早ければ約一週間。

期待と不安を胸に秘め。俺とハゼはただ前だけを向いて歩き続けた。歩みを止めるつもりなど無い。止めることなどできない。長い長い日々の始まりだった。

《鮫狩男と薙刀女》

通称：鮫ナタ

としての幕開けだった。

- 9 - (後書き)

以上で第4章は終了となります。

ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます。

第5章についてですが、年内は難しいです。

私の手元のほうでは、すでに第5章3話までの下書きが完了しておりますが、今までと同様に第5章の下書きをほぼ完成させてからになると思います。

今後の具体的な予定については、改めて年末年始頃に活動報告に記載したいと思います。

よろしく願います。

そして最後に、コメント・感想・評価・お気に入り登録・メッセージを下さった皆様。ありがとうございます。とても励みになりました。

さらに今回は素適なイラストとレビューまで頂けました。本当にありがとうございます。

申し訳ないことに、返信が遅れておりますが、必ず目は通しております。

今後ともどうぞよろしくお願いします。

/ 2011・11・20 猿野十三

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8415w/>

- Arcana Online -

2011年11月20日12時45分発行